

青森県南部地方の盆棚

－ 青森県の盆棚(2) －

増田公寧¹⁾

Changes in Bondana (Stand for Food and Drinks Offered to Spirits of the Deceased and Ancestors Who Are Believed to Come to Bon Festival Events) in Nambu District, Aomori Prefecture, Northern Japan
MASUTA Kimiyasu

Key Words : 盆棚、精霊棚、墓前飲食

はじめに

盆の期間に限って屋内外に設置される臨時の祭祀装置については、盆に去来するとされる死者の霊に対する人びとの心意を表象するものとして、すなわち、日本人の霊魂感覚を考える手がかりとして、早くから注目され、分析されてきた。その祭祀装置とは、盆棚、精霊棚、外棚、お客棚などと呼ばれるものである(以下盆棚)。

「盆棚」とは、これまでの研究を踏まえるならば、「盆の精霊祭りのために特別にしつらえられた祭壇」(臨時の魂棚)を一般的な定義としながらも、棚自体の仮設性・臨時性は要件ではなく、仏壇つまり「常設の魂棚」²⁾で盆の精霊が祭られるならば仏壇もまた「盆棚」であるといえる。また、上記の目的のために設えられるならば、「棚」の形を取らないもの、例えば置き石だけの場合やコモを敷くだけの場合を含め³⁾、形態や場所を問わない。また、本仏・新仏(新精霊)・無縁仏(外精霊、客仏、餓鬼)などの対象の別を問わない。すなわち「盆の精霊祭りの祭壇すべて」⁴⁾が「盆棚」であるといえる。なお、棚にはさまざまな装飾や供物が配置されるが、装飾と供物は棚と不可分の構成要素として、盆棚と一体のものとして捉えられる。

「盆棚」に関するこれまでの研究については前稿⁵⁾で述べたので概略を述べるに留めるが(1.1.参照)、およそ柳田國男によって示された考え方を出発点として、棚の位置や構造、供物などの表現に三種の霊の位相を見いだすもの、あるいはそのような分析視点について批判的に検討するものであった⁶⁾。同時に、それらの霊に対する表現には地域的な異同が見られることから、地理的分布の偏りを変遷の過程(時間差)として読みとろうとする試みも行われてきた⁷⁾。しかし、いずれも全国を視野にいられた研究は多くはなかったことが指摘されている⁸⁾。理由の一つとして、特定の地域を対象にした個々の調査は、あらかじめ設定された共通の目的や方法のもとに行われるわけではないことから、全体としては豊富な情報の蓄積がありながら、記述に統合性を欠き、広域的な比較研究のデータとして利用しにくいという事情があった。例えば、全国各地の盆棚を分類する場合に、棚の形態についての視点を欠く報告が多いために困難であったという指摘がある⁹⁾。

視点の欠如に加え、調査の継続という課題もある。例えば本稿で取り上げた南部地方については、自治体誌編纂に係る調査から概ね50～30年、青森県史編纂に係る調査から20年以上を経た現在、その後の変化や現状がわからない(1.2.8.参照)。

このような事情から、盆行事のように調査研究の豊富な蓄積が既にある習俗であっても、対象によっては必要なデータを既存の資料に求めることは難しく、また現在の状況を把握できない。いま、あらためて記録することは無駄ではないと考える。

本稿では、青森県南部地方を主な対象地域として¹⁰⁾、聞き取りや撮影等による実地調査を行い、屋内外の盆棚を中心とした祭祀装置・祭祀空間(盆の総合的な時空間)の変化と現状について記録し考察した。聞き取りで得られた情報は、主題から外れるものについても併せて記した。

本稿執筆にかかる県内外の資料調査・資料収集・聞き取り調査は、すべて勤務時間外・私費によっておこなったものである。

現地でお話を伺った日:岩手県二戸市(20230814)、青森県三戸郡田子町(20210815)、三戸郡階上町(20230814)、三戸郡旧南郷村(20230814)、三戸郡新郷村(20210815,20230814)、三戸郡旧南部町(20210814)、三戸郡三戸町(20210814,20230814)、三戸郡旧名川町(20210815)、上北郡旧下田町(20210814)、三沢市(20210814,20220815)

1.1. 盆棚をめぐる研究

盆の一連の習俗のなかで、「盆棚」にまつわる事象については、棚の位置や構造、祭式に着目したデータの収集と並行して、それらのデータを霊の処遇という観点で分析する研究が行われてきた。その研究には、二つの立場がある。霊に対する差別の意識が祭祀の空間(場)や祭式・供物などの差として積極的に表現されているとみる立場と、その差は屋外から屋内祭祀へと至る過程で生じた形式的な差異(意識をとまわらない行為の残存)に過ぎないとみる立場である。前者は、最上孝敬、藤井正雄、伊藤唯真らの見解であり、後者は喜多村理子、高谷重夫らの見解である。詳細については前稿¹¹⁾で述べた。

近年は、関沢まゆみによって、盆棚の設置場所による三種の霊の区別(差別)の有無と、墓前飲食の有無を分析指標として組み合わせることにより、全国的な視野で民俗情報(地域差)を歴史情報(時間差)として読み解く研究が行われ¹²⁾、比較研究

1) 青森県立郷土館主任学芸主査 〒030-0802 青森市本町二丁目8-14

法の有効性が再評価されている。課題として、更に日本各地の事例を集め、地理的なメッシュを細かくした精緻な分析の必要性が指摘されている¹³⁾。この課題に応える研究としては、藤井弘章が、和歌山県内で行った綿密な調査と記録が挙げられる¹⁴⁾。藤井は特定の地域内の情報にも、地域差や変遷を考える要素が豊富に含まれていると述べ、地域での重点調査の必要性を訴えるとともに、盆棚の実態が体系的に把握されていない和歌山県内の事例を丹念に収集している。

広域的な視野に立つ研究が行われる一方で、小池淳一は、盆行事は基本的にイエを単位として行われることから、盆棚を家ごとの先祖祭祀の「歴史」(広義の歴史)が蓄積され表出される場であると捉え、盆棚を構成する事物から個々の家の「歴史」を掘り下げる研究を行っている¹⁵⁾。

1.2. 青森県内における従来の調査記録と課題

戦前の南部地方の盆習俗については、小井川潤次郎(1888-1974)の一連の著作が参考になる。昭和に入って編纂された各市町村の自治体誌にはない古い事例が豊富に詳細に記されている¹⁶⁾。戦後は、『大館村誌』(1959)、1967『三沢市史』(1967)、『三戸郷土史』(1969)など、研究者個人によって著された郷土史に続き、『十和田市史』(1976)、『階上村誌』(1977)、『下田町誌』(1979)、『田子町誌』(1983)、『新郷村史』(1989)、『名川町誌』(1995)、『南部町誌』(1995)、『福地村史』(2005)、『新編八戸市史 民俗編』(2010)などの各自治体による自治体誌(史)の編纂が相次いで行われ、質・量に濃淡はあるものの事例が収集されている。並行して博物館による調査も行われ、青森県立郷土館による『「小舟渡の民俗」調査報告書』(1982)、『「世増・畑内の民俗」調査報告書』(1989)、『「西越・田中の民俗」調査報告書』(1990)に事例が豊富に収録された。この頃、農文協から出版された『聞き書き 青森の食事』(1986)も、南部地方の盆の食と供物を知るうえで参考になる。その後、青森県史編纂に係る調査が青森県によって行われ、南部地方を対象とした『馬淵川流域の民俗』(1999)と『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』(2001)が刊行され、『青森県史 民俗編 資料 南部』(2001)にその成果がまとめられた。追って刊行された『青森県史 通史編3 近現代 民俗』(2018)は県による調査の集大成である。

以下、従来の調査研究による既述の事項を確認する。項目立ては、『青森県史 民俗編 資料 南部』第五章「年中行事」を参考にした¹⁷⁾。なお、()内に記した自治体名は、その地域にその習俗がみられることを示すと同時に、当該の自治体誌(史)を出典としていることを示す。その他の出典については注を付した。

1.2.1. 七日盆

(1)呼称 ナノカボン(ナヌカボン)やナノカビ(ナヌカビ)と呼ぶ。各自治体の報告書には、「ナノカボン」(十和田市、南部町、三戸町、田子町、八戸市、階上町)、「ナヌカボン」(三沢市、名川町、八戸市)、「ナノカビ」(十和田市、南部町、名川町)、「ナヌカビ」(名川町、田子町、八戸市、階上町)、「ナノゲアビ」(南部町)などの呼称が記される。八戸方面では「ナヌガビ」という言い方は聞かない、という記録もある¹⁸⁾。

盆が7月1日に始まるという意識のもとでは、例えば新仏のある家ではタカウロウを7月1日に掲げていたが、昭和20年代初頭なると7日にタカウロウを立てる家が多くなっていった¹⁹⁾。

(2)七浴七食 「七回水を浴びる」「七回飯を食う」「七回着替える」といった伝承が、ほぼ全域で採録されている(三沢市、十和田市、七戸町、下田町、名川町、三戸町、田子町、八戸市、南部町、階上町)。「七かへり水を浴び、七かへりハットを食ふ」(傍線筆者)²⁰⁾という八戸の事例には、食の地域性が表れている。町場の子どもたちは「タライに水を入れて浴びた²¹⁾といい、「川で洗髪・洗濯すると汚れがよく落ちる」(十和田市、八戸市)²²⁾、「朝早く行燈を洗う²³⁾、メドツにとられないようにキユウリを天王様へ供えるといつて川に流す²⁴⁾などの「水」にまつわる伝承がみられる。また、この日の天候がよいと豊作であるという(十和田市、七戸町、南郷村)。

(3)イタコの口寄せ 七日盆にイタコの口寄せが行われた。もっとも盛大であったのは法運寺(百石)の「いたこまつり」で、他に善賢院(七崎)、善照院(田茂木)、青龍寺(尻内)、南宋寺(糠塚)などで行われていた²⁵⁾。

(4)墓ハライ 墓地の参道の整備(キリハライ)、墓や家まわりの整備などは、7日に行うケースが一般的である。かつては、墓地の掃除は年に1度、7日のみというケースが多く、前年の迎え火や四十八燈籠の残骸がそのまま放置され、雑草が生い茂り、「甚だ以て凄惨なものがあるのだつた」(昭和22年)²⁶⁾という。

1.2.2. 盆棚

(1)屋内の盆棚 この地方の屋内の盆棚の様態については、小井川潤次郎の著作に詳しい。大別すると、「仏壇がそのままタナになったし、さうした家の方が大部分であるが、別に精霊棚を組立てる家もあつた²⁷⁾」というように、仏壇を盆棚とする場合と、別に盆棚を設える場合があつた。別に設える場合には、仏壇とは別の部屋に設える場合と、仏壇の前に設置する場合があつた。

①設置場所

a.仏壇とは別の部屋に設える場合 ザシキ(十和田市)や床の間(十和田市、三戸)に設える。

b.仏壇の前に設える場合 仏壇の前に三段の棚を置く(十和田市)²⁸⁾、大きなテーブルや机を置く(十和田市、下田町、田子町、新郷村、八戸市、三沢市)²⁹⁾というケースがみられる。棚には、カケソウメンやホソメ、糸で結んだコリンゴ、ササゲなど

を下げた(十和田市)。「モナカでできた飾り物」という記述もあるが、それをどうするのが記されていない(新郷村)。

②棚の様式

a.コガの盆棚 小井川潤次郎の記録によれば、南部地方ではミソコガの上に板を渡した盆棚が古いようである。たとえば、高さ4尺以上の味噌コガに板を渡してゴザを敷き、位牌を仏壇から出して並べて座敷に出した(階上村道仏)30)、という記述や、「もとは高さ四尺の上もある味噌槽^{こが}をデキー座敷に出し、戸板か板を渡し、ゴザを布き、その上に仏壇の位牌などを移してならべた。階上村ではそちこち、川内村、是川村、館村、野澤村など方々でまだやつてゐた」31)、あるいは「十三日の夕方精霊棚をかけた。通清水ではこの棚の中に樽の一つ入れておいた。階上村の方で味噌^{こが}の上に棚を使ふのとおなじことを、もとやつた名残かもしれない。この樽には何の使ひみちも無いからである」(傍線筆者)32)などの記述が見られる。十和田市、下田町、名川町でも、古くはミソコガ(味噌桶)／漬物コガに戸板をのせてコモを敷いたといい、コガにのせた戸板の上には、花莫菫が敷かれていた(昭和32年)33)。

b.キシネバコの盆棚 八戸市石手洗では、味噌コガではなくキシネバコを使っていたという34)。

c.階段状の棚 三段の棚(十和田市、下田町、田子町)や、五段の棚(田子町)35)が報告されている。「ガンギ板」(ガギ板)といって、幅1間程度のカギ状の板を用いるという。この様式は最近のもの(昭和54年当時の記述)であるという証言もある(下田町)。棚の具体的な姿がわかる写真が『青森県史』民俗編資料南部に1枚掲載されている(「新盆を迎えた家の盆棚(下田町木崎)」)36)。

階段状の祭壇を用いる前は、リンゴ箱を(8個くらい-南部町)重ねて祭壇を作った(南部町、田子町)という記述もある。ただ、その重ね方については記されておらず、階段状に積み重ねたのか、ブロック状にまとめたのかは分からない。



下相米の盆棚

図1 盆棚(『田子町誌』)

③棚の周囲の構築物 2通りの形態がある。**a.**棚の周囲に4本の竹を立てるものと、**b.**鳥居状のゲートを組むものである。

a.竹を四方に立てる 四方に竹(下田町、田子町)を立てる、四方竹の上方からヨウラクだといって、煎餅、ササゲ、ビスケットなどを糸でぶら下げて飾る(下田町)、四方竹に盆花を縛り付け、めぐらした縄にコンブやハットを下げて飾る(田子町)、うどんを下げる(階上町)という事例が記録される。

b.竹を鳥居状に三本組む 棚の奥に、竹を昆布で結んで作った高さ5尺くらいの鳥居状の構造物を立て、コンブを絡める(田子町)、棚の前に青竹2本立てて、上部に竹を結いつけ、盆花を結びつける(田子町)、棚の脇の柱に、コンブ、煎餅、リンキンなどを吊す(南部町)などの事例がみられる。

④棚の周囲 八戸の浜ではハマナスを数珠つなぎにしたものを下げ、マチ・ムラ間わずリンゴ(地りんご)を糸につないで上から左右に下げ、その間に色つきの生うどんを下げた37)という事例や、棚に糸を張り、小さいリンゴをつないで吊し、干しうどんを懸けた38)という事例がみられる。ただし、昭和32年の時点で、「昔は饅頭もかけたが、もう何十年も掛けない。五色のが売りに出なくなつた」39)とも記されているので、うどんをかける習俗はその頃には廃れていたようである。また、「久慈近くまで行かぬと旗は下げなかつた。青栗も使わなかつた」という40)。

⑤棚の敷物 戸板の上にゴザ、あるいは花莫菫を敷いたという41)。

(2)屋外(墓地)の盆棚

墓地の棚は「ホカイダナ」(十和田市、下田町、名川町)と呼ばれる。昭和14年の時点で、墓地に「棚をかくところそのままの所とがあつた」(昭和14年)42)。当時の棚は、又のある枝4本に横木を渡したもので、枝のかわりに竹を使うところもあった43)。「墓の前に大抵は柴か竹かで棚を作りその上にホウガイした」44)という。

墓前の棚の形態についての近年の調査記録は少なく、「墓の前に棒を四本立てて横木を結わえてタナを作り、その上にコモを敷き供物を供える」45)、又のある細い枝に横木を4本渡す(十和田市)、構造物を置かず、地面にコモを直接敷く(十和田市)という記述がある程度である。写真も少なく、『下田町誌』と『小川原湖・三本木原大地の民俗』46)に「墓の供物(三沢市淋代)」に各1枚が掲載されているだけである。後者は白木の位牌が中央に据えられている。形態についての記述も写真もなく、ただ「棚を設置する」と記されているのは、南部町、名川町、新郷村、八戸市、階上町である。

墓前の棚を7日に設置するケースがみられるが(八戸市)、多くは「ホカイ」と同日の14日である。階上町では、昭和50年代なかばころには棚が見当たらなくなつたという(階上町小舟渡)。

1.2.3. 供物

(1) **供物の運搬** 小井川潤次郎の記録によると、当初は供物の運搬にコモが用いられていた。供物と、それをのせる葉、果物、菓子などを一緒にコモに包んで墓場に持って行って供えたという。これを「ホウガイ」「ホウガイする」といい、ホウガイは行器のことで、行器(ここでは、コモのこと)はのちに重箱に変わった(昭和32年)47)と記す。つまり、ホウガイ=行器は当初コモであったが、重箱に変わったこと、昭和32年頃は重箱が一般的になっていたことがわかる。各自治体の報告書でも、行器として「重箱」を使用したと記すものがある(福地村、田子町)。その後の変化については、各自治体史では言及されていない。

(2) **敷物** 供物は「コモ」の上のせるが、コモはムギカラ(田子町)、マコモ/ガツギ(十和田市、八戸市)などで作られた。八戸では、八太郎沼が盆のコモの原料となる真菰の一大産地だった48)という。そして真菰のことを是川では「ショウリョウコモ」(精霊菰)といった49)。コモの大きさは2尺3寸×1尺5寸(約77cm×50cm)で、昭和32年の価格は1枚25円、50円、75円、100円と日が経つにつれ高騰(「未曾有の高値」)したという50)。コモが高かったので、「櫛引では今年このコモを墓にホウガイしたあと持って帰つたと言ふ。十六日に流すためだつたといふが今年をはじめでたとあつた」(昭和32年)51)というように、コモを墓地から持ち帰る人もいたようである。コモは、屋内の棚と屋外の棚それぞれに1枚ずつ、計2枚買うのが常であった52)。

(3) **うつわ** マチの人たちは「蓮の葉」、農家ではその他さまざまな葉を利用したようである(カボチャの葉、桐の葉、ササゲの葉など)53)。各自治体の報告書では、蓮の葉(十和田市、名川町、八戸市。八太郎沼から睡蓮の葉を売りに来たという54)、柏の葉(カエバ/カイバ:十和田市、七戸町、下田町、福地村、名川町)、桐の葉(十和田市、名川町)、葡萄の葉(十和田市、名川町)、葉いもの葉(田子町)が挙げられている。容器の変化についての言及はみられないが、「現在では、墓石も新しくなったことから、折(箱)に供物を入れて備えている」と『青森県史 民俗編 資料 南部』では説明している55)。また、『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』に「墓の供物(三沢市)」の写真が1枚掲載されており、折に入った料理と、キュウリ、カド、菓子がコモの上に並ぶが、折という容器の形式について解説はない56)。

(4) **供物の内容** 「ホウガイというのは仏さまに供物を供げることで、精霊棚に供げるのと同じ物だつた」(小井川1939,p.150)というように、屋外(墓前)の供物も屋内の盆棚の供物も基本的に同じである。仮に熟饌と生饌にわけて下記に記す。

① **熟饌** 赤飯/オゴワ/フカシ/アツギメシ(十和田市、七戸町、下田町、福地村、南部町、名川町、三戸町、田子町、南郷村、八戸市、階上町)。不祝儀のときの赤飯を「アツギメシ」と言い分けた57)。ニシメ(十和田市、七戸町、下田町、福地村、名川町、南部町、三戸町、八戸市、階上町)、キュウリモミ/キュウリの酢の物(下田町、福地村、名川町、三戸町、八戸市、田子町、階上町)、ナスヤキ(十和田市、下田町、名川町、南部町、三戸町、八戸市、階上町)。ナスの皮をむいて縦に4~6つに割り、串(焼き豆腐に使う串で、ヤマウコギ(オノウツギ)を削って作った串に刺して焼き、胡桃味噌をつけてから串から抜いて鍋に入れ、酒を注いで蒸しにしたもの58)。ソバアエモノ/ソバと豆モヤシの酢味噌和えなど(八戸市)、サヤママ/枝豆(七戸町、八戸市)、カボチャの煮付け(福地村、田子町、階上町)、テンプラ(三戸町、田子町59)、(五色の)ウドン/ハットウ/ソバハットウ(福地村、三戸町、南郷村、八戸市)、麩餅/ケモツ/ケモチ(麩をもんで作った残り汁を煮詰めてドロドロにしたもの。麩(もち)(十和田市、階上町。かつて食べていたという記録としては下田町、南部町)、コウセン(福地村)、生麩(十和田市、南部町、階上町)、麦餅(南郷村)、コンニャク(福地村、名川町、階上町)、豆腐(階上町)、テン(階上町)、饅頭などの菓子、煎餅(下田町、名川町)。

上記のうち、赤飯、煮染め、キュウリモミ、ナスヤキ、ソバアエモノは特に南部地方で共通している。盆の供物を示す具体的な写真資料は乏しいが、『青森県史 民俗編 資料 南部』に「供物(下田町木崎)」の写真があり、カエバに赤飯などがのせられている様子がわかる60)。

② **生饌** 小井川潤次郎によれば、八戸では「生のままで供げられるものは青物、果物のある限りの物だつた。そのうち欠かされぬものに縞瓜と百合とがあつた。枝豆も必ず用意された」61)という。以下は各自治体による記録である。

ホトケの鏡=テン/カガミテン、トコロテン(七戸町、下田町、福地村、南部町、八戸市、三戸町、南郷村、階上町)。具体的なサイズは厚さ6cm程度×葉書大の2枚(七戸町)、10cm×15cmの四角形(下田町)、ホトケのショイナ/背負い縄=コンブ(下田町、七戸町、福地村、名川町、田子町)、ホトケの枕=キュウリ/マウリ(マクワウリ、モリオカキンカ)/シマウリ(十和田市、下田町、七戸町、八戸市)。シマウリは、昭和32年の時点で5~6年ほど目にしていない62)という。ホトケの乗り物=ナスとキュウリ「キュウリの馬とナスの牛」(十和田市、三戸町、南郷村)、「キュウリの牛とナスの馬」(福地村)、「キュウリとナスの馬」(八戸市)、「キュウリの牛とナスの牛」(福地村、田子町=「ナスは黒いので和牛である」)、「キュウリの牛」(南部町、新郷村)。「牛の角と足は割箸・オガラ・ヤナギで作り、尻尾はキミの毛」(田子町)、「キュウリの牛は、頭を下げたものと上げたものを作る」(田子町)。これら野菜の牛馬にホトケが乗って往来するとされる。また、ホトケが田畑を見て回るための乗り物であるとされる伝承もある(三戸町)。一方、ナス・キュウリには足を付けて牛馬にしない(八戸市)というところもある(昭和32年)63)。

ホトケの船=ユリネ(十和田市、福地村、名川町、八戸市)=茹でてバラしたもの(福地村、八戸市)、ホトケの杖=カド/コウホネ(の根)(十和田市、下田町、名川町、八戸市)。カドは八太郎沼からコモと一緒に売りに来た(八戸市)という64)。ホトケの数珠=ハマナス(八戸市)。糸で数珠状につなぐ65)。ホトケのアタマ=地リンゴ(シブリンゴ・アマリンゴ)(下田町、南郷村、八戸市、久慈市)66)。「このリンゴを久慈(九戸郡)ではホドゲサマの頭だといつてみた」という。糸でつないで吊る。青豆

／枝豆(十和田市、八戸市)、**トウモロコシ**(十和田市)、**スイカ**(十和田市、下田町、福地村)、**トマト**(下田町、福地村、**モモ**(十和田市、下田町)、**ミカン**(南郷村)、**豆もやし**(名川町)。

(5)**無縁仏への饗応** 無縁仏についての言及はほぼ見られない。祭壇の脇か下に別に供える(十和田市、下田町)、(無縁仏に)供えたものは食べずに16日に流す(十和田市)という。

(6)**盆花** ポンパナ(キキョウ)、ナデシコ、アワバナ(オミナエシ)、ギボウシ、ユリ、ミソハギ、ハチス(むくげ)、竹花(石竹)、オシヤラクハナ、オバナ、カラアオイ、ハギ、ホウセンカなどが、盆の花として挙げられる。これらを山から採ってきて、あるいは市日に購入して供える。

1.2.4. 飲食

(1)**墓前飲食** 酒を持参して墓前で火を焚きながら飲んだ(十和田市)とか、供物はお墓で食べてくる⁶⁷⁾(七戸町、三沢市根井・淋代)という記述がみられる。

(2)**供物の奪取(ホゲサラエ)** 供物は拝み終わらないうちに子どもたちがコモごとごっそりと持って行くのが黙認された(十和田市)。墓参りには1戸あたり10人も20人も子どもたちが来て拝んだが、2~3年前(昭和50年代なかば)から、墓が汚れるということで、14日の墓参をしなくなった(階上町小舟渡)といった記録が見られる。

1.2.5. 墓参

(1)**呼称と日時** 墓参を「ホウカイ」「ホウガイ」(三戸町、八戸市)といい、『新編八戸市史』では漢字の「法界」をあてて説明している⁶⁸⁾。ホカイの日時は13日夕(三戸町)、14日朝(三沢市、七戸町、名川町、八戸市)、14日夕(三戸町、階上町)など、まちまちである。特に、14日の早朝の墓参を「暁(朝)ホウカイ」(三沢市、八戸市)といった。

墓参の日時の変遷については、「ホゲとかホガイといい、十四日に行っていたが、戦後徐々に十三日に行くようになった」⁶⁹⁾という。

(2)**よそおい** 礼装や新調した衣装など、身なりを整えて参拝する(三沢市、十和田市、南部町、三戸町、新郷村)。

また、「盆前はありがとうございました」と挨拶する(南部町、三戸町)。

(3)**ホトケ拝み** 主に14日・15日に新仏のある家を拝んでまわる(十和田市、下田町、南部町、三戸町、田子町)。

1.2.6. 盆の火

(1)**呼称** 迎え火は「マツアカシ」(下田町、福地村、南部町、名川町、三戸町、田子町、八戸市、階上町)、「カドビ」(三沢市、十和田市)、「カバビ」(三沢市)、「カガリビ」(十和田市)、「タイマツ」(八戸市、階上町)などの呼称で、墓地や家の門口で焚くのが一般的だが、井戸、便所などにも古くは焚いたようである(三戸町)。また、「仏の道しるべ」として墓地から自宅までの道の岐路ごとに焚くところもあった(下田町、田子町)。送り火についての記述があるのは、名川町、三戸町、八戸市、南郷村、階上町で、家の錠の口だけではなく、「庭の門、井戸、土蔵、小屋、厠などの前にも焚いた」⁷⁰⁾という。

(2)**燃料** 燃料は、「テマツ」「テンマツ」などと呼ばれる松の根(下田町、十和田市、新郷村、南郷村、八戸市)が多く、他にシラカバの樹皮、ワラ(三沢市)、杉の葉、麦から(十和田市)などの事例がみられる。

(3)**火の呪力** 盆の火で握り飯などを焼いて食べると無病になる、度胸がつくなどの伝承が各地にみられ(三沢市、十和田市、田子町)、保存しておく虫歯や腹薬になるという言い伝えもある(十和田市)。馬や子どもを跨がせると健康になる(馬の場合は「盆乗り」と称する)という伝承もある(三沢市)。「送り火」の握り飯を食べると中気にならない(名川町)、厄除けになる(三戸町)という言い伝えもある。

(4)**高燈籠** タカトウロウ/トウロギ/トウロガイ⁷¹⁾は長い杉の木のホゲ(ホゲ、若木を切って皮を剥いた長い棹や棒のこと)⁷²⁾、の先端に杉の葉を残して十字に横木をわたし、杉の葉をつけて先端に燈籠をとす習俗である。八戸ではかつて、棹の根元に青竹を結び、青や赤などの色紙をつけたが、明治初頭に禁じられてから(明治5年太政官令)廃れたという⁷³⁾。これを立てることを「トウロウタテ」(八戸市)といい、新仏のある家で3年間行う。下田町、福地村、名川町、田子町、八戸市、南郷村の各自治体誌に記述がみられる。

古くは盆のはじまりが1日であるという意識のもと、7月1日に建てたとみえ、「一日には新仏のある家でタカトウロウを建てた」(盆の真菰の上ののるもの¹⁶⁸⁾。また寺院

でも7月1日に本堂の前に建てたという(盆の真菰の上ののるもの¹⁶⁸⁾。しかし昭和22年の著作には「今は一日もあるが七日に建てる方が多い」⁷⁴⁾と記される。自治体誌によれば、7日に立てるとするのは名川町、田子町、八戸市。13日が南郷村、16日が福地村である。「タカトウロウはない」と記される所(南部町)もある。



図2 タカトウロウ(『田子町誌』)

(5)四十八燈籠 シジューハットウロウ／シジューハットウ／マツウガイにはさまざまな形態があるが、共通するのは48本の灯をとす点である。昭和14年の記録には、「家の柱と柱との間に虹なりの板に四十八の蠟燭を立てて灯す」75)という描写がみられる。同じ頃の記録では、山手で木の豊富などころでは、「マツウガイ」といって、若松の枝が1ヶ所から5～8本出ているところの上の枝を切りとり、高さ60cm程度になるよう下の幹を土に挿して、柴クレをのせ、その上で松の根を48本燃やしたという76)



図3 迎え火(参考、自然木を利用した例)
〔河北新報〕昭和47年、岩手県旧千厩町)

(昭和14年、中澤村の事例)。また、ホケ(棹)で2尺くらいの棚をつくって平らな石をのせ、その上で松の根を焚くという方式もあった77)(頃卷澤の事例)。これが昭和22年頃になると、「松も蠟燭も手に入りにくくなって来た今日は」ボール箱に砂を盛り、線香を48本立てるのも見かけるようになった78)。これら迎え火の装置は片付けられることはなく「前年の盆に供げた四十八燈のマツウガイや迎へ火などのあとがそのまま立ったりころんだりしてゐた」79)という。

各自治体の報告書では、48個の石の台に松の根またはろうそくを48本燃やす(南郷村)、墓地から自宅までの道沿いに48本の灯をとす(田子町)、24本ずつを墓地と自宅に分けて灯す(田子町)などの事例が見られる。もっとも報告が多いスタイルは、墓地あるいは自宅で、三段になった専用の燭台にろうそくを灯す形式である。これは、下田町、福地村、南部町、三戸町、新郷村、田子町、八戸市、南郷村、階上町に記述が見られる。

場所は自宅の門口や玄関、墓地の事例が多く、他に墓地から自宅の道沿い(田子町)、寺院の境内(福地村)などである。いずれも新仏のある家で3年間行ふ80)のが標準である。3年間の後、そのまま立てておく家もある(田子町)81)。また、イッポントウロウという大きな提灯をさげて盆の火とする家もある(田子町)82)。写真資料としては、『青森県史 民俗編 資料 南部』(p.288)及び『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』(p.123)に「マツアカシ(下田町本村)」の写真として、テマツとシジューハットウロウを墓前で灯す光景が掲載されている。また、『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』(p.112)には「高燈籠(下田町木崎)」の写真が1枚掲載されている。

1.2.7. ホトケ送り

(1)送り盆 16日とするところが多い(十和田市、七戸町、南部町、三戸町、田子町、八戸市、南部町)。15日(新郷村西越)という事例もある。これは、16日に神社の祭礼があるためであると説明されている。

(2)送る日の昼食・間食 そうめん／うどん、オヒナガを供える(七戸町、下田町、福地村、三戸町、八戸市)。

(3)ホトケのみやげ セナガアデモチ(福地村、名川町、八戸市、階上町)を供え、きなこをかけて食べるという事例が多い。また、「コビリいっぱい持たせるといってカマスモチをコモに入れる」(三沢市)83)といったように、キンカモチ／カマスモチ(十和田市、南部町)、バオリモチなどとよばれる半円型のモチや、小判型の串餅(七戸町、階上町)、麦餅(南郷村)など、ミヤゲには小麦のモチを持たせる。

(4)供物の処置 供物をコモに包み、両端をホソメ(コンブ)で結んで流す(十和田市、下田町、名川町、福地村、田子町、階上町)。川に流すと、それを拾って歩く人々がいたという84)。

(5)送る場所 送る場所は多様で、山(下田町、福地村、南部町、三戸町、田子町)、川／堰(十和田市、七戸町、下田町、福地村、名川町、新郷村、田子町、八戸市、南郷村)、海(階上町、三沢市淋代85)のほか、道の脇(下田町)や村はずれ(名川町、八戸市)、墓地(七戸町、田子町)、田(下田町)、馬頭観音(七戸町)などに送る。「最近では、川や海に流せなくなったために、墓地に捨てたり穴を掘って埋めたりする」86)(平成8-9年ころの調査)という。

(6)送る時刻 昼食を食べさせたのち(福地村、八戸市)という事例もあれば、午前中に送る(田子町、南部町)という事例もある。後者は、「早く送らないと田名部(恐山)へ行くのに他のホトケに遅れる」といって10時ころに送る(南部町)「遅れると仏様が泣く」(田子町)という説明がなされている。

1.2.8. 各自治体による報告書の問題点

以上、従来の報告を通観すると、例えば、「盆棚」について「リング箱を用いる」と説明しながら、リング箱でどのような形態の盆棚を作るのかが全く分からない(1.2.2.(1)②c)。あるいは墓地の盆棚について、「盆棚を作る」とだけ記し、その形態が全くわからない(1.2.2.(2))。また、盆棚の飾りについて「モナカでできた飾り物」と記しておきながら、そのモナカなるものがどのような飾り物であるのか、どのように飾るのが全く分からない(1.2.2.(1)①b)。盆棚の供物の容器についても、近年は折詰めが一般的だが、その変化や現状について全く記録されていない(1.2.3.(1))。以上のように、記録に不足があることは仕方のないことである。よって本稿はわずかでも従来の記録の補足となることを期待するとともに、近年の変化を記録することを目的とした。

2 事例と考察

2-1, 事例

お話を伺った地域は、三沢市細谷(a),三沢市淋代(b),上北郡おいらせ町上久保(c),同浜道(d),十和田市法量(e),三戸郡新郷村戸来(f),同郡南部町下名久井(g),同郡三戸町蛇沼(h),同郡田子町山口(i),同夏坂(j),同遠瀬(k),同衣更(l),同郡南部町小向(m),同郡三戸町泉山(n),同目時(o),岩手県二戸市米沢(p),三戸郡南部町下名久井(q),八戸市南郷区市野沢(r),同島守相畑,同不習(s),階上町道仏小舟渡(t)、以上の**22地域・76名**の方々に御教示をいただいた(図4)。

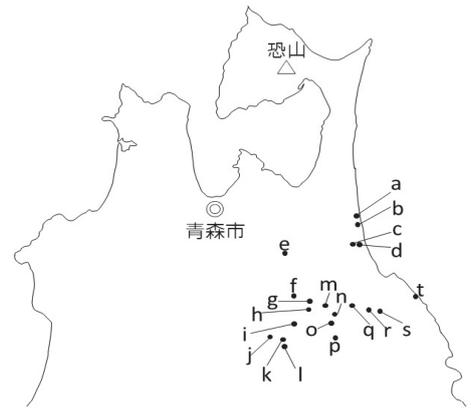


図4 地図

(1)三沢市淋代

淋代集落は太平洋に面し、三沢海岸に位置する(87)。

事例の集約 ()内の丸数字は個別の事例No.

【屋外】 **盆棚** 墓地には仮設の盆棚は見当たらない。

墓地 昭和40年代に墓地の区画整理が行われた。遺骨の再葬にあたって、人骨とともに馬の骨も出土した。馬も家族の一員として同じ場所に埋葬されたものと思われる(①)。

墓参 13・14・15日に墓参する(①)。

盆の火 10年ほど前までは、墓参の際には、各家の墓前に設置されたマツダイ(火焚き台)でマツアカシをしていたが、危険性を指摘する声があがり、現在は**共同墓地に設置された大きな火焚き台(直径1mほどの鉄製桶に3つ足のついたもの)を共用**している(①②)。各自が持参した薪を入れ、町内で「合同供養」を行っている。合同供養には寺の和尚が来たが、現在では念仏講の人達が供養を行っている(②)。墓石の前には各家の松台の痕跡(丸い穴)が残っている。地域の人は「迎え火も送り火も焚かない」というのが現在の認識である(②)。

供物 13日のみ、墓前に折詰形式の熟饌を供える(③)。折詰には必ず天ぷらを入れるという(③)。墓前でホトケと会話する感覚で飲食し、残さずに食べるよう祖母から口癖のように言われた(②)。13日は夜遅くまで墓前飲食を行った(②)。妹の嫁ぎ先である東北町でもゴザを持参して墓前飲食をしていたと聞く(②)。

細谷地区と同様、茄子や胡瓜には足を付けない場合が多いが、当地では足を付けたものも、散見される。これらにバナナ・コンブ・かど(こうほね)などが添えられる場合もある。

盆の火 新仏のある家では3年間、タカウロウを灯す。杉の葉を十字に組み、先端と両脇に電球を灯す。現在も行う家は少ない(①)。提灯を玄関に吊すことで代えている(④)。タカウロウを掲げる家にはお参りすることになっていた(②)。墓地でヒトダマを見たことがある(①)。

ホトケ送り 16日に送り火を焚き、午前中に煮たソウメンと供物をコモに包み、海に流した。しかし、数日後には流した供物がすべて浜辺に打ち上げられて散乱するので、やめてしまった(①)。

【屋内】 **盆棚** 葬儀屋が扱う階段状の壇を用いる。新仏のある家では3年間、祭壇の脇でシジューハットウロウを行う(④)。



図5 共同墓地(淋代)

事例① Ag氏 昭和32年生男性、Ah氏 昭和26年生男性 (ともに当地出身)

(屋外)

盆棚 墓地の棚については、Ag氏が墓地に作る「仮仏壇みてんた感じのもの」と説明したが、Ah氏は記憶にないという。

供物 墓前には亡父が好きだったという「にぎり寿司」を供える。

墓参 13・14・15日に墓参する。時間は人によりさまざまで、7~8時頃の朝に来る人もあれば夕方来る人もいる。——(墓参りは)3日来るね。13・14・15。朝、来る人もあるし、夜つが夕方来る人もあるし、その人によってさまざま。いや、今は、ムガシはやってらったけど、今、あの共同の。うん。ムガシは各家庭さ火燃すのあって、やってだけど、『あぶねえ』ってごどになって。(ここにある各墓前の松台は)ムガシのなごり。(共同の火焚き台は)毎日。夕方って朝がら来る人もあるがら、風ねえどきは朝がら。朝の7時8時ごろがな。来る人もある。朝でも夕方でも来た人が、迎え火の木入れて(Ag氏)。



図6 屋外(墓地)の盆棚(淋代)



図7 マツダイの跡(淋代)



図8 共用の火焚き台(淋代)

盆の火 各家の墓前にマツダイ(火焚き台)が設置されており、以前は朝や晩の墓参のときに個々に火を焚いた。しかし危険だという話になり、現在は共同墓地の入口に共同の火焚き台が設置されている(図8)。

新仏のある家は3年間、家の前に棒を立て、先端には杉の葉を十字に組んで、上方と両脇に電気をつける。今はやらないところが多い(Ah氏)。

(屋内)

盆棚 灯籠を飾るほかは、特徴はない(Ag氏)。

(その他)

ヒトダマ 子どもの頃は土葬だった。小学校3～4年生のころ、季節は10～11月ころだったが、父親たちがキリアゲ(今季の漁の終了にあたっての打ち上げ)の夜に、酒が切れ、酒屋に使いに出された。墓地を通るとポアッと、淡く明るい緑色の光が浮かんで消えた。——ムガシは、土葬もあったが、棚こがあって、でもそれなりにちゃんと香炉あ置いて、で蠟燭立てあって花立てあって、土葬の盛っこがあって、で後ろさトバたで。今、全部こ整理しちゃってるけど、オラ、ガキんときは、全部土葬だったがな。うーん、だがら夜、この辺歩けば、燐が燃えてるのがプアーンと出てくるわけさ。それが人魂だって(笑)。騒ぎついでごどもあるんだ(笑)。ホントは、燐が燃えて出でくるんだけど、土葬だがらね。小学校、3～4年のあたりかな。何回もある。ポツ、ポツ、ポアツ…なーんてんだべ、こういう緑の、ああいう緑がな、ああいう(明るい)緑のパツと光った感じの。淡いつうが、ホアンとなつてな。オヤジが漁師だったが、で、家で、キリアゲ(漁の終了)したどぎに、家で打ち上げ(今季の漁についての反省会)するわけさ。親方どが仲間どが全部あづまって。そんなどきは、そんなどきホロウ、浜のほうにサガヤ(酒屋)さんがあって、そごさサゲ買いにいがさるわけよ。ば、夜の8時頃まであいであつたんだがな。だがら、7時ころてばサゲ切れるがら、『坊主ちょつと来い』って(笑)。『ちょつと行ってこいや』って(笑)。で、うん、ほとんど毎年、10…いづだつたけなあ…。11月のナガコロだったがな、10月だったべがな。その頃になればキリアゲして帰って来るがら、うん、その時分、いづつも毎年、買いに行がされるわけ。パシリさせられるわけ(笑)。網元のおやんじども社長も全部あづまって、仲間全部あづまって、で、打ち上げやるもんだがら、人数も結構来るもんだがら、サゲも飲める

人ばかりだがら、たんねくなるわけさ。6時7時つてば、使いさいがされるわけ。(墓は)自分がガギの時はもうこごさあつた。昔からこごでねえがな。前はこご広ぐねがったけどね。

馬の骨 昭和40年代に墓地の区画整理し、同時に本家・分家の墓を整理をした(Ah氏)。整理のために遺骨を掘り返したところ、人の骨と一緒に馬の骨が出たことを覚えている(Ag氏)。この話を聞いてAh氏は「(馬も)家の中に一緒に住んでいたがらな。俺も小さいころ馬と一緒に住んでだがら」と述べた。馬も家族の一員として人間と一緒に埋葬されたのだろう。(2021年8月14日、墓地)



図9 盆棚(事例②)

事例② Ak氏 昭和23年生男性 (当地出身、およびその夫人)

(屋内)

盆棚 この辺りの家々と同様に、仏壇の前に何段も棚を重ね、葬式に使うような仏用の特別な布を張るのだが、今年は忙しかつたので普通の布を使った。先祖の供養のために水を6つ上げている。ホトケ様は、あちらの世界では喉が渇いているのだと聞いている。6つという数はホトケ様の数とは関係がない。——仏壇はだいたい似たような造りでやっています。飾り方は、この辺はだいたいこういう感じで変わらないです。吊るして飾るということはないです。過去帳、おばあちゃんが亡くなったときの戒名。仏壇ではないです。たまたまおばあちゃんが信仰していた関係で建具屋に内部を三段にして作ってもらったもの。これは特別のもので、先祖供養で水を6つ、向こうの世界は

お水が不足しているから飲みたいんだと聞いた。仏の数ではない。とうろう、コモを敷いて、例年であれば段々にお葬式に使うような仏様用のものをやるが今回は忙しかつたのでやっていない。

(屋外)

盆棚 盆棚を墓前に設置した記憶はない。新盆(にいぼん)の時には、先に十字の形のもの(タカトウロウ)を作り、ホトケさまを呼ぶという儀式のようなことは、やっていた。また、十字の形のものを掲げる家には、14日に必ずお参りすることになっていた。

供物 13日の墓参では、折詰にして供え物を持参する。他に、コウホネを供えたが、意味はわからない。お膳の中にはカガミテンなどさまざまな料理を供えたが、今はやっていない。現在の若い世代は、お供えの意味もわからず、面倒くさいという気持ちから簡素化していると思う(Ak氏)。

飲食 墓の前でホトケ様と一緒に会話をする感覚で飲食し、祖母は「ホトケ様と一緒に食べようね。残さないで食べなさい」と口癖のように言っていた。持参したものは家族みんなで残さずに食べた。——おばあちゃんが、13日に供え物を持って行くと、そこで遅くなるまで食べながら、やっていました。今はほとんどそれがないです。うちのおばあちゃんは、常に行って、仏様と食べるもんなんだよって、残さないで食べてきなさい、っていうのがうちの婆さんの口癖でした。だから供え物、うちらがあげた食べられるもの、全部食べて、仏様と一緒におしゃべりするっていうわけではないけども、そういう感覚で食べなさい、っていうような、いつもおばあちゃん言っていた。家族5人いたら5人一緒に行き、あげだもの一緒に食べながらね、のごすもんでないんだよって、仏様と一緒に食べようね、っていうかんじで言っていましたね(Ak氏)。

妹が嫁いだ東北町では、ゴザを持参してお酒を飲みながら墓前飲食したと聞いている。——なんかね、東北町、うちの妹が行って(嫁いで)るところは、なんか、まあおじいさんがお酒飲む人だったからかもしれないけど、ゴザがなんだか持って行って、そごでやる人もいるということは聞いたことはあります(Ak氏夫人)。

盆の火 今は、迎え火や送り火も行わない。10年ほど前までは、毎日各墓の前で迎え火をしていたが、共同墓地の入口の火焚き場に各自が持参した薪を入れ、町内で「合同供養」というものをやるようになった。合同供養には、かつては和尚さんが来たが、今は「ネブツ」と呼ばれる人たちが来て、共同で火を焚いている。また、送り火は16日に行い、午前中にそうめんを煮て供え、ホトケに持たせたいものを箱に入れ、そうめんと一緒にコモでくるんで「ホトケさま帰って行ってください」という気持ちで海に流した。しかし、何日か後には流したものが浜に全部上がってくるので、汚れるというのでやめてしまった。——ちっちゃい頃はよく(波が)だーって来れば、ポーンって投げでやって。で、帰って行って、仏様帰って行って下さいっていう感じだったんでしょうけど。(2021年8月14日、自宅)

事例③ Ai氏 30代女性(当地出身)

(屋外)

供物 折詰には、必ず天ぷらを入れる。折の右端はズッキーニの味噌炒めである。他家の墓に供えられている「コウホネの根」を供える風習については、聞いたことがない。

墓参 13日から15日まで毎日墓参する。供物を供えるのは13日だけである。(2021年8月14日、墓地)

④ Aj氏 昭和30年生 女性(当地出身)

(屋内)

盆棚 昭和6年生まれのおばあさんが2年前に亡くなり、今年で2回目の新盆である。3年目まで、シジウハットウロウを祭壇の脇に飾る。

(屋外)

盆の火 玄関に提灯を下げる。提灯はタカトウロウの代わりである。タカトウロウは昔は掲げていたが、現在は行わない。——これをね、ほら。16日まで。長い棒(タカトウロウ)をやった代わり。今ああいうの(タカトウロウ)やっけないがら。(2021年8月14日、自宅)



図10 墓前の供物(生饌)



図11 墓前の供物(熟饌)



図12 盆棚(事例④)



図13 シジウハットウロウ(淋代)

(2)三沢市細谷

細谷は太平洋に面し、三沢海岸に位置する集落88)。

事例の集約

【屋外】 **墓参** 墓参は13日から15日まで(⑤⑥)あるいは16日まで(⑧)の毎日1度、場合によっては朝と晩の1日2回(午前8時ころと午後3時ころ)行う。

盆の火 墓参の度にマツアカシ(迎え火)を灯す。昔は地面でじかに焚いていたが、現在はコンクリート製のマツダイを使っている(⑧)。実際の墓前には、焙烙や缶ではなく、コンクリートや石でできたマツダイ(火焚き台)が並んでいる。墓石と同じ石で作られたものもみられる。石材店による提案(トータルコーディネート)だと考えられる。盆中は常時設置する家も多いが、火を焚く時だけ設置し、それ以外の時は立てかけておくマナーもみられる。

新仏のある3年間、タカウロウを立てる(⑦)。葬儀の際には立てるつもりでいたが、翌年、(労力の関係で)気持ちが変わり、立てるのをやめた(⑦)という事例がみられた。

盆棚 墓石から独立した盆棚が数基ある。いずれも簡易なものである。13日に、赤飯やカガミテンの入った弁当形式の料理を供える(⑥)。70基ほどの墓のうち、カド(こうほねの根)を供えているのは5~6軒であった。多くの場合、茄子と胡瓜には、足を付けずに供えている。カドは他の野菜とは別に、蓮の葉で包んで供えられている。熟饅頭は弁当形式で供え、赤飯・煮しめ・酢の物などの他に、てんぷらが入る。16日は墓前にそうめんを供え、供花など一式を片付ける(⑥)。

【屋内】 **盆棚** 仏壇とは別に祭壇を設け、さまざまな供物を吊す(⑤)。



図14 共同墓地(細谷)



図15 盆棚(細谷)

事例⑤ Aa氏 70代女性(八戸市出身)

(屋外)

盆棚 墓には棚を作らない。

墓参 13・14・15日の毎日、朝8:00と夕方15:00~16:00頃に墓参する。

盆の火 火を焚く台を「マツダイ」という。

(屋内)

盆棚 特別な棚を作り、さまざまな供物を吊す。

供物 「ほうぼね」(こうほね)を供える。

(その他) 葬列を作り、「オニ」などいろいろなものを作って持ち歩いた。出身地の八戸市では見たことがなかったので、当地へ嫁いで来て驚いた。(2021年8月14日、墓地)



図16 盆棚(細谷)

事例⑥ Ab氏 80代女性、Ac氏 50代女性(当地出身、母と娘)

(屋外)

供物 13日は赤飯や鏡てんがセットになった弁当形式の供物を供える。16日はそうめんを供え、供物や供花を片付けて帰る。

墓参 13・14・15日に墓参する。

盆の火 上記墓参時に火を焚く。——16日は、おそうめんを持って帰る。なぜおそうめんなのか知りませんが、おそうめんを持ってきて、このお花とか全部片付けて、きれいに帰る。16日に。そうめんも持って帰ります。13・14・15は普通にこう来て、13日は赤飯とかいろいろ、鏡天とかセットになったやつ、それをあげて、で、ま、今日は14なので普通に来て、15も来て、16はおそうめんあげて、ちょっと小川原湖の反対側のほうは13日一日でいいそうです。墓参りは。(火は)毎日焚く方もいますけども、最近、私のときは焚いてたけど、最近はおもう、私もやらないですし、やらない人が多くなってきましたね。半分くらい焚くのかしらどうでしょうね。毎日来たら(焚いています)。その16日以外は。16日は午前中におそうめんを持って帰る。あとは、まあ、だいたい好きな時間に、自分の都合のいい時間に来ています。(2021年8月14日、墓地)



図17 墓前の供物(細谷)

事例⑦ Ad氏 60代男性(当地出身)

(屋外)

盆の火 今年(2021年)、盆中に亡くなったので、初盆は来年行う。タカウロウ、シジウハットウロウを行う予定である。——うん。まだ、(タカウロウも)来年やる。来年になればまだシジウハットウロウって。

しかし翌年になって労力の面から気持ちが変わり、実施するのをやめた。(その他)「忌中」の表示を玄関に掲示している。また、この地域では今も野辺送りを行っている。——うちでは今回はやらないけど、やっています。オオなどがそういうのを持って、そご3回まわって、そういう風習はあります。(2021年8月14日,2022年8月15日自宅)

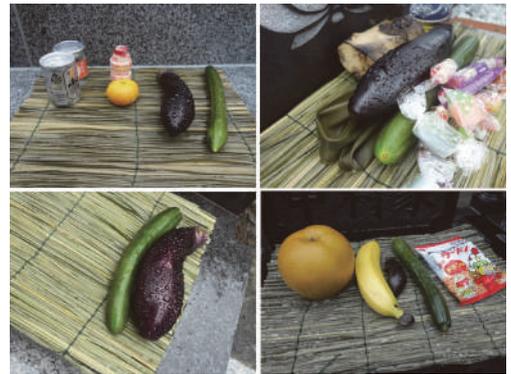


図18 墓前の供物(細谷)

事例⑧ Ae氏 40代女性、F氏 40代男性(ともに当地出身)

(屋外)

墓参 13・14・15・16日に墓参する(40代女性)。13、16日に墓参して火を焚く(50代男性)。

盆の火 13～15日は午後2～3時頃に毎日来て火を焚く(40代女性)。昔は地面でじかに火を焚いていたが、現在はコンクリート製の「松台」を使っている(50代男性)。(2021年8月14日、墓地)



図19 墓地のマツダイ(細谷)

(3)おいらせ町(旧下田町)上久保・浜道

事例の集約

【屋外】 盆棚 土葬だったころは、竹の棒にコモを懸けて棚を設えた。地面に供物を直接置きたくないという意識からだと思う。また、現在は墓と一体になった供物台があるので棚が不要になったと考えている(⑩)。

墓参 この地域ではかつては、13・14・15日の朝と晩に墓参していた(⑭)。今でもまめな人であれば、昔からのしきり通り14日・15日は夕刻だけでなく早朝にも墓参する(⑩⑪)。しかし、墓参の支度をする女性の負担を考えて(⑭)、現在は13日の夕方だけ墓参するのが一般的になった(⑩⑭)。ただし、新仏のある家では3日間朝晩墓参するのが通例である(⑭)。参拝の時刻は、コロナ前は午後4時ころがピークだったが、コロナ後は人と会うリスクを避けるために、3時ころに来るようになった(⑨)。現在も、3時～4時頃が中心である(⑨⑩⑬)。

盆の火 迎え火は、夕刻に家の門口と墓地で焚く(⑭)。家の門口では、外に向かって「ここだよ」という気持ちで拝む(⑭)。墓地では、朝の墓参では焚かず(⑩)、13・14・15日の墓参に際して夕方4時ころに焚く。16日も墓地でマツアカシを行う。

杉の木をナタで細く切ったもの(⑨)や、コモ(⑩)、松の根(購入したもの)(⑩)を燃やしてマツアカシにする。自宅の敷地で採集した杉の葉を燃やす人もいる(⑫)。以前は、迎え火を焚きながら隣近所の墓同士で夜遅くまで語らうことがあったが、コロナ以降はそのような交流は途絶えた(⑬)。

供物 13日のみ、赤飯、煮しめ、きゅうりの酢の物、なす、ささげの和え物などと、てんぷらなどをたっぷり詰めた弁当形式の供物を供える(⑨⑬)。その中では煮しめに、お盆らしさと特別感がある(⑭)。「かど」は供えない(⑨⑭)。

飲食 現在も墓前飲食を行う人は多いという(⑨⑭)。親類縁者が集まり、故人と一緒に食べるという気持ちで行っている(⑭)。食べた残りはカラス対策の意味から(⑭)持ち帰ることになっているが(⑨)、全部食わずにある程度残す(⑭)。

【屋内】 盆棚 仏壇から位牌を出して空にし、仏壇の手前下方に設置した祭壇やテーブルに位牌を置く(⑬⑮)。新仏のある間は、階段形式の祭壇を盆棚とする(⑮)。

供物 新しく購入したコモを敷き、ナス、キュウリ、かど(コウホネの根)を供える(⑮)。かどはホトケの杖である(⑮)。しかし最近手に入らないので、レプリカを供えている(⑮)。キュウリには足をつけ、ナスには付けない(⑮)。盆中は昼にソウメンを毎日供える(⑬)。

ホトケ送り 16日には、朝は他の日と同じく供え(⑨)、南瓜、じゃがいもなども供える(⑨)。昼はそうめん(⑨⑩⑬⑮)、三食の他におやつが必要であり、パンを持たせる(⑮)。コモに供物を包み、山や川へ送ったが、現在はできないのでゴミとして出す(⑮)。

事例⑨ AI氏 昭和19年生女性(当地出身)

(屋内)

盆棚 仏壇の前に階段状の祭壇を設える。

供物 コモを敷いた上にナス、きゅうり、コンブ(仏様を送るときに縛る)を供える。「カド」(こうほね)というものは知らない。

(屋外)

供物 13日だけ、パックに入った料理(折詰)を供える。折詰には赤飯、煮しめ、きゅうりの酢の物、ささぎの和え物、かぼちゃ、みょうが、ししとうを串に3つ刺して焼いたもの、天ぷら約3種類、果物が入っている。「簡単なようで結構手間かかるような気がする」とAI氏は語る。——(毎日墓参しますか)うん。13・14・15って。(供え物は最初の日だけですか)でも、線香あれて、供物持ってきて食べて、持ってきたのをね。今はもうみんな持ち帰るがら、うん。13日の日も置いたら持ち帰ってね、うん。パックに入った料理。(供えるのは)13(日だけ)。(最終日に特別な供え物がありますか)何もないです。(そうめんとか)それはもう13でね、昼で。朝は普通にあげて、お昼はね、みなそれぞれ違うんじゃないかな。うん。そうめん、カボチャとかジャガイモとか、うん。(そうめんを供える意味は)わからないねえ。

飲食 供えたものは墓前で食べ、残りはそのまま持ち帰る。墓前飲食を行っている人は多いという。16日の朝は他の日と同様のお膳を上げ、昼にはそうめん、カボチャやジャガイモなどを供える。そうめんを供えることの意味は分からない。

墓参 コロナ前は、午後4時ごろに墓参に来ていたが、コロナになってから午後3時ごろに来るようになった。原因はコロナだと考えている。早く来れば人と会うリスクを避けられるからだと思う。みんな人と会わないように避けて歩いている。13日の墓参のピークは午後3時ごろ。しかし昨日は雨が降ったから早く墓参を済ませる人が多く、3時30分頃には、あまりいなかった。——一番最初は4時ごろだったよな。コロナが流行る前は、今早くなったものな。コロナの関係で早くなったの。(コロナ前は)4時頃来るとすごい人がいっぱいだった。ムガシの話は、コロナって騒いで早く行くようになった(笑)。なんでなのかね。そんなに人来ていないがら。避けであるいてるの(笑)。(コロナの影響は)おつきいね。

盆の火 家にある杉の木をナタできれいに細くして迎え火の薪にする。段状に積み重ねて燃やす人もいる——(薪はどこから買って来るんですか)いえいえ、うちに、あるやつを、ナタで細くして。これは杉の木。杉の木は車庫の中に置いてあるのをね、細くして。もっときれいに細くしてあの、ね、段にして積み重ねて燃やす人もあるんですけど(杉は採取したものではなく、たまたまあったものを用いたとのことであった)。(2021年8月14日、墓地)



図20 迎え火(木ノ下共同墓地)

事例⑩ Am氏 60代女性(当地出身)

(屋外)

墓参 13日の夕方と今日14日の夕方にお参りしている。まめな人であれば14日・15日の朝にも墓参する。これからの時間も墓参に来る人が多いと思う。——昨日の夕方来て、今日来て、世話だ人は、朝、二日来るどおもうんだけど、他所の人は、私あれなの。夕方来て。もうホントは皆で今日来るともうよ、まだ。

盆の火 迎え火を焚くのは夕方であり、朝に墓参する場合は燃やさない。今年、盆棚に用いるために持参したコモを燃やして「マヅアガシ」にしている。松の根も小さく切って燃やすが、コモも同時に燃やしている。松の根は売っているものを使っている。——マヅアガシって、松のネッコ、ちっちゃく切ってこれ。これこういうふうに。これついでにコモも燃やすの。ちらがってしまう、汚いがら。燃やしてしまう。毎年(まいねん)。(松明かしは)売ってるの。(2021年8月14日、墓地)

事例⑪ An氏 60代女性(当地出身)

(屋内)

盆棚 特別な飾りは行わない。

供物 日常とあまり変わらないが、供物を豪華にする。

(屋外)

盆棚 子どもの頃は、竹の棒にコモをかけて棚を設えた。土葬の時代には地面に直接供物を置きたくないので、棚を組んだのだと思う。現在は火葬となり、墓石に供物台があるので、棚は作らなくなったのだと思う。——あの昔やってたのね、竹のあれさ、こもかけでね。(最近)みだごどないですね。あしたちちっちゃい頃は(An氏)。あれはもど土葬の時代に、こういう棚どがってながったんですよ。だから、棚ずんだが、地べたに置きたくないんで、棚をやって。土葬の時代です。今火葬だから。こういう棚(墓石の供物台)一緒に作ってるがらはあ、ないともうよ(An氏主人)。

墓参 以前は13の夕方、14・15日の早朝の3日間、墓参していたが、大変なので現在は13日の夕方だけ墓参する。——朝も14と15来たんだけど、今は大変だということで、13の夕方だけ(男性)、(昔は)14と15の朝、はやぐね(An氏)。

盆の火 13・14・15日の三日間、たいいてい夕方の4時頃に火を焚く。16日、墓所で「マツアカリ」を行って行事全体が終わりを迎える。——お盆の最後にはいや、お墓ではもう、まつあかり、それでだいたい終わりです(An氏主人)。そうめんや団子はうちでは供えるけど、昨日の午後に、それこそおかず、昨日。普通は夕方。4時ごろ、火を焚いて。毎日夕方3日。で16はもう、オハガ、もう(仏を)帰すっていう感じで、昼の、そうめんとかあげたら、中のあれ(供え物一式)は全部もう片付けて普通の状態に戻して、送ってやるっていう感じですよ(An氏)。(2021年8月14日、墓地)

事例⑫ Ao・Ap夫妻 20代男性・20代女性

(屋外)

盆の火 迎え火として杉の葉を燃やしている。杉の葉は自宅敷地で採集したものだという。(2021年8月14日、墓地)

事例⑬ Aq氏 昭和16年生 女性 (同町出身)

(屋内)

盆棚 仏壇から位牌を出して、下に設置した棚に置く。——家には机みたいなのを置いて、それに仏さん(位牌)を下げてやってるけどね。(ホトケ様は)上にいるでしょ。仏壇の中に。それ(位牌)を下に、こういうの(机)さ持ってきてあげるの、下に。(この前)テレビを見たら、青森県だけ、仏壇の前に棚やっついていっぱいあげているってやっていたよ。ホカのほうはあんまりやっついてないって。屋内の盆棚を見たいのであれば、おっきいカマド、大家のものを見せてもらえばいい。カクが違うから。オラホは他所から嫁いでいるのでやってきたのをマネしてやっているだけでわからない

供物 盆の期間中はお昼に毎日ソウメンを供える。ホトケを送るときにも、ソウメンを供える。ソウメンを供える理由は知らない。

(屋外)

盆棚 墓地に棚を作るのは、見たことがない。

供物 ナスやキュウリに割り箸を刺して供える。「馬ツコ」という。赤飯、煮しめ、鏡てん、きゅうり、なす、天ぷらなどの料理を折が埋まるくらいに作って持参し、墓前に供える。「カド」(コウホネ)については、名前は知っているが、供えないしそれ以上のことはわからない。

飲食 コロナ前までは、手作りの飲食物を持ち寄って、墓前で話しながら楽しく飲食をした。——いやあ、ありました。でもコロナのために、ほら今は全然、みんなバラバラで、こして火燃しに来てまわり同士集まってみな話したりね、遅くまであったけど、コロナのためにバラバラです。ごで食べたり、話したり、してました。(ゴザを広げたりするほどではなく)このままでちこまてね、やったり。これこう、自分たち(が作った)の持ってったりね。やってたけど、今ははあ、去年あたりから全然、人ど会わらねえんだよ。みんなバラバラに来てね。(コロナで)変わりました。こだ夜になれば盆踊りってありましたでしょ。そういうのも全然、いまなくなつて…。あのウチから出るごでぎないもの(笑)。年寄りだべしね、はあ。/(お昼になぜソウメンをあげるのか)は全然わかりません。昔からの伝えてきたのをそのまんまやっただけでね

墓参 通常であれば、午後3時～4時ころが最も混雑する。いま墓参に来ている自分自身は、早いほうだと思う。——今日まだおせんだが、全然来ないもんね。これがら来るんじゃない。

盆の火 迎え火を焚きながら、隣近所の墓同士であつまって夜遅くまで語りあうこともあったが、コロナが流行してからはそのような交流は途絶えた。(2021年8月14日、墓地)

事例⑭ Ar氏 60代男性 (当地出身)

(屋外)

供物 供物のなかでは、「野菜の煮しめ」がお盆らしい特別のお供えだと思う。それ以外は、普段のお供えと特に変わらない。ただし、普段よりは豪華にする。普段食べないメロンなど高級なものをお供えしてはいる。コウホネは店で売られているが、Ar家では供えない。

飲食 現在も、墓の前では親戚などが集まって、供物を食べる。故人と一心同体というか、故人を含めてみんなと一緒に食べるという気持ちで行っている。カラス対策で片付けるきまりになっているが、供物は全部食わずにある程度残しておく。

——(墓前飲食を)してました。今でもやってますよ。あの、一心

同体つうがね。あげだものを一緒に食べる。それはやっています。やっぱり死んだ人ど、魂ど(一緒に)。うん親戚どがなんどが



図21 迎え火(事例⑭)

づう人はみんな来てね。うちも今日息子の嫁のほうに(息子たちが)行ったが私一人なんだけど、息子とか息子の子どもとか、親類が、仏様を拝みにきたその時間に行って、一緒にあげものして。(全部食わずに)ある程度残しておいてっていうかね。

墓参 この地域では、かつては毎日、朝にも晩にも墓参していた。だがその支度をする女性たちに負担がかかるので、13日の午後一度だけ墓参し、あとは任意で参るようになった。ただし、新仏のある家は、3日間朝晩墓参する。自分自身は13・14・15日の3日間、時間は決めず都合のいいときに墓参する。

盆の火 墓参の際には墓地と家の門口で火を焚く。墓地、門口の順で焚く。おがくずに灯油を混ぜたものを着火剤とし、ライターで薪に火をつける。火を焚くことで、ここが自分の家だよ、と示す意味がある。拝む方角は特に決まりはあると考えてはいないが、家の外のほうに向かって拝む。若い世代では、お盆のしきたり全般が行われなくなってきていると感じている。息子たちに伝え、継承してくれることを期待している。

新仏のあるときには、シジウハットウロウを墓地と屋敷と両方で灯す。同じ下田の木内々集落では、現在もタカトウロウを掲げる家がある。——もとは毎日、朝、お参りしてあったんだけど、あの毎日お参りとなれば女のひとがその準備するのに大変さごとで、今はハア、昨日13日の午後から一回だけのお参りで、あと来たい人は来るという、信仰です。(迎え火も)だんだんに、そういうアレがなくなってきてやっぱり、その、若いひとがほら、うんそういうのあまりやらないがら。うんやっぱり私たちの年代ぐらいの人であればまあ、親がら聞いて。うん。これがもう何年、続くものか。こういうのは何かでつないでいきたいんだけど、これからはなかなか、大事なんだよな。先祖から伝わってきたものだから。(2021年8月14日訪問、墓地及び自宅)



図22 盆棚(事例⑮)

事例⑮ As氏 昭和12年生、女性 (当地へ嫁ぐ)

(屋内)

盆棚 仏壇を盆棚とするが、盆中は燈籠を出し、仏壇を空にして仏壇の手前に盆棚として用意したテーブルに位牌を置く。一方、新仏のある間は三段の祭壇を盆棚にする。

(屋外)

供物 新しく買ったコモを敷いて、ナスやキュウリ、カド(コウホネの根)を供える。カドは仏様の杖だといわれている。キュウリには割り箸で足を付けるが、ナスには付けない。コウホネの根も供えるが、入手できないのでウレタン製のレプリカを供えている。昼にそうめんを供え、おやつとしてパンを持たせる。三食のほかにおやつを出さなければならない。

送り盆にはソウメンを煮てお昼を食べさせたあと、お菓子やパンを持たせる。そうめんをお昼に出すのはとくに理由はなく、他でもそうしていると思ってやっている。供物をコモに包んで山や川へ送ったが、現在はそれができなくなったので、ゴミに出している。——そう、あのお盆がくればなんとか(コモのこと)っていうのを買って必ず敷いて、その上のつけるっていう。(仏壇は)空っぽにして(As氏)。新しい仏様だと三段のを飾るんだけど、新しくなくなると、こういう風に普通に(As氏の嫁)。(供えてあるそうめんは)お昼(に仏様が食べるもの)。それでかぼちゃはおやつ。こっこのほうはなんていうの、朝、昼、とかおやつとかあげなきゃいけないんですよね(As氏の嫁)。で、ほら最後に袋、あの食べたのよう袋さ入れでおいで、へてこたコモにくるんで、あの、山へとが川とがムガシは送ってやるっていう(As氏)。(でも)今はそういうの出来なくなったからゴミに出す。ものは決まってるけど、お昼ご飯としてそうめんをあげたんです(As氏の嫁)。(最終日には)ソウメン煮て。お菓子とか…(As氏)。(たとえば)パンとか持たせるっていうか(As氏の嫁)。(ソウメンは)まず、うちで食べるほに、そうめんお昼とがって、意味はわがならないけど、うちではそうしてる。でもみなとごそんだがどもってるけど(As氏)。(なすやきゅうりに)足つけたりしないです。(お嫁さん)。(コウホネの根を象ったウレタン製スポンジは)かど、杖だって。今ほら、ムガシは杖のかわりにこう、なんか長いのやってんだけど、今スポンジだよあれ。買って来た(As氏)。本物は売ってないから、ニセものかってきて(As氏の嫁)。杖のかわりだってあれ。んだすけおがしいいうんだなどもって(As氏)。(2021年8月14日訪問)



図23 カド(事例⑮)

(4) 田子町夏坂

山向こうの秋田県毛馬内(旧盛岡藩領、例えば堀内墓地^{ほりない})では、墓前の盆棚や蓮の葉を敷いた供物が多数みられたが、青森県境を越えて田子町に入ると墓前の祭祀装置は消滅した。夏坂は鹿角から山を越えた青森県側の最初の集落。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 同地域ではどの家も盆中は仏壇を閉じ(⑩)、仏壇とは別の部屋に臨時の祭壇を作る(⑩⑪)。以前は祭壇を手作りしたが、現在の祭壇は葬儀に際して葬儀屋から購入した組み立て式のものである(⑩)。最上段に位牌を据え、中段や下段に果物や菓子などの供物を供え、中央に膳を供える。祭壇の手前には経机を置き、コモを敷いた上に大皿にのせた赤飯を5つ供える。赤飯の下にはブドウの葉を敷く。その他、カガミテンやキュウリとナスの牛馬を供える(⑩)。

【供物】 祭壇の左右に、盆中にホトケを拝みに来る親戚が持参する供物を展示する。見栄えがいいように、専用の展示台を設置している(⑩)。また、2対の盆燈籠は葬儀の際に兄弟や親戚が購入してくれたものである。

盆棚には、祭壇、装飾とも葬儀をきっかけに用意されたものが大いに活用されている。

【屋外】 **盆棚** 現在は、墓前に棚を作ることはない(⑩)

【墓参】 田子の中心街方面では13日から墓参するが、この地域では14日から墓参する(⑩⑪)。14日15日ともに多くの人々は午後に墓参する(⑩)。

【盆の火】 新仏のある家では3年間、シジウハットウロウを家の門口近くで灯す。シジウハットウロウは墓参の後で灯す。トウロウの台は昔は手作りしたが、現在使っているものは組み立て式の購入品である。昨日雨が降ったので、写真のように軒下に置いているが、本来は戸口から離れた家の入口に置く。48本の短いうそくを灯す。去年で父が亡くなって3回忌を終えたが、トウロウを粗末にすべきではないと考え、納屋に保管していた。また、今年は4年目なのでシジウハットウロウをやらなくてもよいが、兄との相談のうえ、今年もやることにした(⑩)。

墓地では迎え火を焚く。松の根を削り、数年間保管して十分に乾燥させたものを用いる。昔はどの家でも自家で採集して作ったものだが、今は店で売られるようになった。松の根は、採集してから長い時間が経っているため、乾燥しすぎて油が飛んでしまう場合もある(⑩)。

事例⑩ At氏 80代女性

(屋内)

【盆棚】 このあたりの家はどこの家でも、仏壇とは別に臨時の祭壇を作る(しつらえることを「かく」と表現)。——祭壇を作って、仏壇の脇にまつている。どこの家でもやっている。ここのザイはみんな、祭壇かいで、仏壇じゃなく。祭壇かいで。(祭壇の)脇さこう、ちょうつんこみたいなのやって。うん。オラホでは祭壇をこう、かいで。

(屋外)

【盆棚】 (現在は)墓前に棚を作らない。花だけ供える。——(盆棚を作ることは)ない。花だけ。

【墓参】 このあたりは「ザイ」(田舎)なので、14日から墓参する。山を越えた「マチ」である田子町(青森県三戸郡)では、13日から墓参すると聞いている。——ここはザイだから、昨日(14日)から(墓参する)。田子町って、こごすぐのぼれば、ガーリックセンターとがあるべ。あそこでは13(日)がらやってるの。マチのほうは。ザイは(昨日14日)から。13(から墓参するのは)は田子。1日早いだ。田子のほあ。マチのほあ。(2021年8月15日、自宅)

事例⑪ Au氏 昭和32年生

中座敷に仏壇があるが、扉を閉じて上座敷に祭壇を設けている。

(屋内)

【盆棚】 田子町内でも違いがあり、本仏になったのちは仏壇を盆棚としてまつる集落もある。ここ夏坂集落では、新仏のあるなしに関わらず同形式の祭壇を設ける。盆中の仏壇は扉を閉じ、別の部屋に盆棚をしつらえて靈魂をまつている。Au家は三室列で、中座敷に仏壇があるが、扉を閉じて、上座敷に祭壇を設けている。仏壇の左となりに作り付けの棚があり、60年ほど前に建具屋に作って貰ったものである。「行川アイランド」や「鉛温泉」などの「土産こけし」を飾る。

現在の祭壇は父の葬儀の際に親戚から贈られた既製品(親戚が葬儀屋から購入した祭壇。組み立て式・折りたたみ式)を組み立てたものだが、以前は板で大きく作った。家や集落によっては、盆棚を仏壇の近くにしつらえる場合もある。盆棚は13日の夕方に設置する(盆棚を設置することを、Au氏は会話のなかで『タナをかく』と表現)。普段は仏壇の中に安置している位牌を、棚の最上段に置く。中央の金色の位牌(繰り出し位牌)の左右に、新仏の父母の位牌を安置している。繰り出し位牌の中には、一番手前に新仏の板片を出している。

祭壇の位置は窓際である(図24)。祭壇を挟むように、1対の木製の展示棚を設置し、ホトケを拝みに来た人達からの贈答品を展示する。まわりの台は、「床さただ並べるより見栄えがいいが、(盆に贈られるものを並べるために)作っ」たもの。台への贈答品の陳列は、(新仏のない)来年も行う。3年が過ぎれば、贈答品の数も少なくなるが、兄妹や子どもからの贈答は続くと思



図24 盆棚(事例⑩)



図25 5枚のブドウの葉に赤飯を盛る(事例⑪)

うので、陳列したいと思っている。——田子ってへっても、三年あればハア仏壇でやるとごもある。こごら辺はずっとハア、一生、死んだ人あればやるんだもの。地域によって違うんだすけおんだそれを聞かであるがねあなんねえ。こごはムガシからどな。タナこごう。／もう、ずっとやってる。うん。あの、三年、地域によって三年ぐらいではあ、こご、普通のそつで仏壇のあたりさこごうやってはあ、やる人もある。こごらへんはこご、ムガシから段こやって。／今な、今は祭壇ってへっても、その売ってるべ。組み立て。ムガシはおつきぐ、板をこごうやって作ったもんだんですけど、大きさはまずナンボがちやっこごうなってるたつて、段こ(作つて)。(新仏のないお盆も)このままよ。うん。まだ作るのこれ。こごう。ふうに。(新しい仏があるかないかに関わらず)やる。(お盆のときだけ)出す。お盆だけ。13の夕方、作つて、やる。準備。で昨日はオハガさ行くでしよう。今日も行く。／来年はまあ、(盆の贈答品の数は)すぐなぐなると思うんだけど、まずまわりがこごう親戚が持ってきてくれるでしよ。せば、それがはあ、3年過ぎればあまり、3年は持って歩く、で三年過ぎれば持ってこねば、これは少なくなるが、兄弟とがまず子どもが買ったのをこごう、並べて(おくつもりである)。

供物 中段には1対の高坏を置き、小ぶりのスイカとメロンをそれぞれ供える。中央には故人の遺影を置き、両脇に菓子供える。下段にも1対の高坏を置き、果物や野菜を供える。中央には膳を供える。祭壇の手前に更に経机を設置し、スイカや菓子を供えるほか、中央にコモを敷き、5枚のブドウの葉それぞれに赤飯をのせ、それらを大皿にのせたものを供える。その両脇には胡瓜と茄子の牛馬を供え、カガミテンを供える。その左右に燭台と盆花を供える。盆棚を華やかに演出するトウロウは、葬儀の際に兄弟や付き合い

のある人などから買って貰ったものだという。

(屋外)

ホトケ送り 16日は早朝に供物を昆布で縛り、以前は川に流したが、今はゴミに出している。——(明日16日は)朝早く、アレを片付けて、出してやる。ムガシは川さ流したりしたべたて今ハアでぎねすけゴミさ出すんだけど。／明日の朝はこれ、を、これがほら、コンブ。これで縛つて。まず昔は川さこごう流してやつたつて、でほら、今はできないが(川に流すことはない)。

(屋外)

墓参 この集落の墓地は小高い丘の上であり、「(墓が)立派だんでえ、この地域は」と誇らしげに語っていた。小高い墓地の丘から赤い屋根が遠くにみえるが、それが馬や牛をまつる神社である。

14日・15日の夕方に墓参する(人によって墓参の時間はまちまちで、早い人もいれば、午後1時ころに行く人もいる)。

盆の火 家の前で松の根を削って何年かおいたものを燃やす。松の根は、今ではどこでも売っている。——この辺はムガシ、自分でそれつづつたの。昔オヤジが作つておいたの、あまりかわぎすぎで油が飛んでるのものもあるけど。

墓参ののち、家の門口ちかくの屋外でシジュウハットウロウを灯す(新仏のある3年間)。15日は墓参の前に灯す。15日の墓参は午後すぐに参る人もあるが、15時30分～16時ころがメインである。墓前でも火を焚く。

14日と15日にシジュウハットウロウを灯す。シジュウハットウロウの台は販売されており、組み立て式になっている。新仏の3年が終わつたのちも、粗末にすべきではないので小屋などにしまっておく。昔は手作りした。去年三回忌を迎えたが、兄の提案で今年も行うことになった。——(玄関前に置かれたシジュウハットウロウの台を指して)これは3年(間行く)。今3年で、ホントだば3回忌は去年だったべたて、兄がやるってへるすけ、やつたつた。(アカシコをつけるのは)夕方。オハガさ行ってきてから。まず、昨日雨ふつたが(戸口の軒下にシジュウハットウロウの台を置いているが)、ホントはそごらへん(もっと戸口から離れた場所)さこごう。なんづの、そごさマヅ、の、昨日はオハガさ行ってきて(帰ってきてから)燃して、今日はオハガさ行く前に燃す。で、これさロウソクみちかひの、48本。うん。(今日の夕方も含めて14日、15日と)2日やる。明日はやらない。(トウロウの台は)買つて来てるの。さあ、値段が。値段ナンボだべ。値段はわがねな。組み立て式になつてんだ。うん。とるの。(3年が終わつても)ま

ず、粗末にさいねすけ、小屋さ置いだり何してるべたて。(再利用は)いや、それでもいいべたって、オラホあまりよぐわがainlessけども、ムガシはな、作ったもんだべたって。

供物 ブドウの葉を5枚敷いて赤飯、テン(カガミテン)などを乗せたものや、ナスとキュウリの牛馬を供える。カラスがいたずらするので、供物はみな持ち帰っている。供物へのいたずらを防ぐために、何年か前に木を切って、明るくなった。以前は林の中にあつて木陰になっていた。——(ナスとキュウリの)ベゴど馬ど。(ナスがベゴ)うん。あるので簡単に作って。でブドウの葉っぱやって、赤飯やってどがつて。テン、鏡テンとがつて。やるんだけど。(2021年8月15日、自宅)

(5)田子町遠瀬

熊原川の支流杉倉川沿いの山間地に位置する集落89)。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 新仏のある3年間は、特別の祭壇を作る(20)。祭壇は別の部屋に設置したいが、場所がないので仏壇の前に据えている。かつては自作したが、現在使用しているものは葬儀の際に購入した既製品である。最上段に位牌を置き、他の段には菓子や果物、ナスの牛とキュウリの馬などを供える(21)。祭壇の脇には電気式のトウロウを据える(21)。昔は、竹3本を昆布で縛り、鳥居状の形に組んで祭壇の奥に立てた(21)。早い人では13日、多くは14日に祭壇を設置する。

以前は三段の棚を手作りしていたが、やめたという家もある(18)(19)。三段の祭壇を作らない代わりに、テーブルを設置している場合もある(20)(21)。

新仏のある3年間は、親戚にお願いして拜みに来てもらう。これはこの地域の独特の風習だと考えている(21)。

供物 かつてはブドウの葉に赤飯や煮しめをのせたものを、棚の両脇に1つずつ供えた(21)。

ホトケ送り 16日は、朝食を供えたのち、供物をコモに包んで川に流したが、現在では汚れるという理由から流さずに墓地に持参している(21)。

【屋外】 **墓参** 町方では13日に墓参するが、遠瀬を含む上郷地域では、14日と15日に墓参する(18)。

盆棚 墓地には供物台が付属した墓石が多いが、墓石のない墓には木製の低い盆棚が用意されていた。

盆の火 町方では13日の夕方に焚くが、上郷地区では13日には焚かず、14日と15日の墓参の際に1度ずつ焚く。14日は墓参の後に家の前(門口)で焚く(18)(21)。15日は、午後から夕方の墓参の前に、家の門口と墓地で焚く(21)。遠瀬には墓地が4ヶ所あるが、そのうちの一つ、町営墓地では迎え火を控えるように指示があり、焚く家が少なくなった(18)それで、迎え火は墓地で焚くことをやめた(18)。ただし、墓前に火焚き台を据えて焚いている家も少ないながらもまだある(18)。

父が亡くなった時には、タカトウロウを作った。以前はよく見られたが、現在はやらない(20)。実際、2021年の訪問時、この地域でタカトウロウを掲げる家は見当たらなかった。

昭和30年代末頃までは、シジュウハットウロウを行った。墓地から家まで道すがら、細く切った竹を地面に刺し、明かりを灯した。現在は既製品の専用の燭台でシジュウハットウロウを灯す。しかし菩提寺の和尚から宗旨に合わないと言われ戸惑ったが、「もう買ってしまった」と話したら、「3日間やるといい」と言われた(21)。

事例18 Av氏 60代男性

(屋内)

盆棚 昔は三段の棚を作っていたが、やめた。

(屋外)

墓参 この地域では14日と15日に墓参する。町方では13日から墓参する。

盆の火 迎え火は墓地で焚くことをやめ、今は家の前で焚いている。遠瀬には墓地が4ヶ所あるが、町営墓地では、迎え火を焚くことを控えるよう指示があり、焚く家が非常に少なくなった。ただし、火を焚くための台を据えて焚いている家もまだ何軒かある。——お盆の時は三段くらいのタナを作って、やってだの。ごは、(墓参は)昨日(14日)ど今日(15日)。マデのほうは13日もあるけども。(ここは)迎え火も14から。うちは、墓所へ行ってもこういうの(迎え火)やるなって言われてるが、ハガではね(家の前では、やっている)。うちのほうは町営墓地だの。さ、やってるが。あんまりやらないでほしいって。かがり火あるじゃないちゃんとしたなんていうが足がついだのでやるんだけど、うちないが、あぶないでしょ。だから。(迎え火をやるなどというのはどこからの指示か)わがねえそういうのは、もう話になってるが町営墓地のほうはあまりやんねんだ。何人がでもやってる人もあるけども。(2021年8月15日、自宅)

事例19 Aw氏 男性

(屋内)

盆棚 他所では作っているところもあるが、やめた。——(棚を)やっているところもありますけど、うちはもう簡単に。よそのうちでやってると思います。(2021年8月15日、自宅)

事例⑳ Ax氏 60代男性

(屋内)

盆棚 死んで2年～3年のうちは、3段の棚を作る。昨年はコロナで移動を控えたが、親戚からの供物が上がるので、3段の棚を組んだ。今年は新仏がないので、テーブルを出しただけで済ませている。――なぐなって2年が3年はそうすんだ。なぐなった人がねえとごだばよ、そんなにやらねんだけども、去年どがよ、2年ぐらいのづぎ、あのこしたコロナであんまりうごがねんだけども、親戚だのの供物来るがらタナを組んで3段ぐらいの。あれでよぐやんだけどもね。(新仏がないので)うちはちょっとしたテーブルこだけでアレだがら。うん。

(屋外)

盆の火 父親が亡くなったときに、細い杉の木に提灯を下げた。以前はよくやったが、現在はやらなくなった。――やったことあるんだよな、おらのうちのオヤジがあんなぐなったとき、杉の、細いの採ってきてな、提灯ぶらさげで。うん。やなぐなったよな。前はよぐやったんだよな。提灯。(2021年8月15日、自宅)



図26 盆棚(事例⑳)

事例㉑ Ay氏 昭和25年生 男性

(屋内)

盆棚 昔は、竹3本をコンブで縛って鳥居のような形に組んだ。コンブが短い場合には、2本をつないで使った。竹組みには特に何も吊さなかった。祭壇の一番奥あたりに立てた。

現在は、祭壇を別に設置する場所がないので、仏壇の前に3段の祭壇(棚)を組んでいる。祭壇はかつては自作したものだが、現在の祭壇は、父が他界した折に購入したものである。他家ではテーブルなどで済ませる場合もある。

3段の棚の最上段の中央に練り出し位牌を置き、中段には西瓜やメロンなどを高坏に載せて供える。下段にはバナナと菓子を供えている。祭壇の手前に経机を置き、線香、リン、燭台をのせる。両脇に盆花を供える。

早い人であれば13日に棚を設えるが、Ay家では14日の早朝に設え、朝昼とご飯を供える。新仏が出て3年間は、親戚に頼んで拜みに来てもらう。他所では聞いたことがなく、独特の風習だと考えている。新仏のある3年間は、葬式で使用した電気式のとうろうを祭壇の脇に飾る。――ムガシはあの、こう、櫓みたいなのタゲ(竹)でやったんだけど、昆布で。うん。竹もあれなってるが(今は)ながなが。鳥居みたいな感じで3本。葬儀のどぎもよくそれあやっただよ。昆布で縛って。竹をね。1本ものの昆布で早い話がなんだ、シメ

ナワやるみたいな感じで、アレやったんですよ。長い昆布ないと2本つないでやったりしたんだけども、もうやる人なぐなった(笑)。(鳥居状の竹組の真ん中に何かつしたか)吊さない。昆布で縛っただけで。今はもう全部簡素化だからもう。(竹組みと祭壇の位置関係は)一番後ろたらいいんだがこの(祭壇の一番奥の)あたりに。(呼称は)それは私も親がら聞いてないがわかんないんだよね。なんていうがっていう記憶は。うん。ただ、いろいろなんだよね。この辺でもさまざまきりっていうが。うん。この辺は新しい仏様ってのはあの3年ぐらい親戚とが何を頼んで拜んでもらうんだよ。ホガのほうさ行けばそれがいい、この辺でも変わって。――(仏壇の)前にやるどぎもあるし、そでなくてテーブルだの別にやるけども、うちはもう、ほら、ごごしかないがら、仏壇の前に、タナをかいでるって感じ。(タナは手作りか)前はねえ、自分で作っただけども、これ、オヤジが亡くなったとき、あの、買ったんですよ。うん。(写真はおじいさんとおばあさん、私のオヤジとオフクロ。うん。(タナを設えるのは)早い人は13に出すけども。

供物 かつて両親が存命のころはブドウの葉1枚に赤飯や煮しめをのせたものを、棚の両脇に1枚ずつ供えたが、現在は行わない。以前はナスの牛とキュウリなど、上げたものを川に流したが、川が汚れるという理由から流さない。16日は朝食を供えたのち、供えたものをコモに包み、墓地へ持参する。――まあ、14日の朝はやぐやって、朝のご飯あげで、しる(昼)もご飯あげる。ムガシはねえ、あの、ご飯どが何は、赤飯は、フギの葉っぱ、でなくてあの、ブドウの葉っぱであげだんですよ。ブドウの葉っぱに両サイドだね、いまはもう、やらない(笑)。ウチはあまりホドグ様でこのオヤジどオフクロ生きてだ頃は、やってだんですけどもうさく、ムガシのあれで。フギの、ブドウの葉っぱに、赤飯どがあげで、一枚ものにあげで、うん。お供えしたんだよ。両脇さ(1つつつ)やった。お煮染めどが、なんかずであげでだんだよね。(1枚のブドウの葉の上に赤飯や煮しめなどをのせて)そうそう。ムガシはあげだもの川に流した。ナスの牛どキュウリどがって、今川汚れるつうごどで、(供物は)今もうハガショさ持ってっ

てんだけでも。

(屋外)

【飲食】 14日には、「マツコアガシ」といって、親戚などを呼び集めて集団で墓参し、その後会食をした。墓前で飲食することはこの辺りでは行わないが、八戸に勤めていた頃には、墓前で飲食する話をよく耳にした。——墓参りに行くときこの辺はマツコアガシって親戚どがなにさ頼んで、あの、14の日だけ一日だけ呼んで、ウチに集まって、それがらハガシヨ行って拝んでもらって、会食っていうそんな感じ。／(墓前飲食は)この辺はないですよ。ウチへ帰ってきてから。それは八戸のほうじゃないですか。八戸のほうではお墓の前で食べるつつうのはよく会社八戸だったからよく話聞いて。

【盆の火】 田子地区では13日の夕方に焚くが、上郷では焚かない。墓参は14・15日に各1度である。14日は墓参の後、家の前で火を焚く。今日15日は、夕方に墓参するのがいいが、2時半～3時ころに墓参するが、墓参の前に家の門口と墓所で火を焚く。——あのねえ、14の日は、ハガシヨ行ってきてがらうちの前にし(火)をたく。で、今日は行く前にしをたいで、ハガシヨへ行ってくる。まあ夕方たらいいいが2時半が3時ころ、昨日はほら、行ってきてがらしをたいで。ハガシヨの前でも焚ぐんだけど。この辺は。で、今日は行く前に焚いでからハガシヨへ行って。(ハガシヨへ行くのは)昨日と今日。今日は1回。だがら2日で2回。この辺は。16日は朝ごはんあげたら、お供えものを今はハガシヨへ持って行く。あの座布団、ちっちゃいアレ(こも)にくるんで。——この辺は迎え火なんかも焚がねんだよ。旧田子は、13の日、夜、夕方あの迎え火つつうの焚ぐんだけど、旧こっちは旧上郷地区つつんだよ。そうそう。チカノネ(塚ノ根)つつうどっから、旧上郷村なんだよね。この辺はだがら、迎え火つつうのはやらないの。14ど15だけ、ハガシヨに行くんだよね。

私が中学三年生の頃(昭和38～39年頃)までは、シジウハットウロウといって、墓地から家までの道に、竹を細く切ってろうそくを立てて地面に刺して点々と並べて明かりをともした。並べたろうそくにどのようにして点火したのかは思い出せないが、屋外ゆえに全てが灯り続けることはなかった。今は2～3段になったシジウハットウロウの専用の台があり、今年、姉が購入したところ、つい12日か13日に寺の和尚から「うちの宗派にはシジウハットウロウを立てるしきたりはない」と言われ、「買ってしまった」と言ったら、(それなら)「3日(間)やったら」と言われた。——シジウハットウロウのあれ。ハガシヨまで行く道路に、墓所まで(の参道の脇に48本の竹を)刺して行って、ろうそくつけていってという感じだった。竹を細くといで。それさろうそごう。もう、私、なんぼくらいのとぎだべなあ、おばあさんが亡くなったのが私中学校三年生のとぎだがらね。その頃はまだあったみたいなのがすんだよね。(昭和)39年、が38年あたりおばあさんの(死んだ)時はあった気がする。私25年生まれだがらね。その頃やっみたいいな記憶は小さいながらあるんですよ。／ながながろうそく全部ついてるってごどはねえがらね。ソドへ立てだがら。あれはどうして点けだがはもう忘れだけどね、墓参りに行くときこの辺はマツコアガシって親戚どがなにさ頼んで、あの、14の日だけ一日だけ呼んで、ウチに集まって、それがらハガシヨ行って拝んでもらって、会食っていうそんな感じ。／あれ、いまウチの姉が三戸さ嫁いで、去年旦那なくなっただけども、昨日行ったんだけど、宗派によって、シジウハットウロウやりなさいつつうどごどやらないつつうどごどあるらしいんだよね。うん。だがらウチの姉、買ったんだけどその、お寺さんさ13日だが12の日行ったら、和尚様が『ウチの宗派はシジウハットウロウを立てるつつうしきたりはない』と言われたって。やるなどは言わないけど買ってしまっただら、『3日やったら』って。13の日、俺仕事だがら行ってきて、で昨日も行ってきたんだけど、うん。だがら、この辺はね、ムガシはシジウハットウロウちゅうがあの、ハガシヨに行く道路にね、あだらしいホドグ様、ダーツって竹を切って竹を刺して、ハガシヨまでこうやっただす。

祖父母が亡くなった時までは、タカトウロウを掲げた。長い杉の木を伐ってきて枝を残し、提灯を下げた。太いと運ぶのに苦労するので細い木を選ぶのだが、そのめにわざわざ山へ行き、木を伐ってこなければならぬので、簡素化の時勢に合わず、ここ何十年も見えていない。八戸に勤務していたことがあるが、車で移動して夜に帰る途中、紫波では赤、青、黄色などの電気を点けているのを見かけた。山よりの地域、高速道路から見られた。今でもやっているのではないかと思う。——それ(タカトウロウ)は、かけました。今はない。今はないな。ムガシだらやりましたよ。おじいさんあたりまではやっただがなあ、この辺でも。長い杉の木切ってきて、枝を残して、あの、提灯、夕方提灯さげだもの今もうみない。ごど何十年ももう。どんどんもう簡素化なってるがら。わざわざそのためにヤマさ行って木切ってこねあなんねんだがらさ。あまり太いば運ぶの大変だがらね。おじいさんあたりまでだったがな。提灯立でだ記憶ある。なんてらがなあ。この辺では。あまり記憶にないけどね。／岩手の紫波では電気をつける。赤、青、黄色などの電気をつける。車に乗っていたころ、夜帰って来ると、なんだこりゃと思った。今もやってるんじゃないかな。高速道路のほう、山よりに見られた。(2021年8月15日、自宅)

^{ごりん}
(6)田子町山口(五林)

事例

【屋外】 **【盆棚】** 多くの家で墓と一体化した石の供物台を有しているため、臨時の盆棚は少ない。石の供物台がない墓では、新聞紙の上に低い木の板を置き、その上に供物を供えている。



図27 白煎餅に見立てた紙皿(五林共同墓地)

供物 供物として、折詰を供える家が散見され、手作りのものと購入品が見られるが、いずれも赤飯、煮しめ、果物などが詰められている。また、丸い紙皿に赤飯などの料理を供えるケースも見られる(図27)。南部地方ではせんべいを皿代わりに供物を供えたといい、その発展型ではないかと推察される。

盆の火 迎え火はほうろくの上で焚くものや、地面でじかに焚くものが見られた。(2021年8月15日、墓地)

^{きぬが}**(7)田子町田子(衣更)**

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 仏壇とは別の部屋の縁側よりに盆棚を設える(㉔)。5段の祭壇の最上段に、本尊と位牌を置き、それを挟むようにナスの牛馬を供える。以下の段には菓子や果物を供え、最下段に膳を供える(㉔)。祭壇の前に長テーブルを置き、膳を供える。両脇に盆花を供え、経机に仏具をのせる(㉔)。祭壇の両脇に、竹竿の先に花をつけたものを2本ずつ立てかける(㉔)。祭壇を古風に大きく設えるのは、祖父の意向である(㉔)。

供物 菓子や果物、ナスの牛馬である。ナスの牛馬はホトケの乗り物であるという。昔はキュウリも供えた。膳は飯、吸物、天ぷら、酢の物、漬物の5品である(㉔)。

事例㉔Az氏 昭和41年生男性 (当地出身)

(屋内)

盆棚 5段の盆棚を設え、最上段に仏壇から出した本尊と位牌を飾り、それを挟むようにナスの牛馬(いずれもナス、2本)を供える。それ以下の段には果物や菓子などを供える。最下段には膳を供える。更に、祭壇の手前に長テーブルを置き、高坏にのせた果物や菓子を供える。その両脇に盆花を供え、更にその手前に経机を置いて仏具をのせる。

盆棚の両脇に2本ずつ、長い竹を立てて花を添える。今もそうしている家は少ない。町方でもこういう形で設える人もいるが、小さく設える人のほうが多いかもしれない。しかし昭和16年生まれの子が健在なので、その意向を汲み、このような形にしている。

棚は仏壇のある部屋とは別の部屋(ザシキ)に設える。茅葺きの昔ながらの家屋では部屋数が少ないこともあり、

奥の間ではなく大勢が集まりやすく日当たりのよい部屋を選んで設える。奥の間だと暗く、電気を点けても何かイヤな感じがするので、太陽が当たるザシキに棚を設置する。――祭壇作って、竹も両側に立てて花を添えたりもするところもあります。全部(の家)ではないと思いますけど。長い竹です。どこのうちでもまず、この竹はやるやらないあると思いますけど、竹を両側に2本ずつ、それで花束。両側に2本ずつそれに花束。それをやってる所もあるし、それをやらないでただの祭壇の人もありますね。あまり、多分やってない人のほうが多いと思います。(部屋は仏壇のある部屋とは)別。別です。うっと、どこのうちも恐らく、こういう感じ、仏壇から離れたその、ま、座敷っていうがな、ムガシのその。で、祭壇やってます。殆どですね。うん。(この部屋への決まりは)ないけど昔のこういうカヤにトタンかけた昔のウチだとやっぱり部屋数が少ないので、もしなんがあったときに皆が集まれる広い場所の、奥ではなくて、日当たりのいいところを選ぶ。少し光、太陽、お日様があたるとこの座敷にこう(棚を)作る。やっぱり奥だと真っ暗ですし、昼でも電気つけてもなんかやな感じっていうか。まめにこうお日様が当たる所のこう、の座敷。どこのうちもお座敷っていうか、居間っていうか、にやってると思いますよ。／今まあ町の人は祭壇だけよこっとやって、やる感じの人も多いかとも思うけども、うちはまあ親が、じいさんがまだ元気でやってるからそれに合わせて。じゃないと私もわからないから。他所のウチも殆どがこういう形で、まあ竹までやるやらないはわからないけど祭壇作ってやってますよ。町のほうも。

供物 果物や菓子のほか、膳を供える。吸物、飯、天ぷら、酢の物、漬物の5品である。牛馬としてナスを2本供える。仏様が乗って往復すると聞く。昔はキュウリも供えた。(2021年8月15日、自宅)



図28 盆棚(事例㉔) 両脇に棹竹



図29 棹竹(盆棚の両脇)事例㉔

(8)田子町田子(田子)

事例の集約 盆に使用する品は、田子町内のスーパーやホームセンター、商店街の花屋、神仏具店などで販売されている(㉔ab)。例えば神仏具店で販売されているタカトウロウは専門の職人が製造したもので、約4,500円(㉔a)。店ではチラシを作って宣伝している。迎え火に使用するマツツ(マツアカシ)は、1袋で250～280円である(㉔ab)。

事例㉔a Ba商店 女将

盆の火 マツツアカシは280円、タカトウロウの価格は4,510円である。木工職人が製造したものであり、一般的な市販品とは異なる。以前は中国製の安価なものがあったが、最近では市場に出ていない。——(タカトウロウの台は結構高いですね)そうなんですよ。これ木工屋さんから特別作っていただいているものなので、そこら辺で市販になってないです。前までは中国産のもので安いものがあったんですが、(入荷して)来なくなって。(2021年8月15日、店内)

事例㉔b Bb商店 女将

盆の火 マツツアカシは250円。八戸の業者が製造しているという。(2021年8月15日、店内)

(9)三戸郡三戸町蛇沼本村

猿辺川支流の小猿辺川流域の山間地に位置する集落90)。

【屋内】 **盆棚** 新仏のある3年間は仏壇とは別の部屋に祭壇を作る(㉔5)。常の盆では仏壇の前に棚を設け、位牌を出して飾る(㉔5)という家もあれば、何もしない(㉔4)という家もある。盆棚は13日に設置し、16日に撤去する(㉔6)。
供物 蓮の葉の上に洗米をのせ、南瓜、トマト、枝豆の三種類とともに供える。朝昼晩の三度、家族の食事にあわせて仏前にも供える。新盆であれ常の盆であれ同様である(㉔6)。
【屋外】 **墓参** 地面に生じたコケを焼き、門口から玄関までの道を整備する(㉔4)。14・15日に墓参する(㉔6)。14日に墓から先祖を連れて帰り、翌15日には送り返す。迎え火の翌日に送るのは、自分たちの集落独特のならわしだと思う(㉔6)。
盆の火 14・15日に迎え火を焚く。14日は14時ごろに墓地へ行き、帰宅して自宅前でも焚く(㉔6)。玄関先でマツツアカシを焚くほか、新仏のある家では、墓地(㉔5)や自宅(㉔6)で「シジウハットウ」を行う。実家のある五戸では自宅でシジウハットウを灯した(㉔5)。シジウハットウは、専用の台に48本の釘が付いた既製品を用いる(㉔6)。釘ひとつひとつにキュウリの輪切りを刺すことにより、溶けた蠟が燭台に直接付かず、掃除がしやすく汚さずに長く大切に使うためのアイデアである(㉔6)。ただし、近年は若い世代では省略する人も多い(㉔5)。新仏のある家が多数あるが、タカトウロウは行わない(㉔5㉔6)。

事例㉔ Bc氏 60代 男性

庭に生えた苔を焼き、道路から玄関までの道をきれいにする。

盆棚 新仏のある時は祭壇を作ったが、常の盆では特に何もしない。

盆の火 迎え火として松のネッコを焚いた。(2021年8月15日、自宅)

事例㉔ Bd氏 昭和28年生れ 男性

(屋内)

盆棚 新盆から3年間は仏壇とは別に祭壇を設える。我が家のように(霊が)古い家では、仏壇の手前に台を設け、位牌を出して飾る。新しい仏のある家では、別に祭壇をこしらえている。——初盆ていうか、3年くらい、亡くなって新しい方はあの、別にこう、祭壇作ったりしますけど、うちみたいに古いところは仏壇のまわりにちょっとした段を作ってやる。感じですね。私は(位牌を)ちょっと出して、やっていますけど。そこのお寺さんお寺さんにも違うと思うんだけど、だいたい何でも、みんなあの仏壇にあのこう、ちょっとしたあの段を作ったりなんかしちゃうけど、新しいところはやっぱり、別に祭壇をこさえてやっています。

(屋外)

盆の火 この集落では新仏のある家が多数あるが、タカトウロウは見たことがない。シジウハットウロウは新仏のある間行。嫁いだこの家で義父が亡くなった時には、墓地でシジウハットウロウを灯した。私の実家は五戸だが、五戸では自宅でシジウ



図30 盆棚(事例㉔)



図31 シジューハットウロウ(事例㉔)



図32 キュウリの薄切りを敷く(事例㉔)

ハットウロウを灯した。若い世代では省略する人も多いようだ。——(この集落に新しい仏さまは)いっぱいいます。こちらもそうだし、この隣のそっちのウチもそうだし、そっちもそうですし、ここのウチの奥の外れのウチも新しく亡くなったところですから。ここの一番入口っていうか公民館の隣の家も新しい(仏様)です。結構、年寄りばっかだから新しいところが多いんですよ。／「私の実家(五戸)では家でやってたけど、ここはね、私むかしウチ(ここの家の)のおじいさんが亡くなった時はお墓に、持ってって、やりました。だから今それやってるかどうか分からないんだけど、若い人の代になるともう、そういうのもこう、省くひともあるみたいですけど、やってる人はやってると思います。(2021年8月15日、自宅)

事例㉔ Be氏 昭和37年生れ 男性 (その母と夫人)

現当主は3代目。当主の父が亡くなり、今年が新盆である。(屋内)

盆棚 13日に設置し、16日に撤去する。

供物 蓮の葉の上に、洗った米を載せ、カボチャ、トマト、枝豆の三種類の野菜を供える。初盆であれ常の盆であれ同じように行う。朝昼晩、3度ご飯を供える。自分たちの食事にあわせて、仏前にも供える。

(屋外)

墓参 14日、15日に墓参する。集落内の鳥居から登る道が本来の参道であるが、現在は便宜的に別の参道を使っている。14日に墓から(先祖を)連れてきて、翌15日に送る。迎えた翌日に送るというのは、この集落だけかもしれないと認識している。——(Be氏母)「毎日連れてきて、次の日送ってって」Be氏「1日近くもん」(Be氏夫人)「それ蛇沼だけだと思

けど」(笑)(Be氏母)「ほんだがもしれねえ、おらほだげだがもしれねえ」(笑)娘さん「この辺だけだべその、やだら短期間は」
盆の火 14日と15日に焚く。14日は14時ころに山(墓地)へ行き、その後自宅の前で迎え火を焚く。迎えるのは早めに、という気持ちである。翌15日は16時ころに送り火を焚く。——14時頃山(墓地)に行行って帰ってきて、ごごに火つける。

シジューハットウロウは行うが、タカトウロウはこの辺りでは行わない(写真は16:00頃に撮影)。四十八燈籠は、「シジューハットウ」と呼んでいる。玄関先に松の根の迎え火の他に専用の台を設置して焚く。48本ある釘のそれぞれに、キュウリの薄切りを刺す。溶けた蠟が燭台に直接付かず、掃除がしやすいこと、そして、新仏のある3年間大切に使うためである。このアイデアは田子の知人から聞いた。——蠟が下さ溶けると、掃除するに大変だから。直接あたんないから。次3年使うから。(この方法は)聞いたんだ。田子の人から。(2021年8月15日、自宅)

(10)三戸郡新郷村西越(S集落)

西越は、奥羽山脈の東に連なる丘陵台地に位置し、馬淵川支流浅水川の最上流部にあたり、中央を浅水川が北東流する91)。

事例の集約

【屋内】 盆棚 かつては、「棚をかく」と称して3段の祭壇を設え、仏壇の位牌をすべて出して並べた(㉔㉕)。南部地方に見られる横長の仏壇から、現在の縦長の仏壇に変えたのを機に、仏壇から位牌を出すことはやめ、仏壇の前にテーブルを置いて花や菓子を供えるようになった(㉔)。一周忌を終えたばかりで疲れたので、供物は少なく祭壇は図33のとおりシンプルである(㉔)。仏壇が立派なので、棚を作る家は少ないと思う(㉕)。和尚に尋ねると寺に来て拝むことを勧められた(㉕)。

供物 昔は、日に三度のお膳を変えたり供物をあげたり拝んだり、多くのしきたりがあり、休む余裕がなかった(㉕)。人が食事をするものと仏様の食事とは同じだという考えから、同じものをあげる(㉕)。

例年、赤飯を作って供えるが、今年は天候が悪く買い物に出られなかったため、普通のご飯を供えている。

ホトケ送り 16日にキンカモチ(㉔㉕)や、団子などさまざまなものを作って供えた(㉕)。また、「オヒナガ」と称してソウメンやソバを供えた(㉕)。ナスとキュウリの牛馬と餅を入れて送る(㉔)。ブドウの葉に赤飯をのせて供えることはしない(㉔)。神棚には多くの神仏が祀られ、縁日にあわせて毎日のようにしきたりがあった(㉔)。

【屋外】 **墓参** 14日、15日の夕方に墓参する(㉗)。

盆の火 マツアガシといって、松の根を持って行って門口で迎える(㉘)。

新仏のある家では3年間、自宅の前でシジウハットウロウを行ってきた。しかし、昨年の葬儀の際に檀那寺の住職からシジウハットウロウが宗旨にそぐわないとの指摘を受けたため、今年からやめた(㉗)。

(その他) Bg家の隣に「ふじえっこ」と呼ばれる人が住んでいた。Bg家の舅と同級生だった。誰にでも話しかけるきさくな人で、青森市内に嫁いだ後もS集落に帰って来る時に必ずお土産を持ってきてくれた(㉘)。

事例㉗ Bf氏 昭和28年生 女性 (女性の義母95歳、Bf氏のいとこ昭和18年生・女性)

間明田(まみょうだ)の出身。Bf家のおばあさんが、Bf氏の親ときょうだい。この家の奥さん(昭和28年生まれ)とはいとこの間柄である。7月末が一周忌であった。一周忌が済んだばかりで、一周忌では祭壇を豪華だったが、新盆はシンプルにしている。(屋内)

盆棚 昔は、県南で一般的にみられる横長の大きな仏壇を使っていた。『棚をかぐ』といって、三段ほどの棚を設え、仏壇の中に入れてある位牌をすべて出して並べ、さまざまなものを供えた。2代前の当主が亡くなったときに、現在使用している縦長の仏壇に変えた。以来、仏壇の位牌はそのまま、祭壇に出して並べることはなく、仏壇の前にテーブルを置き、花や菓子などを供えている。盆にはバナナなど、座る場所もないほど、さまざまなものをたくさん供えているが、今年は一周忌が終わったばかりで疲れたので、祭壇は例年よりもかなりシンプルにしているという。——(Bf氏いとこ)「そごの家によっては、なんていうの、木でこう作ったような、古いうぢさいげば、木で作ったような仏壇もあるけども、でもいま直しておらほのも木であったんだよむがし。で、棚こうやってね。とごろがほら、あにきどがなくなるとごで、仏壇もあだらしくしたの。」「新しいほどけさんあるときは、『棚をかぐ』って、三段ぐらい棚にして、で、それに前はいっぱいそれに(仏壇に)位牌入れであったのをみんな出して、並べて、で、いろいろ供えだりしたんだけど。やったったよ。おばあちゃんどがあつたつとぎね。」(Bf氏)「私たちはそれやったごもないもの」(Bf氏の義母)「あんた青森がら来たの？青森の〇〇小学校の卒業。女学校は市立女学校。いま95。」(Bf氏いとこ)「家によって昔からの風習でやっているところもあるし、若い人たちの家では今風のかたちでやっている。」(Bf氏)「何も飾っていないんだよ。この前一式やったばかりでさ。お盆は何もやってない。いつもはね、もっとさまざまバナナとか、座るところないくらいやっているんだけど今年、このまえ一周忌やったばかりで疲れではあ。」

供物 16日に仏を送る。送る日には、きんかもちを作って供えた。ナスとキュウリの牛馬ときんかもちを入れて送った。ブドウの葉に赤飯をのせて供えることはなかった。——昔はきんかもち作ってね、あげだつたと思う。なんかね、きんかもち作って、なすとキュウリやってるあれを入れて、やったどもつたなあ。

(屋外)

墓参 14日の夕方、と15日夕方に墓参する。

盆の火 以前、この家のおじいさんが亡くなったときには3年間、自宅でシジウハットウロウを行っており、檀那寺の前住職からは、何も言われることはなかった。しかし、昨年の葬儀の際に現住職から、シジウハットウロウは宗旨にそぐわないことを出席者全員の前で告げられたため、今年からやめることにした。この集落の他の家では、まだ行っていると思う。また、間明田(まみょうだ)では、墓所でシジウハットウロウを行う。平(たい)に行けばまた異なっていると思う。——(Bf氏)前までやってたんだけど、去年和尚様にね、そのシジウハットウロウはうちの宗派はやりませんっていわれでさ。今年やんながったの。今までやってだの。やってだの。シジウハットウロウごこのウチの前にやってだの。たら去年和尚様がさ、言ったんだよ。シジウハットウロウやってるみたいだけどうちの宗派は、シジウハットウロウはやる宗派じゃないですって。去年はつきり和尚様がさ。みんないだとごで。しゃべつたのよ。だから今年やってないの。去年和尚様がはつきり言ったのよ。お葬式のときに。みんないるとき。だから今年からはあ、やらないことにしたわけ。／(以前、この家のおじいさんが亡くなったとき)そのときは(現在の和尚様の父にあたる先代の和尚様は)なんも言わなかったんだよね。ずっと(シジウハットウロウを)やってたんだもの。あたしは、ちっちゃいとぎがらずーっと(シジウハットウロウを)やってらつたの。ごこのウチの前にほら。代々使ったのがあつたから、それを張り替えるわけよ。

(その他) 神棚に多くの神仏がまつられている。神棚にまつられる神以外にも、多くの神々が祭られており、その縁日にあわせて行うしきたりがあつた。——(Bf氏)親戚のおばさん「神様もこれだけでねえ、いっぱいあちこちにあつてね。今日は何の日、今日は何の日で毎日しょうじんみたい



図33 盆棚(事例㉗)

のがあったのよね。うちらちっちゃん時にはいろんなアレがあったけど、今省略してね、何ていうの、簡素化っていうのになってるがら、ホントの古い年寄りのいる家に行けば違うと思う。(2021年8月15日、自宅)

事例⑳ Bg氏 昭和2年生 女性

(屋内)

盆棚 火災で住居を失い、いまはもともと牛舎であったところの半分を居室にして住んでいるので、家にはいま、仏壇というほどのものはない。他家の盆のようすを見ることはあまりないが、床の間がある家であれば、仏壇から位牌を出して、床の間に祭壇を設けて飾っていると思う。私の家でも昔は祭壇を設けた。家にはいま、仏壇というほどのものはない。

昔は、お盆や正月になると田舎の地域では供物をあげたり拝んだり、日に三度仏様のお膳を変える、など多くのしきたりがあり、休む暇もなかった。仏様のお膳というものがどの家にもあり、人が食事をすることと同じだという考えから、同じ献立を供えた。今は立派な仏壇を設えている家が多いので、棚を作る人は少ないと思う。一般的にもう、やらない人が多いのではないかと。和尚さんに聞いたら「寺に来て拝めばいいではないか」と言われた。確かに寺に行けば一番いいかもしれない。——いやムガシはそんだったんだでもいまはなすあ、あまりやってる人もひゃあるがもしらねえ。立派だ仏壇買ってやってるがらな、あまり出す人すぐなくなったんでながべがな。(仏壇の)マエさほら、お花どがあげものどがづの、いっぱいほら。やってるわけ。ムガシだあな、お盆どがショウガツでば、いながだば面倒だもんだがささまま行事があつて、こうしているしまねえもんだつたな。あげねばなんねどが、おがまねばなんねどが。するまも日に三度仏さんにお膳こ替えてあげねばなんねどがつてな。人間がご飯食べるのどおんなじごどだつてほら、いろいろ作つてひえあげればいいたつたつてそのまま、普通あるのでもまず、仏さんのお膳こづのちゃんどどごの家にもあるどごでせ、それにあげでるのさ。／ホガのほどげさんはあまり見だことないけど、ムガシはそういうふうにして、みんな仏さんもあの床の間とかあるウチだばそつちのほうに台作つて、仏さんも出して、そうして、飾っています。

供物 毎年赤飯などを作つて供えるが、今年は天気あまりよくなかつたので作れず、ほとんど何も作っていない。ただ普通のご飯を供えている。最終日は、「オヒナガ」といって、ソウメンやソバなどを供えている。昔はキンカモチや団子などさままなものを作つて供えたものだが、今はあまり行わなくなつたと思う。——最後はオヒナガつてあの、そうめんどがお蕎麦どがそういうのはあげています。それでハアもう、お盆の最後に、なる、なつていままだ今までだばな。ムガシの人は、さままほにキンカもちどが団子どが作つてあげだもんだも、今あまりやらなくなつたんでねがな。

(屋外)

盆の火 「マツアガシ」といって、松の根を持って言つて門口でお迎えする。今日は雨が降つていたので、お迎えの火は焚かず、墓地に松を持って行つて、燃やした。——まづあがして松こもつてつて、雨降らねえばせ、このあの、このカドでおむがえのアレだつてマツ燃すつたつて雨降つてんだすけ、はあハガさばし行つてる。松こもつてつてな。／ハガでだばなす、マツもつてもやすんだいな。

その他 Bg氏の母は、この集落で生まれた。小さいころは学校でもどこでも「様」をつけて呼ばれ、呼び捨てにされることはなかつた。この集落はいまは人も少なくなり、昔のこを知る人は少なくなつた。家の隣に「ふじえっこ」という人がいた。この家の舅(義父)と同級生で、西越の小学校に通つていた人である。誰にでも話しかける気さくな人だつた。舅の話によると、腹が痛いといつておぶつてもらおうとしたことがあつたといふ。歳が離れていたので、あまりわからないが、S集落に戻つてくると必ずお土産を買つてきてくれたことは覚えてる。——「ふじえっこ」づのはごご(隣)の。もっと早くにウヂに来たときは、ウヂにも来たりもしたつたけど、でほら、ウヂのおじいさんだの一緒に学校さ入つた人だつたづがらさ。うん。小学校さ。西越の小学校さ。ふじえっこに、とみえっこづ人もあつたけども、そのふとはわがらねな。遠くさいつてウヂに来たどごがあつたがねがわがらね。ふじえっこづ人は気軽だ人で、うん。カラカラど話も誰にでも話しかける人だつたがらさ(笑)。あんだごごのウヂも誰もいなくなつたがらなす。／ウヂのシュウドじさまど同級生だつたその人ど一緒に学校さ行つたんだ。で、となりの一緒に小さいどきがら育つてるがら、隣のフジエはずるふて、てな(笑)。腹いでつてへて、オラさおぶさる気なつてオラおぶつてあつたもんだつて、へてそれを聞いておぼえでるんだ。／ウヂのどごを考える人だつたごたおんなす、ごごにほら〇〇〇〇(個人名)づの覚えでらべ、あの人がいげば、オラホのおば、小銭じえんこためでで隠してえにけるつてへてるきやなど思つてよ(笑)。それを思いだせるの。うん。今はほら、ごごにも誰もいなくなつて淋しくなつたけど、ウヂだけはまだ壊れねんでのごつて(笑)。／それぐらいのもんだのさ。あどやっぱりな、トシ違つてればそんなにわがらねけど、でも、必ずお土産買って来てけるふどだつたがらな。ごごに戻つてくるてばなす。それは覚えてる。／いや、珍しい人に会つたな。ほどげさんのおかげだな。(2021年8月15日、自宅)

(11)三戸郡南部町小向二又

小向は馬淵川左岸の丘陵地に位置し、支流猿辺川(小向川)沿岸の沖積地や馬淵川への合流地点一帯に立地している。92)聞き取りによると、二又には寺がないので、盆の期間に寺に参拝することはないといふ。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 13日の昼に、特別に製作してもらった祭壇を仏壇の脇に設け、夕方に仏壇から位牌を出して並べる(29)。

【供物】 供物として、果樹栽培の盛んな土地柄、桃、プラムなどの果物を豊富に供えている(29)。

【ホトケ送り】 16日は、朝食を供えてから、キンカモチ、串餅、饅頭などをホトケに持たせて送る。ゴミに出す家庭も多いが、丘の上にある墓地に持参し、墓地ではない場所に捨てる(29)。

【盆の火】 シジウハットウロウを玄関の中で行う。子どもたちを喜ばせる意味もある(29)。

【屋外】 **盆棚** 1974年に当地に嫁いだ時点で、すでに墓の盆棚は見当たらなかった(29)。

【墓参】 14日・15日の夕方に墓参する。

【供物】 墓前で松の根を焚き、帰宅後に家の前でも焚く。山仕事をしているので、松の入手は容易で、一年間乾燥させておいたものを用いる(29)。墓地には、長年放置された墓も多く、それらの墓の分も迎え火を焚く(29)。カラスの害を防ぐために、供物は控えめにしている。墓地に料理を供えるしきたりは出身地の浄法寺でもなかったのも、ホッとした(29)。

【飲食】 あらたまって盛大に墓前飲食することはなかったが、供物は帰宅するまでに食べきらなければならないとされた(29)。

【盆の火】 この辺りの集落では、タカウロウは行わず、シジウハットウロウを屋内で行う(29)。

事例29 Bh氏 昭和23年生 女性 20歳で浄法寺から当地へ嫁ぐ

(屋内)

【盆棚】 仏壇の隣の棚(作ってもらったもの)は、13日の昼ころから用意して夕方に拝み、同日夕方には位牌を出して並べる。——やっぱり棚も、あの、作って貰って。へて毎年。仏壇から出してね。

【供物】 二又地区は、果樹栽培の盛んな土地であり、桃、ハタンキョウ(プラム)を主に栽培している。供物として果物が豊富に供えられている。

【ホトケ送り】 16日は、朝食を食べさせてから、キンカモチや串餅、饅頭などを、それぞれの家によって異なるが、仏に持たせて送る。近年はゴミに出す場合が多いが、Bh氏はゴミに出さず、山にある墓所に持参して、墓とは別の場所に捨てる。——16日のご飯を食べて、持たせるの。モチとかなんどがってアレしてね。もだせで、はあ、おぐるんですよ。きんかもどどがね、串もどどが、あどあ、まんじゅうどどが、そのウヂによって違います。／大抵はゴミさだす。それでもオラは(ゴミには出さず)はあ、ハガシヨに持ってきてね、こっちのほう山だगरらさ、そうして置くね。ハガシヨにはあげないで(再びお供えするというわけではなく)、捨てるわけさ。お昼前にやります。朝ご飯、食べたらあげでね、そしてからはあ、モチどあれど作ったりなんがして、へて出来次第まんずはあ、おぐるわけです。

(屋外)

【盆棚】 昭和43年にこの集落に嫁いだ当時から、墓に盆棚を作っていなかった。実家のほう(浄法寺)でも、ご飯などはあげることとはなく、しきたりが似ていたのでホッとした。——実家もこっちも同じようなもんだがら、よがったなあって思って(笑)。

【墓参】 墓参は14日と15日の2日行う。墓参はいずれも夕方に行く。昨日14日は大勢でお参りに来たが、今日はそれぞれ用事があり、また、ご主人は膝が痛いと言うので、一家を代表してこれから墓参に向かうところである。仕事が忙しく、盆中も働いていたためこれからやっと墓参に向かう。——忙しくて、お盆にもはだらいで、今やっと来たの。昨日はみんなで大勢でお参りに来たが、今日はそれぞれ行くところがあって、一人で墓参しているという。

【盆の火】 墓前で松の根を焚き、帰ってきて家の前でも火を焚く。山仕事をしているので、松は豊富に手に入る。今年採取しても(乾燥しておらず)燃えにくいので、昨年採取したものを使う。

何十年も参ることがない隣のお供えをし、迎え火を焚く。長らく(お参りのない)墓が多いので、Bh氏はそれらの家の墓の分も迎え火をして花を供えている。タカウロウはこの辺りでは行わない。シジウハットウロウは、家の中(玄関)で行う。小さい子どもがいるので、子どもたちを楽しませたいという気持ちもある。子どもたちは喜んで見ている。

【供物】 カラスがつつくので、供物はあまりあげないようにしている。家のなかではあげるが、(墓前への供物は)嫁いでからやったことはない。

【飲食】 あらたまった墓前飲食の場はなかったが、墓前に供えた供物は、帰宅するまでに食べなければならないというしきたりがあった。——ウツさ来る前にね、みな食べてしまねばねえって。言われでるがらね。(2021年8月16日、自宅・墓地)



図34 盆棚(事例29)

(12)三戸郡南部町下名久井(五日市)

下名久井は名久井岳の東北、馬淵川右岸の河岸段丘状に位置する(93)。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 祭壇のことを「タナ」という。仏壇とは別に設け、最上部に位牌をすべて並べる。仏壇の扉は閉めない。かつては4本柱で、それぞれに桔梗の花を吊した。しかしリング箱を応用した手製のタナであるため、安定しなかった。義父が亡くなったのを機に、既製品の祭壇を設置するようになった。その機会に一部を除く代々の位牌をすべて繰り出し位牌にまとめ、古い位牌は今年限りですべて寺に納める予定である(33)。

【供物】 盆の一切を担当するのは家の主婦である(33)。祭壇には、供物としてコンブやカドを供える。また、参拝客から送られた贈答品を祭壇に供えている(33)。

【ホトケ送り】 送る日には、「送りごはん」といって、朝食には厚揚げの煮物、故人が好きだった料理、黒豆の煮豆などを供える(33)。ホトケの昼食として、素麺(33)やウドン(31)などを食べさせてから送る。昼にならないうちに送る家もある(33)。「ヤスミモチ」と称して餅やパンを供えたり(31)いなり寿司や、赤飯サンドを供える(33)。年配の女性であればキンカモチを供える(33)。加えて、故人が好きだったもの、例えば牛乳、ヨモギ、煎餅など(31)、あるいは餅やあんみつ、黒豆をはさんだパンケーキ(33)などを供える。これらを袋に入れてコモで包み、ホトケに持たせる(33)。

一方、送り盆にセナカアテモチなど何か特別なものを供えるということは、こちらに嫁いではならない(30)、昔は特別なものを供えていたが、現在はやらなくなった(32)という人もみられる。

【飲食】 盆には焼き肉を楽しむ(32)。

【屋外】 **墓参** 墓参14日、15日に行う。

【盆の火】 墓参の際に必ず墓地で迎え火を焚き、帰宅後に門口と玄関で家のあるじが焚く(33)。

タカウロウは行わないが、新仏のある家ではシジウハットウロウを行う(33)。きれいに長く使用するために、燭台にアルミホイルを巻く、あるいはキュウリの輪切りを刺すなどの工夫を行う(33)。ろうそくにティッシュペーパーを巻くと風が吹いても消えないと聞く(33)。

【供物】 集落の墓地には、供物として白い煎餅が供えられている様子が散見される。

事例⑩ Bi氏 女性

【ホトケ送り】 送り盆に特に変わったものを供えることはない。南郷ではセナカアテモチを供えると聞いているが、こちらに私が嫁いでは何かを供えるということを目にしたことはない。(2021年8月16日、自宅)

事例⑪ Bj氏 年配の女性

【ホトケ送り】 「ヤスミモチ」を持たせるといって、送り盆には餅でもパンでも何でもよいから供える。昼にはウドンを供え、その後何時でもよいので供えて持たせる。亡くなったおじいさんは牛乳、おばあさんはヨモギ、その娘はセンベイが好きだったので、好きな物をあげている。とにかく、ホトケさんが好きな物をあげるのが良いとおもって、供えている。——何でもいい。パンでもいいんだ。とにかく、やすみモチもだせるって。いってただけど。昔から。なにもじもちでなくてもパンでもいいんだ。うどんお昼にあげて。ヤスミモチはまだあげてない。何時でもいい。きまりねがべ。とにかくぐだせればいい。お昼にはあ、ウドンあげるとどぎ、そのどぎでもいい。／おせんべいは、あの、ほどげさんが好きだよ。じいさんは、牛乳すぎで、ばあさんはよもぎこすぎで、その娘がせんべい好きで、すぎだのあげてるの。いやそれはいつでもいいの。とにかくほどげさんが好きだのあげてればいい。(2021年8月16日、自宅)

事例⑫ Bk氏 初老の男性

【飲食】 盆には、焼き肉を楽しんでいる。

【ホトケ送り】 送り盆に特別な食物を供えることは昔やっていたが、最近はやっていない。(2021年8月16日、自宅)

事例⑬ Bl氏 昭和30年生男性の夫人 (当地へ嫁ぐ)

昨年8月におじいさんが亡くなり、一周忌である。おばあさんは13回忌である。

(屋内)

【盆棚】 盆棚のことを「タナ」という。昔は4本柱で、それぞれに桔梗の花を吊した。しかし、棚がぐらついて安定せず、リング箱を使用したりしていたようだが、義父でなければうまく組めなかった。昨年義父が亡くなったのを機に、既製品の祭壇に変えた。祭壇は仏壇とは別に設けるが、仏壇の扉は閉めない。仏壇から位牌をすべて出して飾るのは、今年が最後である。義父が去年亡くなり、その機会におばあさんの位牌と小さな子どもの位牌以外の代々の位牌をまとめてもらった。古い位牌は寺に納める予定である。——(タナは)昔はこうじゃなくて、4つこう、柱こう、あれだったの。ぐらぐらするよな。でも、おじいさんが死んでか

らはね、私たちはうまくそれ、おじいさんがやってたから、お父さん(主人)やれないから、これ買って来たの。林檎箱で作ったりもしたらしいけど、買って来たの。タナをね。／おじいさんは何ていうんだろ、4ヶ所柱をこう、ゆわえて、こうなってね。だからぐらぐらするの。うん。うーん。吊した。キキョウの花を4ヶ所にこうね。／今年だけみんな出してあげて、これ終わったらお寺にもって行くの。／おじいさん去年死んだばかりだから、おっきいのにみんな入れてもらったの。でおばあさんののど、ちっちゃい子どもののどあるから、残してもいいんだって。残したい分残して、あとの古いのはお寺に持ってきていいよって。

【供物】 おばあさんが亡くなってから、BI氏が盆の一切を担当している。祭壇にはカドや昆布を供える。

送り盆の日は、16日は、お昼を食べさせてから(死者の霊を)帰す。気の早い家ではすでにホトケを送り終わっている時間だと思うが、我が家では今朝はまだ朝食を供えたばかりである。

「送りご飯」と称して、朝食には厚揚げの煮物、故人が好きだったキュウリの漬け物やトマト、黒豆の煮豆を供える。また、いなり寿司、か赤飯を挟んだセンパイ(このあたりでヤスミッコに食べるおやつ)や団子などを供える。このあたりの年配の女性であれば、キンカモチを作って供える。

11:00頃には、昼食としてそうめんを供える。おやつとして餅やあんみつ、黒豆をはさんだパンケーキ(故人の好物が黒豆なので)などを作って供える。それらをまとめて最後に、袋に入れてコモにくるんでホトケ様に持たせる。

いただいた供物は本来、開封して飾るものだと聞いているが、忙しいので開けずに供えている。——忙しくて開けてないけど、本当は持ってきてくれたものをしまっておかないで開けて飾るんだって。／おやつに、お餅とかね、なんかあんみつとか、なんか作って持たせます。うちも婆さん死んじゃったがらね、私(が担当)だから、私はパンミックスで何が作って、あげてます。／いまから作るから、今は朝ご飯しかあげでないよ。早い人はもうみんな送ってしまうみたいだけど、私はお昼までに送るから。でお昼にそうめんとか、食べさせて、そしておやつ何か作って。／「うちはこうやっているだけのことだから。うん。見ていいよ。簡単な送りご飯。ソウメンと、漬物とかこうやってあげて。んで、おいなりさんとかね、赤飯をはさんだりとか。こちら辺ではこうやって休みっこに食べるんだよ。でなかったらおいなりさんを詰める。おばあさんだちだば餅、キンカ餅みたいのつくるけど、ただ単に豆こやったり、団子やったり。豆は煮豆とか小豆とか。黒豆の煮豆はおばあさんが好きだったから、あげてるの。本当は小豆挟むんだけど。左奥が素麺、まんなかが胡瓜の漬物。これ(右のお膳)は朝。お昼は(左のお膳の)素麺。これ全部ね、最後に袋に入れて持たせるの。だから朝の分は取らない(片付けない)の。いつも昼は朝のものと、お昼あげるんだけど、一緒にもういま袋に入れてコモにくるんで持たせるから、お昼はご飯でなくて素麺いつもあげてるの。ところととか。真ん中のは油揚げの豆腐煮たの。漬物と、野菜。トマト好きだったから、いつもトマトときゅうりの漬物あげるの。

【屋外】

【墓参】 墓参は14・15日に行う。

【盆の火】 墓参の折に墓地で焚き、自宅の敷地の入り口と、木戸口で、いずれも戸主が焚く。

「シジューハットウ」を行う。燭台にアルミホイルを巻いたり、キュウリを差したりすると翌年以降もきれいに使えると聞き、アルミホイルを敷いて使っている。また、ロウソクにティッシュを巻くと風が吹いても消えないという。タカトウロウは行わない。——「シジューハットウ」(四十八灯籠)もやった。タカトウロウはやらない。うちはね、(シジューハットウに)アルミホイル敷いた。そすと、きれいにアレだっていうが。来年のために。キュウリやったり、ロウソクにね、ティッシュまいでやると、風吹いても燃えるよ、どがって。(2021年8月16日、自宅)



図35 盆棚(事例㉓)



図36 供物(事例㉓)



図37 供物(事例㉓)

(13)三戸郡三戸町泉山

泉山は馬淵川の右岸、名久井岳の西麓に位置する94)。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 13日午後から組み立てはじめ、夕方までに完成する。4本の柱を立て、それぞれに花を飾る。繰り出し位牌と先祖の写真を飾り、盆中は仏壇を閉じる。この地域では昔からこのような形の盆棚を設えるが、他の地域には見られないと考えている(36)。一方で、特別の祭壇を設けることはないという人もおり(35)、現在は既製品のタナを用いるようになっていく(36)。送り盆の際にミヤゲを持たせるようなことはしない(34)。

(その他) 泉山7歳児参りはコロナのために2年ほど中止になったが、再開した(35)。

事例34 Bm氏 女性

供物 送り盆にホトケにお土産を持たせるような風習は行わない。(2021年8月16日、自宅)

事例35 Bn氏 女性

(屋内)

盆棚 このあたりでは仏壇ではなく4本の柱を立てた祭壇を設ける家もあるが、我が家では特別の祭壇を設けることはない。翌年に小学校に入る子どもが山に登る風習(泉山七歳児参り)は、ここ2年ばかりコロナのために中止になったが、その後は続いている。——うちはもう何もやっていない。年寄りのいる家だとやっているかもしれませんね。8時前くらいには片付けてしまってる。/この辺はあの、普通の仏壇でなくてこう、4本こうやってこんな感じでやってるどごとがって、あるんです。やってるどごありますよね。うちはもうあたし来たどぎはやってなかったけど。この辺まず、神道だから、ベツウ様だからさあ。(2021年8月16日、自宅)



図38 盆棚(事例36)

うんで、そのあと片付けるみたいです。

(屋外)

墓参 14日・15日に墓参する。(2021年8月16日、自宅)

(14)十和田市(旧十和田湖町)法量

相坂川(奥入瀬川)上流から中流にかけての左岸、八甲田山系の丘陵とそれに続く台地上に位置する95)

事例36 Bo氏 60代 男性

(屋内)

盆棚 盆棚づくりは13日の午後から始め、夕方には出来上がる。4本の柱を立て、それぞれに花を飾る。繰り出し位牌と先祖の写真を飾る。盆中は仏壇を閉じる。泉山では、昔から4本の柱を組んで盆棚を作っているが、他の地域ではやっていないようだ。昔は集落のどの家も4本柱の棚を作っていたが、現在は既製品の棚を用いるようになっている。

供物 膳は14日の朝に供える。

ホトケ送り 送り盆は、朝ご飯を供え、その後軽食としてそうめんを供えたのち、午前10時ころを目安に盆棚を片付ける。供物はコモに包み、以前は川に流していたが、近年は収集日にあわせてゴミとして捨てている。このあたりでは、供物としてキンカモチのようなものは上げることはない。三戸のマチのほうではやっているかもしれないと思う。盆の供物とは別に、白と黒の蒸しまんじゅうを作る。——準備して、前は川に流してたんですけども、あのコモっていうかそれにくるんで明日ゴミ収集っていうか今はもう流されなくなってるんでもう支度してもうあの、出すだけにしているんですけど。いまちょうど片付けているところなんです。まずだいたいもう午前中10時ころだいたい目安あたりで片付けてるんで。まず普通朝ご飯ちょっとやって最後はあの、そうめんかな、一旦それをやっすぐまず下げて、最後軽い食事っていうかそうめんか何かあげてそれで終わりって

事例の集約

【屋内】 仏壇と別に三段の祭壇を設け、祭壇にはすべての位牌を仏壇から出して並べる。盆中は仏壇の扉を閉める。手前に机を置いてろうそくを立て、トウロウを一对並べ、生花と造花を供える。

送り盆にはソウメンを供え、餅は供えない。送る時間は家によって異なり、朝食後におやつとソウメンを供えて午前8時ころに送る人もあれば、昼頃に送る人もある。

事例㉗ Bp氏 60代 女性

(屋内)

【盆棚】 仏壇とは別に祭壇を作り、仏壇は閉める。三段になった祭壇にはすべての位牌を並べ、手前に机を置いてろうそくを立てる。燈籠を1対並べ、生花と造花を供える。供物を吊すことはない。

【ホトケ送り】 送り盆にはソウメンを供え、餅は供えない。各家によって送る時間は異なり、朝食を供えておやつとそうめんを供えて朝8時頃に送る人もあれば、昼ころに送る人もある。――早い人はもう、朝ご飯やって、おやつ食べさせて、おそうめんあげて、もう、8時ころには送ったって人もいたし、お昼ごろにあわせて送る人もある(2021年8月16日、自宅)。

(15)三戸郡階上町道仏(小舟渡)

青森県の東南端、南部は岩手県に接する太平洋岸の丘陵地にある。共同墓地は集落の北東の外れ、海辺の高台にある。

事例の集約

【屋内】 盆棚 この地域では仏壇とは別に祭壇を設けるのが一般的である(㉔㉕)。盆棚は幅約一間の三段型(㉔㉕)や五段型(㉖)で、40年ほど前に家族が亡くなったのを機に葬儀屋から購入した(㉔)、仏具屋から購入した(㉕)といった既製品が用いられている(㉔㉕㉖)。それ以前は、テーブルを盆棚として用いており、三段の祭壇はむしろ「新しい形式」であるという(㉔)。一方で、以前は五段型の祭壇を用いていたが、現在はテーブルを用いるようになった、という家もある(㉖)。新盆が過ぎて盆棚が不要になり、親戚に譲ろうとしたところ、石材店から「死者に使ったものは他人に譲ることはできない」と言われ、譲渡を断念したという人もある(㉗)。ちなみにこの石材店は、水桶についても他人から借りることを戒め「他人のものを使ってはならない」と言ったという。話者である高齢の女性は心を痛め、非常に困っていた様子であった(㉗)。テーブルの両脇に置かれた電気燈籠は、常の盆でも設置する(㉔)。

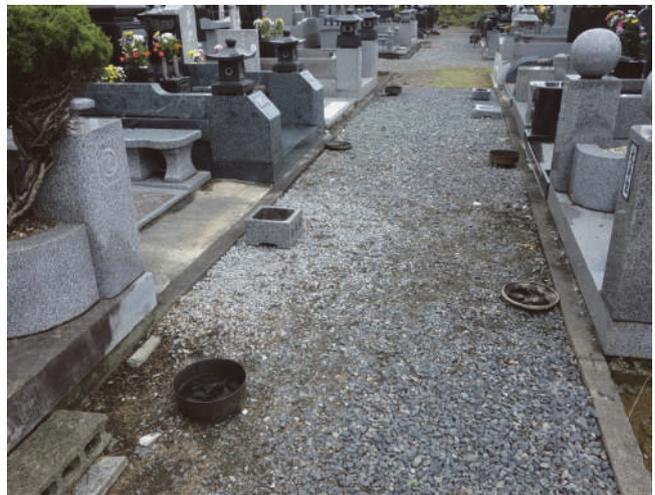


図39 マツダイ(小舟渡の墓地)

盆中は仏壇から位牌を出して祭壇の最上段に置く(㉔)。その下の段にはコンブ(㉘)、ナス、キュウリ、(㉘㉙)、果物、菓子、膳などの供物を並べる(㉔)。三段の祭壇を用いず、仏壇の前に引き出し式のトレーを出して供物を並べる家もある(㉘)。

【供物】 小さなナスに爪楊枝を刺して、馬と牛を表現する。百合根はホトケが乗って帰る舟である。また、一握りのソバの苗を供える(㉔)。百合根やソバの苗は、お盆に供えるために種から育てて用意したものである(㉔)。膳には、赤飯、煮しめ、キュウリの酢の物、南瓜の煮付けなどを供える(㉔)。

【客仏】 盆以外の期間には、家を離れている身内の者や夫人の親、叔父、叔母、兄、姉などのこの家に属さないホトケのために、仏壇の脇の下方に高盛飯や果物を供える。上からは取って食べられないので、下方に供える。ゆえに、先祖への供えものと、それ以外の先祖への供え物と2組の供え物になる。これは、身内の者からの助言で始めた(㉔)。

【ホトケ送り】 16日の送り盆では、昼食をあげたのち、セナカアテ(㉔㉕㉖)、うどん(㉔)を供える。それらと、花や果物を1つずつ(㉔)、線香やろうそく、お金(小遣いとして)(㉘)などをコモに入れて包み、海に流した(㉔㉕)。海をわたってホトケが帰るというイメージがあった(㉔)。コモに包むか(㉔)または、ゴミ減量のために、コモを敷かないという家ではコモに包まずに(㉔)、いずれにしても、現在はゴミとして廃棄する(㉔㉕㉖)。

【屋外】 盆棚 かつては墓前に盆棚を作った(㉘㉙)。昭和40年頃の記憶では、ウツギの木で棚を作り、コモを敷いて、ハート型の葉の上に供物を1種類ずつ並べた(㉙)。今は石製の供物台があるので棚を作る家はない(㉘)。

【墓参】 現在は、13日、14日、15日の夕方に墓参する人が多い(㉘㉙㉚㉛)が、近年は夕方といっても早めに墓参する傾向がある(㉘)。かつては、上記㉔に加え、14日のみ、朝にも墓参(料理を持参しての「ホカイ」)するのが地域の習わしだったが

(④①④②)、墓地内で交通事故が起きてからは(④①)、14日の朝の墓参は少なくなった(④①③)、ほぼ見なくなった(④②)、という人がいる一方で、朝も墓参している人も(④①)。朝に墓参する場合には、かなり早い時間に来るという(④①)。近年は、地元の高校が出演する高校野球の中継時間や、各人の生活上の都合や天候により墓参の時間を決める人が多い(③③③④①)。

盆の火 13日から15日まで、墓参の折に墓地で「タイマツ」「マツアカシ」(迎え火)を焚く(③③④①④①)。墓参との関係で焚く時間は夕方が多い(④①)。16日は墓参せず(④①)、火も焚かない(③③④①)。また、墓地だけではなく家の門口でも焚く(④①)。迎え火として、提灯を下げる家もある(④①)。シジウハットウロウは行うが、タカトウロウは行わない(③③)。

供物 以前は、14日の朝のみ「ホカイ」といって、墓前に料理を供えた(④①③)。当日の午前4時頃に主婦が起きて、赤飯、煮しめ、カボチャ、キュウリの酢の物、ナスなどの料理(④①④②)を、重箱に詰めて用意した(④①)。墓前で料理を重箱からコモの上に移した(④①)。また、蓮の葉に包んで持参したという人も(④①)。その後は弁当(折詰)形式が一般的になり(③③)、現在も弁当形式で供えている人が(③③③③)が、あまり見られなくなった(④①④②)。赤飯のみ持参して、墓前で茶碗に詰め替えて供える人も(④①)。皿がわりのセンペイを供える人も(③③)。これらの料理を、墓前に集まった者たちで食べてから家に帰った(④①)。しかし、朝の墓参時に墓地内で交通事故が起きてからは(④①)、墓前に供えず自宅で供えるようになった(④①)。同日の夕刻にも再び墓参し、タイマツを焚いた(④①)。

屋内の盆棚と同様に、小さなナスに爪楊枝を刺して、馬と牛を表現する。百合根はホトケが乗って帰る舟である。また、一握りのソバの苗を供える(④①)。百合根やソバの苗は、お盆に供えるために種から育てて用意したものである(④①)。このように、従来は多くの供物を供え、折詰も置いて帰ったものだが(④①)、近年は、カラスのいたずらや、雨による供物の溶解などの懸念(③③)、持ち帰りの推奨(③③)から、供え物が減ると同時に、缶ジュースなどが多くなった(③③)。「環境を守るために」できるだけ供物をあげないように(少量のお菓子で済ませるように)している(③③)。

事例③③ Bq氏 昭和29年生 男性

(屋内)

盆棚 特別な棚を作らず、仏壇の前にトレーを引き出して供物をあげる。

供物 長い昆布や果物、ナスやキュウリを供えた。——(屋内のお盆の棚は)仏壇の前にちょこっと引き出して、あげる。別に棚を作ることはない。——ムガシはあらあ、家のナガだったら、昆布の長い、果物ど置いたり、茄子とが胡瓜置いたりしたったけど、ハガの前ではあんまりやらねえ今はな。

(屋外)

盆棚 昔は墓前に、供物をあげるための棚を作ったが、今は墓石に付属する立派な石製の供物台があるので棚を作ることはない。——(墓所の棚は)あるある。いま立派になってんだろ。だからそういうのやらねえやな。膳こ立で、ものっこ上げるためのな。ムガシはあらあ、家のながだったら、昆布の長い、果物どおいだり、茄子とが胡瓜おいだりしたったけど、ハガの前ではあんまりやらねえ今はな。／墓の前に棚作るっていうのは若いころあまり記憶ないな。／鮫や美保野のほうに行くと、棚を大きく段にして祭っているのを見ることがあるよ。

墓参 墓参の時間帯は、八戸の光星学院の高校野球の試合の放送があればその時間を避けるなど、各人の都合でさまざまである。今日は雨の天気予報なので、みんな早めに来ている。ただ、近年は早く来る傾向があり、昔はほとんどみな夕方に墓参していたものが、次第に早めに変ってきている。——みんな今ごろの時間に来るんでしょうか)そこの家によってまちまちだよ。八戸の光星学院の野球の試合の放送があれば、その時間を避けてなど。(今日この時間に来たのは)やっぱり天候もあるし、みんな早めにする。昔は夕方が多かったけれど、みんな今は早めに来てる。昔は夕方だったけれど、だんだん変わって来てる。／(参拝に来るのが多いのは、昔は)夕方。だいたいほとんど夕方なんだよな。

盆の火 13日から15日まで、毎日墓地に来て迎え火を焚く。16日はホトケを送る日だが、火は焚かない。——(迎え火はいつから)13日から。15日まで。16日は火は焚かず、送る日。

シジウハットウロウは行うが、タカトウロウは行わない。階上と八戸ではまた異なる。——(シジウハットウは)やる。(タカトウロウは)やらない。階上も八戸も違う。

供物 供え物を折に入れた弁当形式の供物を供える人もいれば、センペイを供える人も。だが、近年はカラスが汚したり、雨の日はセンペイが雨で濡れてベタベタになって汚れるというので、缶ジュースなどで済ませることが多くなってきた。——(お供え物をパックに入れてくる人は)そういう人もある。雨の日はべたべたになるのでせんべいなどをあげないという場合もある。／今はだんだん上げなくなっている。鳥とかも。汚すからというので、お供えものも昔ほどあげなくなった。缶ジュースなどそういうのが多くなった。(必ずせんべいを供えるのが地域の特徴ですか)別にそれはうちでやってるだけで、分家の人たちとかやっぱり持って来てあげてくれる人も。／雨降ればベタベタになるがらよ。ホントはあまりあげないんだ。なるべく雨に降られでもよ、汚れないようなものあげでさ。(2023年8月14日、墓地)

事例③ Br氏 昭和32年生 男性

(屋内)

盆棚 小舟渡では、仏壇とは別に祭壇を設ける。——(仏壇とは別に棚を作っていますか)はい。大抵は別に。祭壇を。

(屋外)

供物 昔は折り詰めを供えていたようだが、現在は持ち帰りが推奨されていることからあまり見られない。環境を守るために、できるだけ供物をあげないようにしている。我が家では、少量のお菓子で済ませることにしている。——(パック入りの弁当形式のお供えは)そういうのを昔はやっていたような気もしますが、今は持ち帰るということになっているので。昔はあったんですが、今は…(重箱ですか)ああどうだろう?うちは分家なのでちょっとしたお菓子だけなんですけど。/環境を守るために極力あげないようにしています。本家さんではそうしているかもしれませんね。このへんが本家の墓です。

墓参 この集落では13日の夕方から墓参する人が多い。今日は天気予報をみて午前中に済ませようと思い、いまの時間に来ている——午後になるとみんな(墓参に)いらっしやると思うんだけど。夕方。たまたま今日天気の関係で午前に行こうかって。はい夕方ですね。

盆の火 迎え火は、夕方に焚くことが多いという。(2023年8月14日、墓地)

事例④ Bs氏 昭和26生 男性 (およびその夫人)

(屋内)

盆棚 神棚の左に仏壇があり、盆中はその仏壇から位牌を出して空にし、幅1間、3段型の祭壇でまつ。この祭壇は40年ほど前に父が亡くなったとき、兄弟のうちの1人が仏具店から購入した。初七日、四十九日もこの祭壇を用いた。それ以来、この祭壇を用いているが、その前はテーブルを置いて供物をあげていた。三段の盆棚は新しい形式である。祭壇の最上段の中央に繰り出し位牌、両脇に高坏を2対据えて果物を供える。二段目の中央に高坏を置き、菓子を供える。三段目にはお膳を供える。——仏壇の前に、一段二段三段って、葬儀やさんなんかで売ってるべ。1間くらいのやつ。あれ3段ぐらいの。お供えやって。(昔からですか)いやあ、そうでない。これ、何年だ?もう40年ぐらい前だな?前に出してるんだ。その前は、テーブルあるべ、テーブル一つだけ置いて。それにモリッコで飾ってたんだ。3段でなく。/オヤジが亡くなったとき、早え話、もの買って、上げたりするべ。その亡くなる年。だからそのときに兄弟のなかでこの三段のやつを(仏具屋から)買ってくれたんだよね。兄弟で。だからそれを使って飾るようになった。その前はテーブル。葬式するとき、はえはなし、花とかなんとかかって買ってあげるべ。そんな感じで供養のために買ってもらったのがこれ。だから、葬儀のあとからだな。初七日とか四十九日とか、その時から使ってる。買ってくれるほうは、法事なんかで使うと思って買ってくれて



図40 盆棚(事例④)

る。(南部地方では三段の盆棚を見かけますが、新しい様式でしょうか)早い。あど。ずっとあど。(以前は)こんな感じのテーブルあるべ。これをこの前に一段だけ。仏壇の前に置いて。(その前にはどんな盆棚を)たいがいみなテーブルだったんじゃないのがな。

供物 去年まではちいさなナスを買って爪楊枝を挿して供えた。馬で来て牛で帰ると聞いた。百合根は船であり、乗って帰るためのものだと思う。また、蕎麦の苗を供えるが、意味はわからない。お膳には赤飯、煮染め、胡瓜の酢の物、南瓜の煮付けなどを供える。16日には昼ご飯をあげ、背中あて(既製品)とうどんを供える。これらの意味はわからず、ただ昔からやっている。また、供えた食事すべての他に、花や果物などを1個ずつ持たせてやるつもりで入れる。かつてはコモに包んで海に流したが、現在はゴミ減量のためにコモは敷していない。海をわたって帰って行くというイメージがあった。うどんなどつゆの出るものは、スーパーの袋に入れてゴミとして廃棄する。なお、盆の時期以外には、この家の先祖以外の者のために、たとえば外に出ている身内の者や、夫人の親、叔父叔母、兄、姉などこの家のホトケさんではない人たちのために、仏壇の脇の下方にご飯茶碗にご飯を盛ったり、高坏に果物をのせて供える。上からは取って食べられないので、下方に供える。だから、供え物は2つになる。何年か前に、そういうふうにしたほうがいいという話を身内から聞いたので、供えている。——(最終日の昼には)(Bs夫人)背中あて。それからうどんとか。それからこのあげたご飯全部。お花と。果物とか、何でもこう、何でも1個ずつ持たせて。持たせるつもりで、今はもう流せないから、ゴミに出すんですけど。あれをみんな袋に入れて。水がでたりするから、うどんなんか。つゆは

ちょっと捨てるんだけど。袋は普通の。スーパーの袋とか。そうして送るんです。お花持たせてね。果物とか何でもいれて。(背中あてやうどんの意味は)くわしくわからない。昔からやってることだから。(Bs夫人)背負っていぐって感じなのがな。これ(せなかあての商品のパッケージを示して)には何て書いてあるかな。気にしたことないから。ひももついでるから、そういう意味だと思う。(うどんは)(Bs夫人)わからないけど、うどんは何かずっとあげてたから。(Bs氏)結果的に昔は海に流した、海わたって帰っていぐって感じで。山のほうだったら川にながすとがってムガシあったんじゃないのがな。(Bs夫人)馬とか牛とかってね、前はナス刺してね。ナスに爪楊枝を刺して、馬で来て牛で帰るんだって。前はコモあったけど、省略してあげてない。(Bs氏)ゴミ減らすのもあって。(ナスをやめたのは)(Bs夫人)今年。今年のはじめて。去年までちっちゃいの買ったりしちゃったけどね。(百合の球根の意味は)(Bs夫人)船かな。何だろう。乗って帰るあれになるのかな。(Bs夫人)蕎麦は何だろうね。でもよくあげてたよ。ああ蕎麦なんだろう。(祭壇は誰のため)先祖。(それ以外の何かのために供えることはありますか)(Bs夫人)下にいつも置いてますよ。あの、今はここ片付けたけど、ホトケさんにご飯があがっても、こっちの下にも、うちの人たちでなく、外に出て身内の人だとか、あの、ここのホトケさんでない人達のために、ご飯茶碗に、あげてます。(Bs氏)仏壇の脇、下のほうにな。(Bs夫人)上からは取ってたべられないそうです。だから、下のほうにね、こういう高坏とか、この下において、そしてこれがないときには、ご飯はあげてます。上げるときは一緒に。お盆じゃないとき。普通るとき。(Bs氏)まず、家族でなくなった人はここに入るけども、そうでない人間はあげたもの食べられないから、一番したのほうに。(Bs夫人)自分の親とか、おじさんとかおばさんとか、みんなこう、親戚ありますよね。よそからあつたち来てるから。だからそういう人とか、うちから出てる人とか。お兄さんたちとか、お姉さんたちとか、亡くなった人たちのために、この下に。お盆以外ですね。高坏なんかの上ののつけて。果物なんかも下に。(家のホトケのためのもの)二種類になる。なんとなく、自分の親とか亡くなってから、上からはやっぱり取ってたべられないみたいだから、そういうのあげたほうがいいって。何年くらい前かなあ。自分の身内のあれから聞いたと思います。お盆のときはそういう意識してないです。/16日は昼ご飯やってが、それをかたづけて、それを花と一緒に贈るっていう感じ。昔は海に流したもんだんだ。コモに包んで。今はできないから、ゴミに出してる。昔は海にそっと流したり、投げたり。

(屋外)

墓参 13日は夕、14日の朝と夕、15日は夕方に墓参する。そのような形で墓参するのは昭和50年頃までだった。車で墓地へ集まるようになって交通事故が起きてから、朝に墓参しないようになった。——(14日は朝に墓参してた)夕方になったら行くんですけど、いまあの、一事故が起きたんですよ、なんが、お墓でなんか事故が起きてからその朝のがなくなったの。(Bs氏)事故っていうのは、車でみんな行くから。

盆の火 夕刻に「たいまつ」を焚く。

供物 かつてはホカイといって、14日の朝に午前4時ころには起きて、赤飯、煮染め、カボチャ、キュウリ、ナスなどを使いたいろいろな料理を重箱に詰めて用意した。墓前では、重箱から料理を出して、コモの上に供えた。百合根と、20~30cmほどまで育てた蕎麦の苗を供えた。この蕎麦は、お盆に供えるために種から育てたものである。隣家のおばあさんからもらって上げていた。今は簡素化されているので、ナスやキュウリとともに、軽く一握りの蕎麦の苗を束ねて供えている。百合根もかつては掘ってきて供えたものである。墓前で供えた食物をみんなで一緒に食べて帰った。食物を持参して供えるのは14日の朝だけであった。しかし、墓地で事故が起きてからは、どの家もみな朝は家で供えるだけになった。同じ日の夕刻にも再び墓参し、「たいまつ」を焚いた。折詰を上げるようになった後も、供えた食物はみんなで食べ、そのまま置いて帰った。カラスがいたずらして汚れるというので、みな自然にやめるようになった。16日には、昼ご飯を供えて、供えた供物と花をコモに包んで海に流したが、現在はゴミに出している。——(墓に折詰を持参することは)もうなくなった。30年以上たつんじゃないのがな。今日14日だべ。14日の朝来たんだよ。ホカイだかってな。ホカイといって。朝来たんだよ。朝ど晩。朝はあら、ニシメとか、さまざまな食べ物あげて。夜は普通に単なるあら、いつもやってるような感じに。墓参り。/(持参する容器は)重箱。/(プラスチックの折に入れることは)それごそムガシは、あげで一緒に食べて残ったのをそのまま置いて帰ったわけ。うん。ところが、帰るがら鳥いたずらするべ。みんなまわりじゅう、汚れでしまつて。それが昔はやってだんだけど、段々みんなきれいにするように、感じになって自然とやめた。/盆中は。ホカイっていうのは、朝行って、一緒にそごでご飯たべでうちへ帰ってきて、夜は夜でたいまつ。だから14日だけ(昔は)やってたの。だんだんそれが、みんながみんな片付けてくれればいいんだけど、持ち帰りしないとすれば、カラスがこれ食べながら全部散らかしてしまう。ずっとそれがムガシからあったんだべなまずな。(15日の朝は)特になし。朝はなし。14日だけ朝(にお供え)。13・14・15って夕方だけ。昔はな。私が23~24歳あたりまでかな。(私は)昭和26年生まれ。16日は昼ご飯やってが、それをかたづけて、それを花と一緒に送るっていう感じ。昔は海に流したもんだんだ。コモに包んで。今はできないから、ゴミに出してる。昔は海にそっと流したり、投げたり。/(折詰にして行くのは)(Bs夫人)前は14日の朝必ず、赤飯とか煮しめとか、かぼちゃ、胡瓜、茄子とかいろんなものを作った料理を詰めて朝持ってったんですよ。お墓に。そしてまた夕方になったら行くんですけど、いまあの、一事故が起きたんですよ、なんが、お墓でなんか事故が起きてからその朝のがなくなったの。(Bs氏)事故っていうのは、車でみんな行くから。(Bs夫人)それで朝はないことに、朝はうちであげるようになって、今はみんなウチであげると思うんだけど。ええ。前はね、14日の朝はやく起きて、支度4時ころから赤飯とかいろんな料理してそれを持って、お墓に行くために早く起きてそれを作ったんですよ。(プラスチックのバックですか)(Bs氏)ないな。みんな

な重箱だったがらな。昔は。重箱から出して、コモの上にあげるんだよ。重箱から出して。(Bs夫人)あんまりコモにあげだ記憶ない。あど、百合の球根とが。ね。掘ってほら。あの、そば。そばをあのお盆のために撒いで、このくらい(20~30cmくらい)までおがして。そして、あげたりしたんだけど。植物。ここにあげるために、それにあわせて撒いでね。いつも隣のおばあさんがらもらってきてあげだったんだけど。今もう何でも省略してるがら。コモの上に。ただ上げておくの。茄子とか胡瓜とかと一緒に。軽く一握りくらい持ってきて、束ねて。あとは百合の球根。掘ってきてね。だから必ずここではみんな植えてるんだけど。いまはみんなね。省略して省略して。

飲食 墓前の供物はみんなで食べて帰った。

(その他) ナノカボンの行事、たとえば7回水を浴びるなどの習俗については、聞かない。このあたりには屋敷墓のある家が何軒かあったが、墓じまいをした家が多い。(2023年8月14日、自宅)

事例④ Bt氏 昭和43年生 女性

(屋内) **盆棚** 葬儀屋から買った3段の棚を小さいころから家では使っている。——(家で三段で棚を作るのは)小さいころからあった。葬儀屋から買った。

(屋外) **盆棚** 墓石に付属する供物台を盆棚として使用している。

墓参 13・14・15日は夕方に墓参することが多いが、あまり時間に関係なく、例えば今日は天候をみて午前中に墓参している。

盆の火 墓参の折に毎日墓地で迎え火を焚く。16日は焚かない。——(火を焚くのは)時間は関係なく、迎え火ということですから、時間は、あと天気の関係であまりひどくならないうちに午前に来たりとか、たいていは夕方ころが多いですけど。3日間毎日。131415。16日は特にしないです。

供物 昔は弁当パックに供物をいれ、14日の朝の早い時間に来て置いておくことがあったが、今はほとんど見ない。16日にはコモに包んで供物を処分する。——(供物の処理は)16日。コモに包んで。(弁当のパックにお供えものを入れることは)この辺では、本当に昔はやってたみたいですけど、朝早く来て14日とか。おいてみたいですけど、今はあんまりそれはない。昔は、まずここでもやってる人もいるかもしれないけど。(2023年8月14日、自宅)

事例④ Bu氏 昭和29年生 男性 (小学4~5年生ころの記憶)

(屋外)

墓参 昔は、14日の朝に墓参をして供物を供えたが、カラスの害を避けるために、現在では夕方に墓参に来るのが一般的である。——昔は(お墓参りは)14日の朝だったんですよ。もう大分わたしたちが小さいころだったんですけど、朝やっぱり手作りでいろんなものを家庭で作ってきてお供えして。いまはもうそれが中止っていうことになって。カラスとかがあって、今は夕方だけお参りにくるっていう感じになっています。(今日、午前中に来られているのはなぜですか)今日は天気。雨の降る前に来ようと思ひまして。

供物 この地域では、手作りの供物を持参する家もまだ多いと思っている。煮しめ、お赤飯、かぼちゃ、胡瓜の酢の物を供える。折詰形式の供物は見かけない。百合根は、お盆よりもお正月のものという印象がある。——(いまも手作りされているんですね)私はそうですね。母親がもうそういうふうなのをやる人でしたので、私が元気なうちとは思って来てるんですけど。(手作りは少なくなりましたか)この部落でしたら、多いんじゃないかなと思うところがあるんですけど、他所のみたことないので自分のことしかわからないんですけど。(弁当形式は?)お供え用のお弁当ですね、どうでしょう。見かけたことがないような気がするんですけどちょっとわからないですね。／百合根は、そうですね。でも、お盆よりもお正月のほうの記憶がある。母親に、冬、百合の根あるって、聞きに来る人があったと思う。

盆棚 小学校4~5年生当時(昭和40年頃)の記憶では、ウツギの木で棚をしつらえ、コモを敷き、野から摘んできたハート型の葉の上に、供物を1つずつのせて供えた記憶がある。実家では朝に墓参することがなく、当地へ嫁いで思うに、朝の墓参はここだけの風習なのかと感じている。——昔は、ウツギの木ってありますよね。それで棚っこ作って、であの、コモっていうのかしら、今でもワラであんだようなもの。それをやって、その上に、こう、なんていうの、葉っぱ、ササギの葉みたいな、野菜の葉っぱ、こう、ハート型みたいなかんじのをつんできて、それに1こずつこう、載せるみたいな感じでわたしたち小さいころやってたんですけど。家庭でつくったものをのせて。朝来るっていうのは、同じ山手のほうでもあまり聞かなかったみたいで、私が出たところは。ありました。ここだけの風習かなって今になって思うところもあるんですけど。(2023年8月14日、自宅)

事例④ Bv氏 昭和14年生 男性

(屋内)

盆棚 13日、仏壇とは別に祭壇を設置し、位牌を出して祀る。以前は5段の祭壇を用いていたが、現在はテーブルを使用している。テーブルの両脇に一對の電気式の燈籠が置かれているが、新盆とは関係なく常の盆でも設置している。16日の朝に片付ける。——三段もやっている人もある。(新しい形なんでしょう)以前は5段にしていた。今はテーブルに出すようになった。



図41 盆棚 (事例④)

(テーブルはお盆のために出している)お盆のために出して。13日に用意して、16日の朝まで。(電気式の燈籠は、新仏とは)関係なく、あげている。

供物 16日の送り盆には、供物を下げ、セナカアテや線香、ロウソク、お小遣いとしてお金を持たせる。——(最終日に仏に持たせるものは)あげたものを下げて、もたせてやる。せなかあてなどさまざま。線香とロウソク。お小遣い(お金)も。

(屋外)

墓参 13、14、15日に墓参する。以前は14日の朝に、供物を蓮の葉に包んで墓参していたが、徐々に行く人が減り、今は夕刻だけの墓参になった。

盆の火 迎え火として提灯を下げる。13、14、15日の各日に、家の入り口と墓地では「マツアカシ」を焚く。——(迎え火は)提灯を供えている。入口に松明、墓さ行っても。13、14、15日と毎日。前には14日のアサマもいってあったども、いま、いがないもの。晩だけだ。前にはちゃんとご飯だのみんな用意して行ったつたども。今はあ、そうやる人も段々に減ってなくなった。/(お供へは)さまざま用意して、まずご飯ど持ったつた。蓮さ入れて、持ったつた。いまはあ、ないがら。いまはあ、晩方いって、アゲモノもってつた、上げるだけ。(墓参は)夕方に多い。

供物/墓前飲食 かつては14日の朝、さまざまな供物を蓮の葉に包んで墓参した。(2023年8月14日、自宅)

事例④ Bw氏 昭和17年生 女性 (当地出身)

例年は朝夕の2回墓参するが、雨天のため今日は1回で済ませる予定である。風呂敷に墓参の道具と供物一式を背負って1kmほど離れた小舟渡の共同墓地まで徒歩でやってきた。「遠くて大変だ」と言っていた。97歳で逝去した母親の墓参りである。建てて30年以上になるが、自分の死後は白銀の寺院の永代供養に入る予定であり、墓じまいを考えている。

(屋内)

盆棚 仏壇の下方に、仏具屋で売っている祭壇をしつらえる。新仏のある3年間は棚をしつらえるが、それ以降は棚を置かない。祭壇は3年を過ぎると必要なくなるが壊すのもつたいないので、いどこにあげようと思ったが、石材店から、「死者に使ったものはあげることはできない」と言われて断念した。「死にもの」だからだめなんだと思う。使った棚は、使ったところで壊すと石屋から聞いた。また、水をあげる桶がなかったので、いどこが家にある桶を持ってくるといったところ、葬儀屋から、「他人のものは使ってはいけない、ダメだ」と言われた。「だから、いまは一人だし、人のものは使えないということだから、これらのものもみな、捨てなければならぬ。あげられないっていうんだもの」——(棚を作りますか)亡くなって3年くらいはやるけど、それ過ぎれば、やんなくなる。仏壇あればその下さこう、置いて。3年ぐらいいは。うってつきゃ。仏具屋の。いま何でもこれさ使ったのは他の人さけられないけど、貸されないけど、おらだちもこれ壊すにいだわしないなあどもって、いどごの人さけるがなあども思ったきやできないって。その死んだのはウヂのながでもなんでも、ものは借り貸しはできないって。(葬儀屋が、仏具を人に譲渡するのはいけないと言ったのですか)やっぱり死にものだから、ダメだんだべあ。こごで使ったらこごで壊すって。石やさんがら。石やさんもだべし、葬儀屋さんづ人があるべ、この人はオラだちがオゲがながったのこう、ミズやるのあ。だから、たきや、おらほのイドゴの人が、オラほにあるあ持つてくる、つていつたきやね、たつきやダメだつて。人ののは使われないがらダメだつて。うん。ほうやつて、言われだつた。だから、死んだどぎはまず本人もしたんだけど、今はあ一人っこだべしよ。これだつてみなはあ、捨てないばなねしよ。けられないもの。だからさあ、みんなこごでこれに使ったものは、人ののは使われないがら買つてつきや。でも我々みたのがはあ、2回、まずよ、2回以上つかわさんながつたら、おらどやるどぎはどんだんだがさわがなんないけども、んでもまあ、置くには置いだけどな。うん、死にものは、どんだりはできない。

供物 「せながあて」、ナス、キュウリを供える。

(屋外)

墓参 13日の夕方、14日の朝夕、15日の夕方に墓参する。16日は墓参しない。14日の朝に来る人はかなり早く参り、夕方にもう一度墓参する。今日は天気が悪いという予報が出ているので、1回で済ませる予定である。——13日は夕方、14日は朝と晩、今日は朝に来るんだつたんだよ。朝晩今日は来てあるぐ日なの。でもは、今日は(天気がこうだから)一回で許されるで(笑)。朝晩二回、今日はな。あどはまず夜でが、(お参りに来るのは)1回だんだけどさ。中日だんだが何なんだがわがなんね。明日は

夕方。16日は来ながべさ。終わりでない。／これからだごったいっぺ来るの。夕方の方がそうかもしれない。朝来てった人は夕方だごったよ。おらだ来ないがらいま一回でおわらせつかなあど思って。／今日は朝来て夕方来て。みんなで朝来てったべね。また夕方、マツを燃しに。

盆の火 14日の夕方に墓前でテマツを焚く。

供物 赤飯を持参して、茶碗に詰め替え、墓前に供えた。16日には供物をコモに包んで海に流したが、現在はゴミとして廃棄している。重箱に詰めて持参する人は、このあたりでは見たことがない。——まず、前は海さ流したべ。今ナガされないがら、ゴミだし。アレはあ全部こう、コモってシグのあるべ。アレ全部まるめでさ。持ってって16で終わりだべ。あれなんんだが、杖だっというもんな。何ってばいんだがな。それよぐ買った。それと、せながあてと、ナスとかキュウリとかってあげでさ。全部下ろして。(2023年8月14日、墓地)

(16)八戸市南郷(旧南郷村)島守(相畑)

島守は新井田川中流域の盆地状沖積低地、および同川支流古里川流域の山間に位置する。集落は、河川沿いや、東南方階上山地に続く丘陵地上に分布⁹⁶⁾。相畑は新井田川支流の黒川沿いに位置している。

事例の集約
【屋内】 盆棚 この集落では、仏壇とは別に特別の祭壇を設ける。以前は4段の棚を設置し、菓子などを多数供えていたが、現在は大きなテーブル1つを祭壇にしている。来客からの供物を置く(㊸)。
供物 盆中は朝昼晩の食事を供える。16日にセナカアテモチと、供えてある野菜やカド(こうほね)を、ホトケのミヤゲとしてコモに包み、コンブで縛って送る。これら店から購入している(㊸)。
【屋外】
盆の火 墓地は整然と区画整備されている。墓石と同じ石材でトータルコーディネートされた火焚き台が各墓の前に設置され、屋号が刻まれているものが多い。13日、14日、15日の3日間、夕方に墓地と自宅前で迎え火を焚く(写真)。新仏のある家ではシジュウハットウロウを3年間行う(㊸)。
飲食 かつては重箱持参で親戚などが十数名で墓地を訪れ、墓前飲食した。今は菓子をその場でつまむ程度である。動物による衛生上安全上の理由からである(㊸)。

事例㊸ Bx氏 昭和59年生 男性 (当地出身)

(屋内)

盆棚 このあたりの地域では、仏壇とは別に特別の棚をしつらえ、位牌を並べる。かつては4段の祭壇をしつらえ、お菓子などをたくさん供えていたが、現在は「省力化」のため、大きなテーブルひとつを祭壇にしている。

供物 盆中は朝昼晩の食事を供える。仏を拝みに来る人たちのお供え物を置くために大きめのテーブルを用意している。近年は拝みに来る人も減り、供物はかつてよりもかなり少なくなった。こもの上に供えている野菜やカド(こうほね)は、仏が帰るときに持って帰るお土産だという。果物や花を含め、店から買ってきて供える。16日にこれらの供物と、せなかあて餅をコモで包み、昆布のひもで縛って送る。——(Bx氏母)(特別の祭壇を用意するのは)一般的です。こちらで大抵やってますけど。(Bx氏)そうですね、棚みたいのをやって、位牌はみんな並べて。あとは盆中だけは朝昼晩ご飯出して。(普段は)仏壇の中に入れて、普段は仏壇の前に拝み台があるだけです。盆中は、お供えだったり、拝みに来る人たちがお供えものを置いていったりするので、テーブルを出しています。(こもの上に野菜がありますね)(Bx氏母)仏様が向こうに帰るときに持って帰るお土産です。こもを昆布の紐で縛って、セナカアテ餅を。16日だけ。仏様送るときだけ、使うんです。(これは何ですか)(Bx氏母)カド。植物の名前は知らないけど。通称はカド。店から買ってきてます。果物だり、花だり。(Bx氏)昔はもつとね、(Bx氏母)そうそう段作ってお菓子とか、(Bx氏)4段ぐらい。いっぱい並べたりしてたけど、今はそこまで。来る人ももうあんまりないから。そのころはもつと拝みに来るひともいっぱいいたんで。省力化で(笑)。



図42 盆棚(事例㊸)

(屋外)

盆の火 13日、14日、15日の3日間、夕方に墓所と家の門口で焚く。——(迎え火は)うちのほうだと3日間やります。131415。この地域は基本的に夕方ですね。墓と家と3日間。

新仏のある家では、シジウハットウロウを3年間行う。燭台を葬儀屋から買ったりもらったりしている。昔は自作していた家もあったと思う。——(Bx氏)葬式終わったところでは3年間やってますね。買って、葬儀屋さんからもらったりとか、昔は作ってるところもあったかもしれないんですけど、大概買ってます。

飲食

昔は重箱を持参し、親戚など十数名で墓地を訪れて、そこで食べたと聞いている。今は菓子を持参してその場で食べる程度である。理由はカラスや犬に食べられるという衛生上安全上の理由から、持って帰るようになった。——(供物を墓では)(Bx氏母)今は墓で食べることはないから、お菓子を持って行って、その場で食べて、食べきれないものは持って帰らないと、カラスとか犬にやられるから。今は持って帰ることが。昔はお重持ってって、そこで食べて、いたって聞いた。行く時十何人で行くから。いま、各家庭、何よりも置いておくと、犬とかカラスにやられるから。衛生と安全のために、やらないようにしてます。(2023年8月14日、自宅)

(17)八戸市南郷(旧南郷村)島守(不習)

島守についてはは前項参照。不習は階上山地に続く丘陵地上に位置する。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 50年以上前から、三段の祭壇を使用している。三段でないと供物を載せきれない。最終日にはコモで赤飯やカドを包み、コンブで縛る(46)。

【屋外】 **盆棚** かつては屋敷墓が多数あり、どの家にも複数の墓石があった。それを共同墓地(市民の森)に集約した。50年ほど前までは、墓石の前に棚を作っていた記憶がある(46)。

墓参 13日、14日、15日、16日に墓参し、マツアカシ(迎え火)を焚く。ひとつの家に墓石が複数あるので、すべての墓に明かりを灯すのは大変だった。墓地→門口→玄関の3ヶ所で焚く。15日が送り盆で、午前中に玄関→門口→墓地の順番で焚く。更に16日にも送り盆を行う。送り盆を2回行うのは、戦後、奥さんと子どもを一度になくした人が別れの未練から始め、それが広まったと聞く(説明されている)。マツアカシが四日間にもわたるので、木材を多量に消費する。墓地は煙だらけだった。近年は過疎化高齢化のため、墓参をやめたという人もいる。供えた菓子やセナカアテと菓子、マツアカシを包み、コンブで縛って、近くの川(古里川)に流した。現在は川に流すことが禁じられているので、流すマネをしたあと、ゴミに捨てている(46)。

初盆にシジウハットウロウを行うが、タカトウロウはやらないし、見たこともない(46)。

供物 かつては供物を持参して供えたが、現在は衛生上の理由から持ち帰りが一般的である。袋ガシ程度を持参して食べて帰る。死者と食べることに意味があると考えている。供えた菓子はその場で食べ、持ち帰らないように言われた。

事例④ By氏 昭和32年生 男性 (当地出身)

(屋内)

盆棚 昔から三段の盆棚を使用している。三段でないと、供物などを載せきれない。物心ついた頃から(50年以上前から)このような形式の盆棚だった。臨済宗の檀家である。——(三段の棚は)昔から使ってる。三段でないと乗せられない。これはウチだけかもしれない。他所のことはわからない。物心ついたところからこういう形だった。ここは宗派も違うところがあるが、この辺は臨済宗。この家も臨済宗。

供物 よく意味はわからないが「かど」を供えている。最終日にはコモで赤飯などを包み、昆布で縛る。——(この、白黒の供物(かど)はなんでしょうか)私もよく意味がわからないんだけど、これを最後にくるんで、これで最後はお赤飯をくるんで、これも、よくわかんないけど、必要なんで。／これが最終日にやる昆布(しめるやつ)。

(屋外)

盆棚 市民の森の共同墓地が整備されたのは平成に入ってからで、それ以前は土葬と火葬が半々だった。家のまわりに墓(屋敷墓)があったが、それを共同墓地に集めたが、墓石を集約したわけではないので、墓石の数は十数基にもものぼった。どの家もみな、墓石は1つではなかった。小学生の頃、つまり50年以上前には墓前に棚を作っていた記憶がある。——(昔はどうでしたか)ちっちゃいときは、そったのやってた気がする。お墓が今あそこ(市民の森)にあるけど、ああいう形にしたのは平成になってから。その前までは一応、この辺は土葬だった。火葬やってた人もあるし土葬も、まあ半々ぐらい。やっぱり、いろいろね、法律的なことがあるからね。火葬にしなければダメダメって、ああいう区画整理して。その前はね、うちらなんか墓石が20はなかったけど、十なんぼとか。それ一つ一つ燃やすわけだから、すげえて一へんだった。(個人ごとの墓石だったんですね)そうだったんだべな。昔はなんか、家のまわりに墓を作ったっていう話だった。昔はね。ただしやっぱりそれじゃあってうんで、あすこ

に一ヶ所に集めたんだけど、やっぱり一つに一つみたいな。墓石。うちばかりじゃないんです。他所のほうもやっぱり墓石は一つじゃなかった。(現在のよう墓になる前は、棚を作りませんでしたか)棚作ったり、皿みたいのを持ってったり。そうやってた覚えはある。小さいとき。何かうっすら記憶ある。小学校、……50年以上前になる。

墓参 13日、14日、15日に墓参する。

盆の火 墓参の折には毎日迎え火を焚く。「市民の森」の共同墓地にある墓前でマツアカシを燃やし、家の門口と玄関の計3カ所で燃やす。迎え火なので1回で良いのではないかと思うが、この地域ではなぜか毎日燃やす。また、15日が送る日だと考えているが、16日も更に送る。送り火は、午前中に玄関、門口、墓地の順で焚いていく。「この火を頼って帰ってください」という気持ち



図43 盆棚(事例④)

である。墓地が区画整理される以前は、家の墓石が十数基あり、ひとつひとつに灯りをともすのがとても大変だった。16日に焚くようになったのは、この集落で奥さんと子どもを一度になくした方が、気持ちが収まらずに16日も焚いていたのに周りも影響され、この地域ではそれがしきたりとなったと父から聞いたことがある。昭和になってからの話だ。4日間も焚くのだから、薪の量はとてつもない量にもほり、墓参が盛んだった頃は墓地には煙が充満し、すすだらけになって帰ってきた記憶がある。ただ近年は過疎化と高齢化で盆行事も簡素化が進み、墓参をやめたという人もいると聞く。——(迎え火は)お墓(市民の森)に行って、松明(マツアカシ)、マツのあれを燃やして、帰ってきたら、家の(勝手口でなく正式な)玄関と、道路から入る門のところで(3ヶ所)燃やして。迷うことはないでしょうけど。(火をたくのはいつ)13日が迎え火で、15が送り日か。ただし、ここの地区だけは、16日もやるんですよ。なぜか。ここの地区だけ。南郷でも他のほうはみんなだいたい15日で送って終わりなんだけど、16日も送りみたいのやってる。(何時ころですか)迎え火つつうのはだいたい午前中っていうかお昼まで。中間の14・15もお墓に行く。で、送るときはだいたい、午前中、送るときは(逆に)こっち(玄関)から焚いて行くんだ。逆に。これを頼って帰って下さい、という。この辺の人が奥さんも子どもも一遍になくした人がいて、どうしてもその気持ちの収まりがつかなくて、その人ひとりが16日もやったのをまねて、そういう風になったっていうのを、おやじから聞いた。じゃあ16日もやるがって。ここの地区の人達がまねて、それがずっと続いてるらしい。昭和になってからの話ですよ。(13・14・15日が墓参りですよ)迎え火だから一回やれば良いようなもんだけど、なぜか毎日。／昔は本当に(薪を)山のように作ったよ。燃やすやつ。この辺は4日間だったからさ、とんでもない(量)使った。だから最盛期っていうかさ、みんなで行ったときはもう煙がすごくて行けばすすだらけになって帰ってきた(笑)。そんな記憶がある。今本当に(あらゆることが)簡素化されて。この辺も過疎化、高齢化、どうしても無理がきかない。だからもう行くのやめたとか、なんかそういうふうになっている。

「初盆」(はつぼん)に、シジュウハットウロウを行うが、タカトウロウはこの地域で見たことがない。——(新しい仏がいるときに高い灯籠を吊すのは)やってない。小さいロウソクを立てて火を付ける風習はある。やってると思うな。初盆(はつぼん)という言い方をする。それはやるみたいだ。高い灯籠は見たことがない。

供物 昔は供物を持参して供えたが、カラスが散らかすなどの衛生上の理由から現在では殆ど持ち帰ようになった。墓地までどのような容器によって供物を運搬したのかは記憶がない。

飲食 現在は、袋菓子のようなものを持参し、供えたものはその場で食べて帰る。死者と一緒に食べるという意味があるのではないかと思う。墓に供えた菓子は持ち帰らないと言われていた。

ホトケ送り 最終日は木の根のようなもの(マツアカシか)とお菓子、セナカアテをコモで包み、昆布で縛って、お昼ごろに近くの古里川に流した。流す時間は家によりさまざまだった。今は川の汚染防止という理由で禁止されているため、川に流すまねをし、ゴミに捨てている。セナカアテは昔は手作りしたようだが、現在は買っている。——(供物の持参は)いまほとんど要するに衛生面もあるから、カラスががさ、つついて歩いてるので。昔は持っていったみたいだけど、今は袋ガシみたいなもの。ただし、あげて拝んだら、あげた分はその場で食べて持って、お墓のお菓子は持って帰るな、と言われてた。その場で食べて帰ってくる。(その場で食べるのは)一緒に食べるという意味もあるのかな。ただしもうこっち(家)来てるけど(笑)。／最終日はコモに、木の根っ子みたいのとお菓子を入れて、川にながした。下のほうにある松…古里(ふるさと)川。今は川を汚すというのでそれも禁止さ。真似はしてる。真似はして、あとゴミにする。昆布で結んで、最後にあの、包む背中あってっていうのかな、麦粉かなんかで細い紐にして、昔は作ったみたいだけど、そういうの買って来て。(何時ころですか)俺が持ってったのはお昼ごろ。でもまちまちだよ。時間的なことは。／(供物を重箱で持参しましたか)あまり記憶がない。(バック入りの弁当は持参している人は)ない。(2023年8月14日、自宅)

(18)八戸市南郷(旧南郷村)島守(前田)「世増団地」

世増団地は世増ダム建設にともない、同集落から集団移転した人々の移転先。世増集落は島守盆地の南端から新井田川沿いに2kmほど南の山間部に位置していた。畑内はそれから更に2kmほど南に位置していた(97)。両集落ともに、ダム建設により沈んだ世増と畑内(はたない)集落(南部町)から集団移転した人々は、現在、世増団地(島守前田)と東台の集落に分かれて暮らす。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 盆中は仏壇の扉を閉めて、仏壇のある部屋とは別の部屋に(48)三段の祭壇(既製品)を設え、位牌を仏壇から出して祭壇に並べる(47)(48)。盆棚は部屋の中央ではなく、窓よりに設置する。訪問の支障がないようにするためである(48)。

【供物】 日に三度手作りの膳(5品)を並べる。膳を作るヒマがないときは、折詰形式の供物を購入して供える(48)。コモの上に、スイカなどの旬の野菜や果実と、コンブを供える。

【ホトケ送り】 かつては、送る際にコモで供物をまるめ、コンブで縛り、川に流した(48)川に流す際には振り返ってはいけなると言われた(48)。現在は袋に入れてゴミに出す(48)。現在も川に流すという人もみられる(48)。

【屋外】 **墓参** 同じ集落でも、青森県域出身者は13日、14日、15日の3日間、軽米出身者は14日、15日、16日の3日間墓参する(47)(48)。新仏のある家では、墓地に位牌を持参して拝む(47)。

【盆の火】 墓参の都度迎え火を焚く。タカトウロウは行わず、シジウハットウロウを行う(47)(48)。出身地の軽米では、やっているところもある(47)。

【飲食】 墓参で供えた供物は墓前で食べ、持ち帰らなかった(47)。現在はカラスの害を考えて供物を少なくしている(47)。

(その他) 盆の知識はかつては親から教わったものだが、近年は葬儀屋から知識を得ている(48)。



図44 墓参り(事例④)

事例④ Bz氏(夫妻) 昭和23年生 男性 (軽米出身)

(屋内)

【盆棚】 3段の盆棚を作り、仏壇の位牌はすべて下ろし、3段になった盆棚(既製品)に安置する。——3段の棚を作って、普段の仏壇の棚からは位牌も全部おろして、別の売っている棚があるべ、ああいうのさ。新仏があるからといって普段とは変わらない。

(屋外)

【墓参】 自分たちの出身地である軽米では14、15、16日の3日間墓参しているの、それを踏襲している。ただ、ここ(世増)では、13日から墓参しているようだ。13日から墓参するのは面倒なので、上記3日間にして。一方、13日から墓参する青森県域の人達は、16日にはお参りに来ない。家の仏壇から仏を送るようだ。今年の5月に母が亡くなり、新仏(あらぼとけ)なので位牌を持参して墓参している。古い仏様の場合は持ってくることはない。——(13日からお参りしますか)(旦那さん)いやごごはね、オラはムガシあの軽米だったが14日からやってたけど、この辺の土地の人は13日ならやったりして。オラんでもムガシがらのあれで14日ならやって、今ごろはちょうど忙しいべ。13日ならば面倒くさいがら14日なら今まで通りど思っ。13日なら来る人(青森県域の人)は、16日にはハア来ないな。うちのほうの仏壇から贈り物送るって感じで。

【盆の火】 14日、15日、16日の3日間お参りし、その都度火を焚く。シジウハットウロウやタカトウロウは、自分たちは、やったことがない。私たちは、軽米からこの世増団地に入った者だが、やったことがない。ただ、軽米でもやっているところがある。新仏があるからといって、特別にすることはない。

【供物】 昔は墓参に来て供物を少し食べ、持ち帰ることはなかった。今はカラスに取られるので、供え物は少しだけにして。——(ご主人)ちょっとあげておけば、カラスにやられるので、ちょっとだけしかやんない。(奥さん)(昔は)亡くなれば亡くなった年におがみに来てあげれば、それをいくらか食って、うちまでは持っていがれないので。(旦那さん)お盆にはハアあまりあげないで、すぐカラス来てやられるから。あまりあげても散らかってあれだから。(2023年8月14日、墓地)

事例⑤ Ca氏 昭和31年生 男性

ダムの建設で湖底に沈んだ水吉(みずよし)集落から35年前に現地へ移転した。

(屋内)

【盆棚】 家の間取りは、移転前の家屋と同様の間取りにして建てた。盆中は仏壇の扉を閉め、盆棚は仏壇のある部屋とは別の

部屋に設える。盆棚は部屋の片隅に設置し、中央に据えない。中央に作ると部屋が狭くなり、訪れる客の支障になるからである。——(こちらに越してきて何年ですか。)35年。(1年のしきたりは)昔のまま。でも変わってきて。(供物の棚)ここにいつも置いて、お盆はほら。仏壇から下げるからさ。(盆棚を座敷の片隅に移すのはなぜ)とくに意味はない。外から入りやすいということでもない。大きいところにドンと置くからさ。御客様が来るから。そのときのあれで、せまいところだとあれだからさ。たいて昔から同じごでもこっちのほうさ置くごった。(四つ間取りで、奥の間の「ザシキ」に盆棚を設置しているということでもいいでしょうか)うん。一応。／たいてい、部屋はこうって、昔から。以前住んでいた家も、こういう間取りになった。この棚を真ん中に置くごもある。仏壇を閉めて、仏壇のマエに。



図45 盆棚(事例54)

供物 1日3度、手作りのお膳(5品)を供える。忙しいとき

には、出来合の法界折詰弁当を買って供える。コモの上にはスイカ、昆布などを供える。供物はいま採れるもの、手元にあるものを供えている。コンブは、コモをまるめて縛るためのもので、昔であれば川に流し、投げたら後ろを振り向いてはいけないと言われていた。現在は袋に詰めてゴミの集積場に出している。——(コモの上に昆布を置いていますか)あれは最後にさ、あれにまるって、少し持たせて置くってやるづ、だがらムガシは、今はもうちゃんとはあ袋に入れてゴミさ持ってってもらって、ムガシは川があればその川に流して、でバツと投げて、うしろ振り向くなって。投げたら。昔はそういう風にやって。今も、私はそういうふうやってるんだけど。(西瓜は)特別誰かのためというわけではなく、あるもの、採れたものを持ってきてあげている。(法界折は)忙しいときに買って来たものをあげている。忙しければ、1日3回、作ったものをあげている。膳に(品数が)5つくらいあるので、それを手作りしている。(弁当を)墓に持参することはない。別のものを持っていく。

(屋外)

墓参 この集落では、13日、14日、15日の3日間、または14日、15日、16日の3日間墓参する人たちの2つのパターンがある。前者は世増集落、後者は軽米出身の人達である。——13日から墓参をする。15日まで。ここは、14から15までと、14から16までと別れている。(なぜ)ダムで上がってきた人と、もともとの人と。(もともとここに住んでいた人もいる?)うん。少しいる。(世増団地というのは、もともと住んでいたところにできたということ)うんでも一応は開発起こしてるから。(世増では墓参が)13から15日。(軽米は)14日から16日。こっちは上がってくる前は、水吉(みずよし)っていう岩手県軽米郡になる。うちらは。こっちは軽米のほうと、畑内(はたない)っていう青森県分。半分半分。

盆の火 まつっているのは23~24回忌となる古いホトケである。新仏のある家では、タカウロウは行わないがシジューハットウは行方。昔は親から教わったが、近年は葬儀屋から知識を得ている。——(新仏は)もう23~24回忌だから、ほとんど古いやつ。(タカウロウは)ないない。(シジューハットウは)やる。やるところとやらないところがあるが、葬儀屋さんでほしい。若い人はほしいもうわがながべ。だがら葬儀屋さんでほしい、こういうのもやりますって。うちらは親からちゃんと、じいさんばあさんから教わってやってたがら。(2023年8月14日、自宅)

(19)八戸市南郷区(旧南郷村)市野沢

新井田川支流頃巻川上流域の台地上に位置する98)。

事例の集約

供物 供物は果物と菓子が中心であり、弁当形式の折を持参することは、周囲の者を含めてない(49)。八戸市南郷のスーパーでも、弁当形式の供物(法界折)は3パックしかなく、「お供え膳」の名称で販売されており、正方形の区画が9つに分けられ、中央にゴールデンキウイが入るハイカラな折詰であった。他に、百合根100円、セナカアテ118円である。八戸市中心部のスーパーでも「法界折」という名称ではなく「赤飯・天ぶら御膳」「お供えセット」の名で墓前に供える弁当形式の供物が販売されている。

事例49 Cb商店 50代 女性

(屋外)

供物 墓参のときに折詰や飯を持参することはない。まわりの人もしていない。供物は果物とお菓子が中心である。Cb氏が買い物中のスーパーでも、販売中の墓参用の折詰は3個だけだった。このスーパーでは、百合根が100円、セナカアテが118円で販売されていた。

(20)三戸郡三戸町目時(上目時)

馬淵川の左岸段丘上に位置する。南は岩手県二戸市に接する99。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 新仏のある年には仏壇とは別に三段の祭壇(⑤④)を設けた(⑤)。盆棚は、リンゴ箱に金襴の布を掛けたものだった(⑤)が、葬儀を機に葬儀屋から三段の盆棚を購入して用いるようになった(⑤)。リフォームで仏壇を仏間から居間に移動したのに伴い、盆棚も居間に設置している(⑤)＝盆棚と仏壇はセットであるという意識があることに加え、いつも見えるところ(日常的な生活空間)に置きたいからだという。盆棚は設置しないという人もいる(⑤⑥)。

祭壇最上部に練り出し式の位牌を2つ、中央に本尊を置き、遺影を飾る。2段目と3段目には、菓子、果物、膳を供える。

【供物】 家族の食事と同じもの(例えば、白飯、味噌汁、煮しめ、漬物、野菜の煮浸し、酢の物)を供える(⑤)。茄子と胡瓜の牛馬(⑤)を供える(写真)。野菜や果物は、盆の供物用に、時期にあわせて自家で栽培したものを供えている(⑤)。無縁や餓鬼などへの施し意識することはない(⑤)。

【屋外】 **墓参** 14日、15日の2日間、多くは夕方に墓参する(⑤)。16日は墓地に行き、後片付けをする(⑤)。

【盆の火】 14日、15日の2日間、墓地(墓石の石段の前)(⑤③④)、家の門口(⑤③④)と、玄関前(⑤③)、家の奥に祀る山の神(⑤)で「テマツ」「マツアカシ」(迎え火)を燃やす。13日、16日は焚かない(⑤)。13日夕(⑤)と、16日にも焚く家がある(⑤③④)。三戸の町方では13日から盆だが、目時では14日15日が盆であると認識されている(⑤)。

亡くなって1年目あるいは3年目の盆まで、シジウハットウロウを行う(⑤)。燭台は葬儀店から購入した(⑤)。

【盆棚】 子どもの頃から(⑤)墓前に棚は見当たらなかった(⑤④)。供物は皿がわりにした南部煎餅にのせて直置きした(⑤)。

目時では昔から墓前に赤飯その他の料理を持参することはなく、菓子や缶ジュースを供えた(⑤④)。墓石と同じ数の南部せんべいを皿がわりにし、菓子や果物をのせてそれぞれの墓石の前に供えた(⑤)。それらは、地面に直置きした(⑤)。昔は(昭和40年代頃)、多くの家で同様をしていた(⑤)。10～20年ほど前までは菓子などの供物を供えたまま帰宅したが(⑤④)、動物やカラスの害を避けるために近年は持ち帰るか(⑤)、その場で食べて帰るようになった(⑤)。

(その他)三戸では一般的に13日から盆の入りだと認識されているが、目時集落では14日と15日がお盆である、という。

事例⑤ Cc氏 昭和40年生 女性 (当地出身)

(屋内)

【盆棚】 新仏のあった年には棚を設え、供物をあげていたが、現在は棚を作っていない。

【供物】 キュウリとナスの牛馬を供える程度である。——亡くなった年は棚を作ってやってみましたけど、10年以上経ってるから、もうやってない。亡くなってすぐの年なんかは、おばあさんたちが作ってっていうか、やってお供えとかあげたりしてみましたけど。1年かもしくは3年くらい。その家によるかもしれないけど。／ただ普通にお供えを置いているだけで。お盆で変わってるってば、胡瓜と茄子で牛と馬を作るくらいですね。

(屋外)

【墓参】 14、15日の夕方に墓参する人が多い。午前中に墓参する人もいる。墓参はこの2日間のみである。

【盆の火】 門口と、家の奥に祀る山の神の2箇所ではテマツを燃やす。墓地では、墓石の石段の前でテマツを燃やす。14日、15日の夕方に焚き(午後に墓参する人が多いが、午前中に墓参する人もいる)、13日、16日は焚かない。16日にも焚くという家もあると聞いている。三戸町の町方では13日から盆だが、目時では14日と15日が盆であると認識されている。——あと送り火だか迎え火って言って、その入口のところに松を燃やしますね。／テマツ。そこにお墓参りして帰ってきて夕方、入口と、うちで山のほうに神様があるって、家の奥と2ヶ所。それは毎年お盆に、14・15日の夕方に。13と16は特に焚かない。16日もやる人はいるって聞いたこともあります。三戸町は13日からがお盆なんですけど、この目時の部落は、14・15がお盆なんです。三戸町のほうは13日から始まるんです。／お墓では線香と蠟燭以外にも、石段の手前のところに、テマツを持ってって燃やすのはもうずっと昔からやってます。お墓はたいいていの人は午後いくけど、午前中も行くし、お参りしたときに燃やします。

タカトウロウは立てないが、亡くなって1年目もしくは3年目の盆までは、葬儀店で購入した燭台に48本の蠟燭を立てる(シジウハットウロウ)。——高い灯籠を立てるなどはやっていない。／ただ、死んだ年はお盆に、葬式に売ってるお店で、木のろうそく、シジウハットウって、あれを立てるのはやりますよね。亡くなったときの次のお盆、1年か、3回までだったかな。／うちは亡くなったトシではないから、特にやってないんです。

【供物】 元来、この集落では飯や惣菜などを持って墓参することなく、菓子や果物、ジュースを持参した。10～20年ほど前までは、供物を墓前に供えたまま帰宅したが、近年はカラスの害を避けるために持ち帰るようにしている。——お供えは、やってもカラスが汚しちゃうから。でも、もともとこの部落はそこまでは(赤飯や煮しめなどのお供え物)お供えしない。果物持ってたたり、お菓子とかは基本カラスがいたずらするから、その場で食べたり、持ち帰ったりするようにしてます。10年20年前まではお供えをそのまま置いていたんですけど、お菓子とか、あんまりご飯はね。ご飯を持っていくのは死んだ年とか死んだ時だけ。普通の人はただのお菓子とジュースぐらいです。(2023年8月15日、自宅)

事例⑤① Cd氏 女性

盆棚 屋内に、三段の棚を設えている。墓前の棚は作らない。

事例⑤② Ce氏 女性

盆棚 盆棚を設置しない。

迎え火 戸口でテマツを燃やす。

事例⑤③ Cf氏 20代 男性

盆棚 盆棚を設置しない。

盆の火 門口、玄関前、お墓で14・15・16日の三日間、火を焚く。(以上51-53 2023年8月14日、各自宅)

事例⑤④ Cg氏 昭和35年生 女性 (当地出身)

(屋内)

盆棚 元来、仏壇の近くにリンゴ箱に金襴の布を掛けた盆棚を設置していた。しかし、16年ほど前に父が亡くなってから、仏壇を仏間から居間へと移動したのと同時に、葬儀屋から購入した三段の盆棚を居間に設置するようになった。仏壇を居間に移動したのは、居間をリフォームしたこと、いつも見えるところに置いておきたいからである。また、無縁や餓鬼などを意識したことはない。——三段飾り大きいので、仏間には私も、昔はここに仏間があったんですけど、いま自分たちがいるところに仏壇を置くことにしたんで、置けないので、ここに置いてました。／もともとは仏壇の近くに(棚を)置いてあったんですけど、仏間、いつも見えるところに仏壇置いたほうが、いつも拝めるよね、って、居間に仏壇を置いたので、もうそこにお盆のときに飾れないので、それで今はここに飾ってます。／いつも見えるところに仏さん、朝に拝めるからって、自分たちの見えるところで、テレビとかも一緒に仏さまを見るような形で、仏間をそこに、仏壇をそこに置くようにしました。／父親が死んでからだったので、17回忌だから、15～6年くらい前からです。／母親がまだそのとき元気だったので、その時に居間とかをリフォームしたので、そのときにやりました。(三段の棚は葬儀のときの)そうです。お葬式からです。その前は、父親が母親が生きてた頃は、昔リンゴ箱で作ってたんですよ。父親とか亡くなってから葬儀屋さんから買って、やりました。／リンゴ箱に打ち敷を掛けてやりました。昔は。／(無縁とか餓鬼は)わかりません。(棚の向きや位置については)それは別に気にしたことないです。親からも言われた記憶はないですね。／間取りの都合でこの場所に置いているだけです。



図46 盆棚(事例54)

供物 自分たちの食事と同じものを供えるとよいと和尚から言われたので、そのようにしている。今日供えているのは、白飯、オクラの味噌汁、キュウリの漬物、ナスとピーマンの煮浸し、ゴーヤの酢の物である。いつもは煮しめを供えているが、今年は暑かったので作らなかった。料理に用いている野菜や桃、西瓜、メロン、梨などの果物は、すべて自分の家で採れたものである。盆にあわせて、これらの果物を植えて育てている。——いいの上げてないから恥ずかしいです。ただ、自分たちが食べてるのあげればいって、和尚さんが言ったから。本当は煮しめとか、今年暑かったから、私煮なかったんですよ。いつもだと煮しめ煮てあったんだけど。白いご飯、おくらの味噌汁、キュウリの漬物、右上は茄子とピーマンの煮浸し、ゴーヤの酢の物。

全部自宅で採れた野菜を使用している。果物も全部自家製。もも、すべて。すいか、メロン、梨も。全部家のものでやりました。お盆にあわせて果物植えてます。／このあたりはりんご農家多いので、だからりんごと一緒に桃とかも、やっぱりお盆にあわせて同じ薬かけて。／明日これに、持って、送ります。これを持って、お墓に行きます。(百合の根は)それはわかりません。

(屋外)

盆棚 子どもの頃から墓地の盆棚はなかった。墓石の数と同数の南部せんべいを皿がわりにして菓子や果物などをのせ、地面に直置きして供えた。——(墓に棚を据えるのは)亡くなった葬式のときだけ。お盆とかはやらないです。子どもの頃から。／子どもの頃は供物台の墓はないですね。ただ墓石だけだったときも結構ありましたね。(供物台がないと、どうするんですか)地面に置いたと思います。ただこう、せんべいの上にお菓子を上げるみたいな感じです。それがお皿がわりでした。南部せんべいがお皿がわりにして、上げてきましたね、昔は。けっこうみんなでそうしてました。地面につく感じで。墓石の数にあわせて、その数の煎餅を置いて。いま墓石は一つにまとめてますけど、昔は一人ずつの墓石でしたよね。だったので。お菓子とか果物を置いたって感じです。

墓参 14日、15日に墓参する。16日は送り盆で墓地に行って後片付けをする。——14・15日に墓参します。13日は行かないで。16日の送り盆で、またお墓に行って後片付けて送ります。

盆の火 13日の夕方、14・15日の夜、16日に「マツアカシ」をする。墓で火を焚き、その後家の門口で焚く。――松明かしします。迎え火って13日の夕方と、14・15とやる人は夜やって、16日は送り盆で松明かしする人も。／お墓で松明かして、そのあとここ(家の門口)で、ここはウチですよって、分かっているとは思けど、そういう風習みたいな感じで。

供物 墓石の数と同数の南部せんべいを皿がわりにして菓子や果物などをのせ、地面に直置きして供えた。赤飯や料理を持参して供えることは、昔からなかった。子どもの頃(昭和30～40年代)には菓子や果物を供えたまま帰宅したが、動物やカラスのいたずらが問題になってから、食べて帰るようになった。――(折に赤飯や煮しめ入れて持参するようなことは)それはやりません。置いてかないでくださいってことなので、もうだから、お菓子とか何かちよつと持ってって、そこで少し食べて帰ってくる。(そうなる以前は)お供物を持って行って、置いてきましたけど、お赤飯とかそういうのじゃなくて、お菓子とか、果物とかって。(料理は)それは持ってってないです。置かないですね。お菓子とかそういう果物系です。食べて、帰ってくる。(そこで食べるこの意味は)昔は置いてきたりしてあったけど、置いてあったんですけど、あの、今その、動物とかカラスがいたずらするがらって、それがら食べるようになって、その前までは、私が子どものころは、置いてました。で蟻が、次の日行くと、蟻んこがすごくて、もう、そごいらへんが汚い状態っていうが、散らかってる状態。

飲食 動物やカラスのいたずらが問題になってから、食べて帰るようになった。(2023年8月15日、自宅)

(21)新郷村戸来扇ノ沢(家ノ下・北向)

戸来は奥羽山脈の東に連なる丘陵台地に位置する。五戸川の最上流部にあたり、南部を五戸川、中央を同支流の三川目川が北東流する100。新郷村では、現在もタカトウロウを行う集落が複数ある。そのうちの一つ、扇の沢集落は5世帯、三川目川沿いの山間にある。

事例の集約

【屋内】 **盆棚** 新仏のある家では3年間、仏壇とは別の部屋(55)または、仏壇の隣(58)に設置する。祭壇を部屋の中央に据える(55)場合もあれば、部屋の窓よりに据える場合もある(58)。仏壇の本尊は移さず、扉は閉めない(58)。祭壇は広い部屋に設置するのがよいと考えている(55)。5段の祭壇を供える家がある一方(56)(58)、かつては5段だったが、葬儀を機に控えめの3段にしたという家もみられる(55)。それらの棚は、手作りである(55)(58)。

祭壇は葬儀と関係しており、かつての葬儀は葬儀屋が主導するものではなく、各家が主体となっていたことから、5段の祭壇が必要だった。しかし現在は葬儀を式場で行うようになり、5段の大きな棚は不要になった(55)ことから、葬儀屋で使用する3段のものが主流になりつつあり(56)、葬儀屋の3段の棚を真似て、手作りしたというケースもある(55)。葬儀をきっかけに、祭壇を3段に変えたという(55)。新仏のある3年間は祭壇が必要だが、その後は特別な盆棚は必要ないとされる(55)。

三段の棚の最上段には繰り出し式の位牌を中央に据え、2段目に個人(新仏)の遺影、2段目と3段目に菓子や果物、膳を供える。床の上に贈答品を開封状態で据える(55)。

供物 五段の棚の最上段に個人の遺影、二段目に位牌、3～5段目に果物や野菜、菓子などの供物を置く(58)。また、訪問客による供物は、祭壇の下段や祭壇のまわりに開封した状態で展示する(58)。

【屋外】 **墓参** 扇ノ沢集落では、14日、15日の2日間墓参するのが通例である。新仏のある家のみ、13日にも墓参する(55)(56)。15:00頃には続々と墓地に家族が訪れている(実地)。長泉寺のある金ヶ沢(役場のある地域)では、13、14、15日の3日間墓参する(55)(56)。

盆の火 墓参の前に家の門口で「テマツ」(迎え火)を焚き、墓前でふたたび焚く(55)。



図47 墓地での迎え火(扇ノ沢の墓地)

新仏のある3年間は、墓地で「シジュウハットウロウ」を行う(55)(57)。当地では、「シジュウハットウ」ではなく、「シジュウハットウロウ」と言っている(55)。2023年は3件の家でこれを行っていた(実地)。シジュウハットウロウの燭台は手作りで、台木部分をアルミ箔やトタンで覆うのは、焦げ付きや汚れ防止のためである(55)。1～2年目は持ち帰ったが、今年は3年目なので、墓に置いたままにしているという(55)。テマツにガスバーナーで着火し、その火をシジュウハットウロウのろうそくに移す(56)。雨天の際には傘を差しながらの作業であり、風の強いときは付けたそばから消えるので、大変である(55)。7年前に家人が亡くなった際、雨天だったので家の前で焚いても良いか和尚に尋ねたところ、墓で焚くように言われた(55)。しかし、雨天の場合には家で焚くという人も現

れてきている(57)。

新仏のある3年間は、「タカウロウ」を行う(55)。扇の沢集落では、多くの家で現在も行っている(58)。仏様が3年間迷わずに来てほしいという願いを込めて(58)、13日、14日、15日の3日間、点灯し、16日は灯さず撤去する(55)(58)。前日の12日に、親戚の協力を得て立てている(58)。

タカウロウに用いる杉の木は、盆前の早い時期に(55)、亡くなった時点で(58)、山から細く長い適当なものを選んで伐採し、よく乾燥させておく(55)(58)。1年目よりも3年目は、よく乾燥しているので軽い(55)。また、父が亡くなったときに使用した杉の木を、母が亡くなった時に再利用するというケースもある(58)。

先端の十字の杉の枝葉は、毎年新しいものを近所から採集して用意する(55)(58)。家の建物と並行になるように＝やってくるホトケに対して十字が正面になるように取り付ける(58)。タカウロウの準備は労力が要るので、次回からは提灯で代用しようと考えている(55)。実際、手伝いの労力が得られないという理由から提灯で代用している家がある(58)(59)。提灯の場合、玄関先に支柱を立てて吊す。下部に電気のスイッチがある(59)。また、重くて扱いが大変な杉の木の代用として、近年は竹を用いる家があるという(寺院からの情報)。

盆棚 墓前に木の棚を組んだり、小さな台を持参したりして、供物をあげた(昭和18年生、57)。一方、墓前の棚を見た記憶がないという人もいる(昭和16年生、56)。土葬の時代にも、地面にコモを敷いた上に、センバイを皿代わりにして供物を供えたという(昭和16年生、56)。

供物 13日または14日に、弁当形式の供物(赤飯、煮しめなど)を墓前に供える(55)(56)。蓮の葉にパック入りの赤飯を供える家もある(55)。現在では墓前飲食を慎み、さみしい気がするが、菓子を残してすべて持ち帰っている(55)。そのような事情から、墓前の供物は近年簡素化が進んでいる(55)。他地域のように、弁当形式の供物を持参する人は少ない(57)。今後は墓参自体しなくなるのではないかと感じている(55)。

飲食 かつては、折詰を墓前で食べて帰った(56)。

ホトケ送り 16日は、ソウメンを供え、朝早く送る。以前はコモに包んだ供物を川に流したが、現在は16日に長泉寺に参詣の折、納めている(55)。

事例55 Ch氏 昭和29年生 男性 (その母と夫人) (屋内)

盆棚 盆棚は、初盆から3年間、仏壇とは別の部屋に設置する(今年が3年目である)。特に意味はなく、昔からそうしている。広い場所に据えるのがいいと考えている。昔は5段の棚を据えたが、現在は控えめである。棚は16日以降に撤去する。屋内の盆棚は、以前は5段の盆棚を使用していた。かつての葬式は葬儀屋が仕切るものではなく、家で行っていたため、5段の棚が必要だったが、現在は葬儀を式場で行うようになり、5段のような大きな棚が不要になった。Ch家でも、新仏が出たのをきっかけに、盆には3段の棚を用いるようになった。葬儀屋の3段の棚をまね、ちょうつがいを付けた折りたたみ式の棚をChさんの息子が手作りした。このあたりではみな、床の間にあわせて手作りをしていると思う。Ch氏の母によると、初盆の3年間は特別な棚を使わなければならないが、それ以降は特別な棚を作らなくてもよいのだという。――棚は亡くなって3年間だけ。昔は五段とかだったんですけど、今はこじんまりとなって。/(今年で)三年目。/(仏壇のある部屋とは別の部屋に置いているのは)(Ch氏)特に意味はないんだけどね。場所的に広いところに置いたほうがいいじゃないの。(Ch氏夫人)ずっとこっち。昔から。/13日に棚を作って、16日を過ぎてから取り払う。/コモを結ぶための昆布も一緒に供えている。(昔は5段だったのですか。その棚は先祖代々伝わってきた棚ですか。)(Ch氏)きつとそうでしょう。前は5段あったんだけど、腐ってあれだったからね。なげちゃったの。(新仏が出たのをきっかけに、この3段の棚を息子さんが見よう見まねで作ったという。ちょうつがいもついて、折りたたみ式になっている。葬儀屋さんが持ってきた3段のものを息子さんがみて、作った。)この辺の人はみんな手作りじゃないかな。この床の間にあわせて作るからさ。(来年からはどうするのですか。)(Ch氏)来年からは、飾りはないもんね。(来年からは仏壇でお祭りするという)((Ch氏義母)うん。今年ではあ、棚やなくてもいいんだ。三年。こつて(棚を)かぐの。まずやってもいいたって、やねばやなふてもいいの。/(Ch氏)葬儀自体が葬儀屋来てどうのこうのということではなかったから、葬儀も5段の飾りでやっていた。その流れで、お盆も同じようにやっていた。(昔も5段の棚を使用するのは3年間だけでしたか)(Ch氏)そうでしょうね。家それぞれあるでしょうけど、うちの場合は初盆(はつぽん)から3年。(特別な棚なんですね)(Ch氏)特別ですね。その家によっては、毎年毎年豪華に飾るかもしれないけどね。/(Ch氏夫



図48 盆棚(事例55)

図48 盆棚(事例55)

人)前は(葬式を)ウチでやったでしょ。だから5段とか大きいのがあったの。でもいま式場でやるでしょ。だからあまりそういうのなくなったの。うちは三段を葬儀屋から借りだったの。だからそれくらいでちょうどいいの。

(屋外)

墓参 Ch氏宅では、新仏があるので13日を含めて14日、15日に墓参するが、この集落では14日、15日の2日間だけ墓参するのが通例である。長泉寺のある〇〇集落などは、13日、14日、15日の3日間墓参する。15日の15時ころに墓地へ向かうと、続々と参拝に来る家族連れがみられた。——今あたしたちは、(亡くなってから)早いから、亡くなって新しいホトケ様だからね、13、14、15、あたしたちは行くんですけど、ここはね、この部落は、14、15なの。お寺(長泉寺)があるほうがあるでしょ。あつちは13、14、15。あつちはね。八戸も13、14、15だけど、ここの部落は、14、15。13行く人もあるんだけど、あたしたちは新しいから13も行くけど。

盆の火 迎え火は、墓参する前に家の門口で焚き、墓前で再び焚く。——(Ch氏)墓に行く前にそこでもして。墓の前でも燃やして。

新仏のある3年間、シジュウハットウロウを行う(図50)。この集落では、シジュウハットウではなく、シジュウハットウロウといっている(101)。扇ノ沢集落の墓地では、シジュウハットウロウを行っている家があわせて3軒みられた。シジュウハットウロウの燭台は、Ch氏の手製である。燭台の部分は焦げないようにアルミで覆っている。他家では、トタンで覆っているものもある。Ch氏は、シジュウハットウロウの燭台も徐々に進化しているという。屋外に放置するのはもったいないので墓地で灯したのちに家に持ち帰ったが、今年は3年目なので墓前に置いたままにしている。テマツにはガスバーナーで着火し、その火でシジュウハットウロウの



図49 タカトウロウ(事例55)

ろうそく1本1本に点灯する。雨が降っているときは火をつけたそばから消えるので大変である。昨日は傘を差しながら48燈籠を行った。風があるので、消えるものもありいちごっこである。以前、7年程前に祖父が亡くなったとき、雨だったので墓地ではなく家の前で焚いてもよいか、和尚に尋ねたところ、墓で焚くように言われた。——(Ch氏夫人)亡くなって3年。去年は作ってもったいないからって、うちに持ってきてたんだけど、もうはあ3年目で墓において、昨日13日に持ってったの墓においてます。(四十八燈籠は、お墓で焚くんですか?) (Ch氏夫人)あのね、あたし、聞いたの。私もここにいなかったのね。で、7時ぐらい前がな、見なきゃなんないがら来て、うちのじいさん亡くなって、で、雨だったの。ちょうどあの、雨だから、ここで燃やしている人もいるから、聞いたの。うちで燃やしてもいいですか、って聞いたら、その和尚さんは、いやそれは、墓に持ってってって言ったの。でもほら、こっちでやってる人もいるのね。人を見るのかどうかわからないけど。雨降ってるときなんて大変なの。燃やせないの。昨日なんか、つければ消えてね。傘さしてやったの。/(Ch氏)昨日は風がなかったから、3年目にしてはじめて全部ついた。48本。つかないつかない。つけたと思えば消えてる。/(Ch氏夫人)だから、もういいんだ、(全部つかなくても)いいんだからはあって。(お寺のほうで墓でやるようにと言っているんですね) (Ch氏夫人)お寺から聞けば確かだから、そっちから聞けばって。/(Ch氏)(シジュウハットウロウの燭台も)段々進化しました。



図50 シジュウハットウロウ (事例55)

この地域では、現在もタカトウロウは一般的である。13日から15日までの間、長い木の先に取り付けた電球を点灯する(図49)。16日は灯さずに撤去する。風が吹くと危ないので、早めに倒す。タカトウロウに用いる木は、盆前に早めに山に行って細く長いものを選んで伐ってきて、よく乾燥させる。今年はこの木を使って3年目になるので、だいぶ軽くなった。先端に取り付ける杉の葉は毎年新しいものに換える。準備が大変なので、次からは盆提灯で代用しようと考えている。近年は杉の木よりも便利な竹で代用する家もあると聞かすが、Ch氏は知らないという。——(杉の木の先端に)電球を下げる。/13日の迎え火から、14・15、16は倒す。灯さない。/風吹けば危ないからということで、早めに倒す。/山から切ってきた。なるべく細くて長さがあるものを切ってきた。(いまこれをされる人は少ないんでな

いでしょうかね)でしょうね。お盆までの期間が短いと木なんか乾かないでしょ。期間があればね、早めに山から下ろしてきて乾かしてね、皮はいで乾かすのであれば、ある程度は水分抜けてまるけども。今はもう三年目だからね。軽いですよ。／1年目に伐って、3年目まで使う。杉の葉は毎年新しくする。／(みんなタカトウロウをやっているようですか)やっているとすよ。(竹竿のタカトウロウは)わからない。もう一軒の家も、杉の木だよ。橋のたもとの家も一緒に(とうろうを)あげた。／大変なんだよ。次からもうハア、盆灯籠で、提灯で済ませようと思っている。

供物 13日は、小さな弁当容器に赤飯などを入れた折詰弁当形式の供物を供える。様式は家ごとに異なり、蓮の葉にパック入りの赤飯を供える人もいる。淋しい気もするが、供え物はすべて持ち帰っている。菓子だけ残す家もある。いずれにしても、供物は近年非常に簡素になってきた。孫やひ孫の代になるころには、墓参り自体しなくなるのではないかと感じている。

ホトケ送り 16日はそうめんを供え、朝早くに送る。供物をコモに包んで川に捨てたが、16日に寺院(長泉寺)に参詣した折に納める。——(Ch氏夫人)13日はいろいろ家によって違う。お菓子持って行く人もいるし、うちは新しい(仏)ので、ちっちゃいのに弁当みたいなのに、お赤飯とか、13日はね。そうしてやったんだけど、あとは、お菓子。置く人もいるのよ。お菓子を残して。でも汚れるから、うちは持ってきました。でもちょっとさみしいごもあるのよ。行ってすぐ下げて持ってくるの(笑)。／(お弁当の形にするんですね)(Ch氏夫人)私はそうしたんだけど、その家によって違います。(昔からお弁当パックの形ですか。)(Ch氏夫人)蓮の葉っぱに、赤飯とか持って行く人もいたし。ちっちゃいほら、赤飯が入って、結婚式とかに(引き出物として出るプラスチックパック)。それに入れて。／(Ch氏夫人)朝そうめんあげて、早く食べて、送ってやるように。朝そうめん。／あげてから送るときね、出すときに(こもに包んで)。前は川に投げたりしたでしょ。でもいま出来ないから、16日お寺に行くから、お寺で回収してるのね。そのときそこに持ってって捨ててます。／(回収する場所は)長泉寺。昔は流して、いい感じだったんだけど(笑)／段々そういうの(お供え)も、こちんまりと。孫ひ孫の代になったら、墓に来るがどうもわがらなからね。だんだんそうなるんでないがなあ。墓持つっていうのは大変だもんね。(2023年8月15日、自宅および墓地)

事例⑤⑥ Ci氏 昭和16年生 男性 (その夫人)

(屋内)

盆棚 屋内の盆棚は五段式である。昔はたいてい5段であった。しかし、葬儀屋が主導する昨今は、葬儀屋で使う三段のものが主流になりつつある。葬儀屋と僧侶の——(家の棚は昔から)昔は5段だと思ふ。でも今は葬儀屋さんで3段のちっちゃいのやってるでしょ。だから、今たいてい3段のを使って。うちのときだばほら、5段だったけど、いま葬儀屋さんで簡単なものがあるでしょ。変わってきてる。昔は葬儀屋さんなんて使わなかったでしょ。だけど、今はみんな葬儀屋さんが先頭に立ってやってるから、昔のしきたりが変わるみたいな感じだ。言うこと聞いて、和尚さんの言うことも聞いて。

(屋外)

盆棚 現在80歳近くになるが、墓には作った記憶はない。墓地では、土葬の時代もコモを敷いた上に煎餅を皿代わりにして供物をそなえた。——(昔は棚を作ってお供えした記憶はないですか)(Ci氏夫人)ウチさだば棚かいて、お墓さだば棚かがねんだいな。(男性)エでやる場合は、やんだけど。(棚に供物をあげた記憶は)(Ci氏夫人)うん、それはウチにやるの。(墓は)(Ci氏夫人)お墓は昔がらこうだったと思うよ。(土葬でも?)(Ci氏夫人)うんお供えものほら。コモみたいのを敷いて。そのまま。昔からまず、煎餅がお皿になってるんだよな。お皿に。せんべい置いてつんだが、こういうふう持ってきてそれにほら。やってたの。小さい今も売ってるんだけど、コモに。いろいろあると思うよ。その人の家庭によって。でもうちだば棚かぐけどお墓に棚かぐっていうのは知らないな。オランダ。／うちらもう80近くになるんだけど、記憶にない。迎え火ってほら、昔からこういうふうにして木を燃やしているんだけども。

供物 昨日、今日と雨続きなので、供物は控えめにし、お供えの折詰めを持参しなかった。例年であれば、14日のいま頃、赤飯や煮しめなどを仕切りのある折に入れて持参する。この集落では14日の墓参りが中心で、新仏のある家では13日にもお参りする。金ヶ沢では13日の夕刻からお参りが始まる。——あまり昨日雨も降ったし、あまり持ってきて溶けたりするかなあと思って、いつもだば、もっと赤飯とか煮しめ、持ってきてやったりしてるんだけど、でもはあ、雨降ったから持ってこなかったのね。(どうやって持ってきますか)折みたいのがあるでしょ。それにご飯とか、煮しめとか、区切りがついたちっちゃなパック。(その弁当のことを何と)何て言うんだかわかんないけど。／持ってきてまず、あげたらうちらが御馳走になってね。食べて帰るんだけど。／うちらはいつもだば14日にやるんだけど、ウチにもうやって、雨が降ったでしょ。だからここには持ってこなかったの。いつもなら14日の今の時間くらいに。／そこそこによって、金ヶ沢のほうだと13日夕方からだと思うんだけど、ここは新しい仏ある人なんかは13に来る人もいると思うんだけど、みんなは14日に来るから。集落によって違うと思います。(2023年8月15日、墓地)

事例⑤⑦ Cj氏 昭和18年生 男性 (その夫人 昭和24年生 女性)

(屋外)

盆棚 墓前に棚を木で組んだり、何かしらの小さな台を持参して供物を上げたりした。——(Cj氏夫人)木で作って。作ったときもあった。ただちっちゃな(台など)、何でもあるから持ってきてそれに上げてました。

盆の火 シジューハットウロウは、このあたりの地域では昔から墓地で灯している。近年は、雨天の場合には家の前で灯す人も現れてきている。——(シジューハットウロウを墓で灯す理由は)(男性)よぐわがんねえな。(Cj氏夫人)わがんないね。ムガシからこのあたりはここ(墓)でやってる。今は雨が降ったりすればえの前でやる人も出できた。

供物 このあたりでは、他地域のように弁当形式の供物を持参する人は少ない。菓子やジュースを供える程度である。——(昔は供物を持参しましたか)(Cj氏夫人)こごの人はそんな持ってこないよね。他の部落は、ある部落はあるみたいだけど。弁当みたいな。この辺はほら、盆にはお菓子とジュースとかってやってる。(2023年8月15日、墓地)



図51 盆棚(事例58)

事例58 Ck氏 昭和31年生 男性

(屋内)

盆棚 仏壇とは別に、自作の5段の盆棚を設置する。その場所は、もともと仏壇があった場所である。盆中に仏壇の扉を閉めることはない。——ここが仏壇のあった場所。だけど新しく仏壇買ったから、置き場所がこっちになって。もとは隣の部屋に仏壇があった。それは特に意味はないんだけどね。／5段の棚。まあ、その場所にあった感じで、自分で作ったやつだから。／大した意味はないですよ。／お盆の期間中、仏壇を閉めたりということはないなあ。別に開けて置いても、それは関係無いと思うな。お葬式とか、そういう時は閉めるけども。

供物 例年であれば、新盆の間は拝みに来る人が多いので供物の菓子があがる量も多い。だが今年

は雨天のために訪問客が少なかった。供物の量は例年の半分ほどである。——まあ、お菓子もあんまり今年あげなかったな。初盆のときに拝みにきてくれる人が、お菓子いっぱい持ってきてくれるんですよ。すると置くところなくなるから(笑)。だから、そういうこともあるなと思って、ほどほどに。今年雨の状態もあるしね、半分くらいしか来なかった。いまようやく晴れ上がったけど。ま、こういう感じです。

(屋外)

墓参 ちょうどいま、墓参りに行こうと思っていたが、今日は15日なので遅いほうがホトケ様も嬉しいのではないかと、あまり早く行くとホトケ様がかわいそうだと思います、遅めに行こうと考え、ちょうどいましがた墓参りに行こうと思っていたところだ。——いま、墓参りに行こうと思っていた。今日は15日だから、なるべく遅いほうがいいんでないかなと思って。あんまり早く言ったらホトケ様かわいそうだなと思って。／学校のほうの都合で早く帰るから、息子は朝早く拝んで帰って行ったけど。



図52 タカトウロウ(事例58)

盆の火 この辺りでは、多くの家でタカトウロウを行っている。ホトケ様为新盆の3年間、迷わずに来てほしいという願いを込めて12日に立てた(図52)。昔から代々やっていることなので、続けたほうがいいと思っている。13日、14日、15日がお盆なので、それに間に合うように前日に立てている。亡くなった時点で山から木を伐り、乾かして準備をしておく。今年立てているものは、父が泣くあんなときに3年間使用したものをしまっておき、今年母が亡くなって再利用した。近所にある杉の葉をとってきて十の字に取り付け、家の建物と並行になるようにする。やってくるホトケに対して十字が正面に見える向きにするのである。立てるのは親戚の人と2人がかりで行った。労力が要るので、できない家は玄関に提灯を下げて代用している。16日を過ぎれば、このトウロウは撤去する。——ホトケ様が亡くなった年から3年間、立てるわけ。これとあの、シジューハットウの灯籠と。ロウソク燃やすのも3年。ホトケ様が迷わず来てちょうだいっていうので、立てる。そうでないとどこかなあって、迷ってこれないこともあるから(笑)／これはもう、亡くなった時点で山から木をきってかわかしておくんだね。お盆に立てるように。これはもう、あれだ。おじいさんが亡くなったときに、今年おばあさん亡くなったから立てるけど、おじいさん亡くなったときにも3年立てたのを、大事にと

っておいたから。／杉の葉は其の辺にいっぱいあるからね。ただうちらほうの、建物に向けて、向きがやっぱり、こっちのように向けてやってるから。うちのほうに向けて。どっちでもいいわけでないから。／この建物に対して、十の字のいま電気がちょっとこっちに来てるけども、(家と並行に棒になるように)。／二人で建てた。まあ、村の人というより、親戚とか。俺一人じゃ大変だがら。灯籠を立てたのは、12日。13日からのお盆に入ってるから、墓参りが13日から131415って。それに間に合うようにやって。／まあ、とうろう、って言ってる。これやれない人は提灯下げてる人もいるね。玄関のあたりに提灯下げて。ここはやっぱり灯籠のほうが目立つべなあと思って、迷わずここに来て頂戴って。感じで。／これはもう、16日過ぎればもう、送り盆って言って、ホトケ様を送るわけね。そしたらもう倒してもいいわけ。／タカトウロウはこのウチは昔からこういう風にやってるから、私もやってるだけで。それはそのときの考え方で、やらなければ提灯やってもそれはそれで。やれるうちはなるべくやったほうがいいんでないがなと思ってやってるんだけど。／この辺は殆どがとうろう立てるよ。ちょっと立てるの大変だなんていうところは提灯やってるけども。

シジウハットウロウを玄関に設置している。一般的には、この集落では墓所で灯しているが、墓地が丘の上にあることから風が強く、うまく点かないので、墓参後に家の玄関で行っている。——これはハカシヨに持っていくでしよ。だけどハカシヨで風あれば思うように点かないから、ウチ帰って来てここでやって。／普通ハカシヨでもやってんだけども、ハカシヨ高いとこだから、風が当たるんですよ。で、思うように全部燃えてくれねえんだよ。だからウチ帰ってきてからもやって。(2023年8月15日、自宅)

事例⑤⑨ CI氏 昭和20年生 女性
(屋外)

盆の火 4月に父親が亡くなり今年が新盆である。玄関に提灯を下げている。下部にスイッチがあり、夕方になると点灯する。(2023年8月15日、自宅)



図53 提灯(事例59)

(22)岩手県二戸市米沢(まいさわ)

米沢の集落は馬淵川の西側、いわて銀河鉄道(旧東北本線)斗米駅を中心にひろがり、通称上米沢・下米沢に分かれている(行政地名ではない)。下米沢の共同墓地は馬淵川西岸の高台にあり、道路の舗装、除雪、除草、駐車場の整備などは墓地組合で行っている。墓地内の建物は、葬儀会場を念頭において整備したが、葬儀式場で執り行うことが一般的になり使う機会がないまま現在に至っているという。

事例の集約

【屋内】 盆棚 かつては、手製の三段の棚に金襴の布をかけた盆棚を、奥の座敷の床の間に設置した(⑥)。家に仏壇はなく、木製の戸棚の片隅に位牌をまつっていた。その戸棚のある部屋とは別の部屋に盆棚を設置した(⑥)。また、三段の既製品の棚を設える家もある(⑥)。位牌は仏壇からすべて出して祭壇に置く(⑥)。「トアゲ」といって、33年を過ぎた位牌は寺院に納める(⑥)。農作業が忙しく、近年は簡略化のために、仏壇の前に新しいホトケの位牌を出して盆棚としている(⑥)。

【供物】 家族が食べる料理と同じものを膳として毎日供える(⑥)。また、昔は小さな皿に盛ったご飯と蕎麦を毎日供えたが、やめたという家もある(⑥)。ナスとキュウリの供物は、迎える時は供えず、送り盆に供える(⑥)。盆棚の下に何かを供えるものを意識することはない(⑥)。

【屋外】 盆棚 墓前に棚は作らない(⑥)。コモも敷かず、土をならして供物を供えた(⑥)。昭和40年代頃から、盆棚として木箱を用いるようになり(⑥)、ついで墓石に付属する石製の供物台が出現した(⑥⑥)。

【供物】 赤飯や煮しめなどの料理を重箱に詰めて持参し、キャバ(柏葉)(⑥⑥)や南部せんべいを皿がわりにして(⑥)、赤飯や煮しめ、果物(早生品種のリンゴやナシなど)供えた(⑥)。昭和40年代頃から、盆棚として木箱を用いるようになり、厚手の白い紙を敷いて箱の上に供物を供えるようになった(⑥)。更に、墓石に付属する石製の供物台が出来てからは、厚手の白紙やスチロールの皿で、供物を供えるようになった(⑥⑥)。

現在は動物の害を避けるために、料理を供えてはいけないという共通認識ができた(⑥)。そのかわりに菓子や果物をあげるようになった(⑥)。料理であれ菓子であれ、あげた供物を持ち帰れば済むことなのだが、近年は供えること自体がほぼ見られなくなった(⑥)。

【飲食】 墓前飲食が行われた(⑥)。キャバ(柏の葉)の上に供えられた赤飯や煮しめ、果物などのお下がりを子どもたちが食べながら家に帰った(⑥)。家に帰る前に食べるように言われた(⑥)。

【墓参】 14日、15日である。昔は農作業を終えて夕方から墓参した(⑥)。

盆の火 13日、14日、15日、16日に迎え火を焚く。墓前で焚いたのちに、家でも焚く。使用するマツアガシ(松の根)は、父が生前に行っていたのをまねて、山から採集している(60)。

「初盆」(はつぼん)は1年間である。48本のマツアガシを庭一帯に灯した(60)。その後、48本のろうそくを立てる燭台を手作りするようになり、更に現在では既製品の燭台が5000円ほどで販売されている(60)。

ホトケ送り 送るときには、供物を新聞紙に包み、両端をコンブで縛った(60)。昭和24年頃は、ホトケを送る場所が東北線の線路上が一般的だった。特に、小さい子どもが亡くなった際には、早く歩けないのでその分早く到着できるように、早めに、線路脇の決まった場所に供物を置いてきた(60)。その後、衛生上問題視されるようになった(60)。

川に送ることもあり、流したり、水辺に置いたりした(60)。

現在は、薬師堂の近くに町内会で供物置き場を設置している(60)。二戸市の回覧板では燃えるゴミに出すことを勧めているが、多くの人はこの供物置き場に持ってくる(60)。

(付・以下は 事例60昭和3年生の女性が生まれ育った同市石切所での記憶)

【屋外】 盆棚 当地では、土葬の土盛りの上に石が置かれ、その手前に盆棚を組んで、コモを敷き、供物を供えた。土盛りは6~7つあったが、棚は1ヶ所で集約した。

供物 14日の夕方にご飯と煮染め、おかずを瀬戸物の容器に入れてカゴで持参し、手製のコモの上にキャバ(柏葉)を敷いて供えた。墓前飲食の記憶はない。

事例60 Cm氏 昭和3年生 女性

石切所で生まれ、21歳で当地に嫁ぐ その息子Cn氏(昭和25年当地生)とその夫人Co氏(昭和26年生)

(屋内)

盆棚 かつては、手製の三段の棚に打敷のような立派な布をかけた盆棚を、奥のザシキの床の間の前に設置した。当時は「仏壇などなかったから、棚を作って、供え物をして、位牌を並べた」という。常の日は、玄関からまっすぐ入った奥の部屋に、お膳などの食器をしまう大きい木製の戸棚があり、その片隅に位牌をおいていた。盆中に奥のザシキに盆棚を設えるのは、親戚まわりをして拝みに来る人達がいるからだという。しかし、近年は農作業が忙しいので簡略化をすすめ、特別な棚を作らず、仏壇の一番手前に新しいホトケを出し、故人の写真を掲げる(写真はお盆以外も同様に掲げている)。キュウリとナスを供えるが、16日の送り盆の時で、迎えるときには作らない。――(仏壇のマエに棚は)(Cn氏)うちのほうには仏壇のマエに、三段重ねづうのか。昔みたいにはやらなくなって、簡単に。(きゅうりや茄子のお供えは)(Co氏)家のほうに。(Cn氏)あれ、なんだ、送り盆のとき。だけだな。(Co氏)迎えるどぎ、ウヂのほうであげないもんな。であの、送るとき、16日にそれ入れて送るもんな。不思議だん



図54 盆棚(事例60)

だいな。迎えに行かないで、送るとき(笑)。/(Co氏)位牌は仏壇から出さないで、新しい人(の位牌)が一番、表(おもて)にいるんです(仏壇の中の一番手前に出してあるんです)。(Cm氏)ずっと前は棚かいでやったけども、今はあ、こやして。(どういう棚を作っていましたか)(Cn氏)三段にこう。(自作ですか。購入したものですか。)(Co氏)最初作ったんでしょ?(Cm氏)作ったんだ。(Co氏)今売ってるから買って来るけど。(Cm氏)打敷つが、あの、こういうのの布のものと立派だのこうやって。棚作ったんだけど、今はもうこれで間に合わせで。(簡略化のきっかけは)(Cn氏)農家だから忙しくて、やっている暇がないっていうのがあった。/(三段の棚を屋内に作っているときは、仏壇の前に棚を置きましたか)(Cm氏)違う部屋に。あっちがわさ。こっこの奥だったかなど思う。床の間だと思ふ。その前さ作ったんでねかなど思う。くず家のときの話。床の間で。座敷。(仏壇を閉めるということとは?)(Cm氏)仏壇だのなんて、ながったがら。ながったとご、棚っこかいでそごさ、台、棚っこあって、あげものして、位牌を並べて。(Co氏)食器棚とか、お膳入れておいだのさ、あの角っこさあげでだよ。大きい食器棚みたいなのが、棚があって、板の戸があって、その角っこさ位牌だけ置いたんだね。今こんな立派なの(仏壇)でないんだものね。そさただ置いたんだものね。(Cm氏)そうそうそう。(Co氏)今はこう仏壇があるけど、昔は(なかった)。(なぜ盆中は奥の間に持っていくのか?)(Cm氏)やっぱり、飾って、誰か来て拝みに、いとごの人達とが、きよ

うだいとが。拝みに来るがら。(Co氏)親戚まわりして、みんな回って歩くがら。(普段位牌を置いてある場所はダイドコと呼ばれる場所ですか)(Cm氏)ダイドゴでないな、玄関から入って、(Co氏)ジョイってのは後ろでしょ。(Cm氏)(ジョイは)奥の部屋。(Co氏)居間になるのが。玄関がら真っ直ぐのとごさ。(Cm氏)ジョイではないな。(Co氏)ジョイってのは裏側のごとを言うんでしょ。仏壇置くどごの裏…。(Cm氏)玄関入って、奥の部屋だな。二部屋あって、その奥の部屋さ置いてあったんだ。(Cm氏)普段は拝みやすい部屋に置くわけだ。普段にはね。

供物 小さな膳が供えられているが、昔は家族が食べているものと同じ膳で同じものを毎日供えた。——(このお膳は昔からのものでしたか)(Cm氏)昔はおっかい(生きている人が)食べでる膳(と同じもの)に載せて。毎日。

(屋外)

盆棚 米沢では、棚は作らず、コモも敷かず、土を平らにならしての上に「キャバ」(柏の葉)を敷いて、供物を供えた。その後、木の箱を置くようになった。木の箱を一つ置いて、その上に葉を敷いて供物を並べるようになった。Cp氏によると、木の箱を用いる理由は、お金を掛けられないことと、菓子載せるようになったからだという(菓子が食べられるようにとの配慮から)。その後、墓石の供物台が出来てからは、厚手の白い紙を一枚敷いたり、発泡スチロールの皿を用意したりして、供物を供えるようになった。

石切所では、土葬の土盛りの上に石があり、その手前に棚を組み、コモを敷いて供物を置いた。土盛りは6つも7つもあったが、それぞれに棚を組むことなく、1箇所集約した。——(昔は墓の供え物は?))(Cm氏)膳はあげないけど、ご飯はあげだと思えます。米沢でも。14日の日、あげものして。ご飯とが煮染めとが、おかずも、あげだと思。 (入れ物は何に入れて?))(Cm氏)それはあの、何かで編んだのがあって、買ったんだが作ったんだか、コモで編んだの、あれ、うちで編んだのはあれ、おばあさんとやったんだが、買ったんだがわがねけど、あれ作って、(コモさ)あげで、そのの上さ、葉っぱでながべ何がで、ご飯どが煮染めどが、きゃばだと思。それさ煮染めどがご飯どが、おかずあげで。それはま、一回だけ、毎日じゃないけども、盆の始めの日に。おらほ14日の夕方だがら。(持っていく容器は)(Cm氏)何かさ入れて、瀬戸物が何さいれで持ってったんでねが、カゴのよったのさも入れで。それがらとってあげものして。(子どものころ、あげものを食べることは)(Cm氏)石切づうどごで生まれて、21でござ来たけど、お墓から食べだづどごはねえな。(石切所では)(Cm氏)食べだづうどごはないけども、何かに食べられたのがな。多分。なぐなってる。(Co氏)うちのほうで食べだづという記憶はないよね。うちのほうはそごで食べでこないもんな。(Cm氏)食べでこながったと思。(昔は土盛りがあったでしょ。土盛りがあったら、そこを平らにしてあげものする?))(Cm氏)何がのゴザこさえて、手前に、何がの台ここさえてあった。そうしてあげものした。石、こうなった(盛りになった)のさ石あげでらんだもの、ホントの昔は。台ここやって、そのゴザみたいなあげで。それさあげで拝んできたと思。壊れんだが、燃したんだが、毎年新しいのやっと思。ある木で作ったんだと思。ちょこっと上げる分ね。土盛りひとつひとつ置かないで、1ヶ所さあげで。(Co氏)六つも七つもあっても、1ヶ所さあげで拝んだんだよな。

墓参 14日から墓参する。旧福岡、石切所は13日から墓参する。昔は農作業を終えてから夕方に墓参した。もともと、墓参の時間に決まりはなかった。いま、15日の朝に墓参しているのは、自分たちの都合を優先させたからである。——(今日15日のこの時間(朝)に来ているのは)(Cn氏)自分たちの都合。昔は午後来てたんだけど、暑くていらねんだごごに。(Co氏)ほとんど午後来るんだよね、お父さん、ね。(Cn氏)そうそう。/(簡略化のきっかけは)(Cn氏)農家だから忙しくて、やっている暇がないっていうのがあった。墓所も、畑仕事が終わって暇こになつてがら行くもんだから、時間って決まってねがったんだ。昔は晩方(ばんかた)に行った。

盆の火 迎え火といって13日の夜に焚く。14日、15日、16日は、墓前で焚いたのち、夜に家でも焚く。迎え火に使う松の根は、山から入手したものである。父が採集する様子を見ていたから、その方法を覚えた。飛行機の燃料にしたこともあると聞いている。——(火を焚くのは)(Cn氏)うちでは迎え火って、13日の夜焚くんですよ。うちでね。迎え火って。14・15・16は墓で焚いて、あと夜はうちでも焚いて。(松の根は、自分で採ってきたもの)Cn氏 たまたまウヂの親が木の根っこ山さいって採ってきたのを見てたから、切って。本当の松だがら、アブラだがら。ムガシ、燃料にといいだらしいよ。飛行機の。

新仏を迎える初盆(はつぼん)は、1年目だけである。「マツアガシ」といって、庭の通り沿いに(庭一帯に)マツアガシを48本に分けて灯した。現在では簡略化され、ろうそくを48本灯すようになった。専用の燭台が5,000円ほどで販売されているが、昔は手作りした。——(新しい仏があるときに、特別なことはしますか。)(Cn氏)ごごでは松あがして、お盆中、やるんだよな。14がな。ろうそく48だが、松あがしていって、48本にわけて。燃してあるいたの。庭の通りさ。ひとつひとつ置いて。庭の全体にあの。今はもう省略してそういうのねえがらさ、ろうそくさ火つけるんだけど。(今もろうそくでやっていますか)(Cn氏)やっていますね。(48本立てるものは売ってるものですか)(Cn氏)昔は作ったんだけど、今は売ってる。5,000円ナンボ、って。(Co氏)初めてお盆迎える仏さんがあればね。初盆(はつぼん)ね。1年だけ。

供物 この辺り(二戸市米沢、福岡、石切所)では、墓参の際には、赤飯や煮しめなどの料理を作って墓前に供えたものである。それらの料理は重箱で持参し、南部せんべいを皿がわりにして墓前に供えたと記憶している。

墓前飲食 かつては墓前で飲食したが、現在はクマやカラスを警戒して、料理を供えてはいけないという共通認識が生まれた。動物にイタズラされる前にすぐに持ち帰れば済むことだが、供物を持参する人は、全くといっていいほど見なくなった。かわ

りに、菓子や果物を上げることに変化したが、最近は菓子すらあげないケースが多い。

石切所では、14日の夕方にご飯と煮染め、おかずなどを、瀬戸物の容器などに入れてカゴで持参し、それらを手作りのコモの上に「キャバ」を敷き、その上に載せた。21歳で米沢へ嫁いだが、出身地の石切では、あげものを取って食べた記憶はない。——(煮しめなどの料理を墓に持ってくるんですか)(Co氏)いまはあげるなっていうことになって、持って来ないけども、上げで、持ち帰ればいいけどがらね。お菓子とかも、持ち帰ればいいことなんだけども、昔はそういうふうによっぱり、食べるもの上げていったの。カラスが来ていたずらするからね、今はあげないけど。(昔はこのあたりでは)お供えするんですよ。(持参方法)(Co氏)今はトレーっていうか、そういうのに入れて。昔はスノコっていうの。ああいうのに上げてとか、さまざま。昔は重箱だったんだもんだへが。だって容れ物ないんだもんね。(Cn氏)編んだのさ置いていったんでねが。(Co氏)この辺では編んだのスノコ使わないよな。あの、煎餅なんがさあげながった？煎餅。南部せんべいって、昔、あれをお皿の代わりにして。やっぱり重かなんかに入れてきたんだがね。んでお皿に。代わりに。/(お供え物は売っていますか)(Co氏)誰もお供えはあげないよ。(Cn氏)お供えは自分のところにお盆用の御馳走を持ってきてあげだったの。それがなくなると、お菓子になった。(Co氏)果物とか。果物に変わって。いまなかなか赤飯とかここまで持ってこないよ。(Cn氏)だから食べるもの一切、持ち帰りしてくださいって。(Co氏)だってクマとかほら。出るからってね。カラスとか。すごく。変わってきましたよ。/(いつ頃から持ってこなくなりましたか。)(Co氏)最近ホントみないよな。何十年って見たことないよ。(Cn氏)お菓子もここ何年かで全くあげなくなつたもんね。(Co氏)あげて持ち帰ってもいいんだけども、やっぱりはあ、持ってこない。(みんなで食べたことは)(Co氏)おやつとか、お菓子食べたりしたことあったけど、もう持ってこないから。/(Co氏)青森のほうはどうですか(お供えしたものをみんなで食べています)(Co氏)じゃあ重にいれなきゃなんないものね。やっぱり全然違うね。私もここで生まれたけど、そういうのは全然ながった。こっちのほう、町場とか、ね。こっち農家の人多いからなんだか、ね。忙しい、農作業とか忙しいから、そんなのあまり作って持ってこなくなった。(逆に町のほうの人のほうが…？)(Co氏)暇っていうか、ね。暇なんだものね。(こっちは)誰もでも持ってきてる人ないね。見たことないね。この米沢(まいざわ)では。

ホトケ送り 送る場所は、東北線の線路上である。小さい子どもが亡くなったときには、子どもだと早く歩けないので到着できないといけけないので、その分早めに送らないといけけないと言われていた。それで、線路脇の決まった場所に置いてきた。Cm氏が当地に嫁いできた昭和24年ころには、この風習は一般的だった。Cm氏自身、生後7～8ヶ月ほどの子どもを一人亡くしており、線路に送った経験がある。この習俗は、ある一時期の習俗であった。また、衛生や環境の視点で問題視されるようなことはなかった。川に送るときは、川の舟に乗せるといって、川に流したり、川辺に置いたりもした。現在は流すことができないので、今日は今からCn氏が、墓地の係として薬師様の左側の角に供物置き場を作るのだという。Co氏はこれを「現代版」という。回覧板には、燃えるゴミに出すようにとの市役所からの通知があるが、殆どの方は薬師様の前の供物置き場に持って来るといふ。薬師の左側の角に作る。——(Co氏)で、送るどごも面白いんだよね。線路、汽車に乗せて。川の舟こに乗せるって、川のほうに送ったり。汽車、線路の、この東北線のそばに持ってって送ったりしたんだよね。(Cm氏)ちゃんと新聞紙さくるんで両方、昆布で結んで。(Co氏)川に流すつうが、流すまではしないでないが、置いてきたの。(Cn氏)崖さ置いてきた。(Cm氏)何だが、むがしは、小さいこども歩げねんではあ、早めに送らねば行げねえどがって、ちょっと時間早めで、ちせえこども死んだどぎは。ゆつたもんだ。(Co氏)ゆつくり送るのでねぐ、そつちさ着げねばだめだがらって。(Cm氏)ちせえ子ども歩げねえがら早めに、なぐなればな。(興味深い話です。汽車だと早い？)(Cm氏)何か、あどがら片付けだんだべども、線路の縁さな。置いだ。置くどごみなしてはあ、決まってで置いだんだもの。(Co氏)送ったんだよな。そういう時もあった。(Cm氏)一時、そういう時もあった。(お母様が何歳くらいの時ですか。)(Cm氏)嫁に来てから、だから。(Co氏)やっぱり子どももおばあちゃ(Cm氏)、一人亡くしてるがら。お父さん(Cn氏)の妹、ね。亡くしてるがら、やっぱりそうしたがもね。何ヶ月、八ヶ月だが七ヶ月。(Cm氏)うん、うん。(Co氏)子どもなぐしてるがら、やっぱりそういうふうにしちゃったのがもね。線路だと、汽車に乗っていぐように。がもな。汽車に乗っていぐようにね。(Cm氏)そのあたりはまだいがった。みなして、線路の縁さ置いだ。(Co氏)置いでも、うるさくないがらね今環境とかあれでうるさいんだけど。(他の人も線路に置くような風習があった？)(Cm氏)そうそう。同じぐみなしてそごさおいだ。(Co氏)ここは米沢(まいざわ)線路が通ってるがら。米沢は。(とても興味深い話です。線路で送るっていうのは。)(Co氏)うん、そごそごによってみなあるから。線路のそばさ。(Cm氏)置いだ時期ある。(Co氏)そういう時期あったもんね。(Cm氏)時期あった。/(川にも流したっていう)(Co氏)川にも送ったときあるよね。(Cm氏)うん。やったときある。流してやっんだ。その前は川さ、花どがほら。うん。(Co氏)今ナガされないから、お父さんがこれから作るの。(Cn氏)部落中、どごだりゴミさ出したぐねえ人はそこさ。役場で来てもってけるがら。(2023年8月14日、自宅)

事例⑥ Cp氏 昭和28年生れ 男性 米農家 文中**Co氏**は前項昭和26年生、女性
(屋内)

盆棚 仏壇の前にビスで組み立てられる三段の棚(購入品)を据える。位牌は仏壇からすべて出して棚に置く。——(Cp氏)だいたい、この辺では33年「とあげ」っていうって、33年過ぎると古い位牌はお墓に持って行って入れるっていう習慣があるけど、今はもうやってないみたいだけさ。だいたい33年しか見れないってごとき。その次あ37年50年ってあるけど、そごまで見れる

人はながながいという。33年もみだらいがべってごどで、33回忌のどぎにだいたい。こっから持ってって。ハカシヨさ埋めて。(Co氏)うちはもう手抜きでやらない。位牌を出すひともいる。うちは位牌全部出さないうちなの。そのまま、一番新しい仏様を前に出しておく。(Cp氏)うちは一番新しいのの写真を居間に置いている。で、位牌はうしろに。(Co氏)家々で違うごった。うちは位牌出したことないもの。

供物 (お供えは?) 父母が生きていたときは小さな皿にご飯や蕎麦を入れて毎日供えたが、現在はしていない。また、盆棚の下方に何か別の供え物をするということもない。——昔、じいちゃんばあちゃんがいたときは毎日供えたけど、今はできない。ちゃっこい皿にご飯いれたり、蕎麦入れたりって。とがつうのはありましたけど、今は、やれない(笑)。やれない。やってるごどもせああるべども。(段の下に何かあげることは?)うちはない。

(屋外)

盆棚 Cp氏が小学生か中学生のころから、菓子を供えるようになり、盆棚として木の箱を設置し、その上に厚手の白い紙を敷いて供物を置くようになった。

供物 「キャバ」(柏の葉)に、赤飯や煮しめ、果物(りんご: 早い時期に採れる品種、なし)などを供えた。

飲食 子どもたちはそのお下がりを食べながら家に帰った。家に帰る前に食べるように言われた。——(Co氏)お宅でさ、赤飯とか昔持ってきてあげた?(Cp氏)あげだあげだ。あの葉っぱ葉っぱ。キャバ。柏のそうそう。死んだ人のお堂が下にあったときに、葉っぱ。ごはんとお供えと。赤飯と、普通の作った煮しめみたいな。そういうもの。果物とか。梨とか。りんご(早い時期に取れる品種)。(こもは)敷かない敷かない。(このあたりはコモを使わず、棚も作らないということですか?)じかに葉っぱおいてね。(土を)平らにしてね。それから木の箱になったの。木の箱ひとつおいて、それに乗つけるように。昔はカネかけないからね。(Co氏)買いにも行かないんだものね。(Cp)行かないよ、そうそう。お菓子のつけるようになって、木の箱にのつけないと、食えないじゃない。それで子どもたちがそれを食べながらウチへ。帰るマエに食えよ、と。だってねえ。あんなおいしいのないんだもの。(お菓子置くようになったのは)中学校かな、小学校かな。それぐらいじゃない。(墓石の供物台の上には白い紙を一枚のせて、供物を置く?)(Cp氏)結構厚い白い紙だよ。(Co氏)発泡スチロールの皿を持ってきてあげている人もいる。



図55 盆棚(事例61)

(その他) このあたりでは33回忌で「とあげ」(吊り上げ)といって、古い位牌を墓に納める。(2023年8月14日、自宅)

3. 考察

3.1. 屋内の盆棚

(1)棚の構造の変化

(従来の報告)ミソコガ(味噌桶)の上に板を置くものが一般的で、キシネバコ(米櫃)を台とするものもあった。板の上にはゴザなどを敷いた。その後、五段や三段の階段状の盆棚が用いられるようになったとされる。

(今回の調査)ミソコガを用いる家は皆無で、現在は五段または三段の棚、もしくは大きめのテーブルを祭壇とする家が多い。調査からは、ミソコガ→五段の棚→三段の棚という変遷が想定された。現在、五段の棚を用いている家(衣更⑳)はまれで、三段の棚を用いるところが圧倒的に多い(三沢淋代、下田⑮、田子⑰⑱、五日市㉓、小舟渡④④、不習④⑥、世増団地④⑧、目時④④)ことが、その変化を物語っている。

五段の棚は、かつて自宅での葬儀の祭壇としても利用された(小舟渡④⑧、扇ノ沢⑤⑤)。しかし、近年は自宅葬が行われなくなり、大きな祭壇の必要性が薄れたことで、自宅での年忌供養で用いるコンパクトな三段の棚が盆棚に用いられるようになったようである。実際、三段の棚は新しい(様式である)と証言する人がいる(小舟渡④⑧)。

また、リンゴ箱を積み上げた棚を使ったという事例(五日市㉓、目時④④)もあり、五段の棚とあわせて、いずれも手作りの棚であった。対して、三段の棚はほぼ既製品である。手作りから既製品の購入へと移行した。

三段の棚は殆どの場合、葬儀をきっかけに葬祭業者等を通じて購入されている。盆棚の変化には、葬祭業者の積極的な関与がみられることがわかった。不要になった盆棚をきょうだいに譲ろうとしたところ、他人に譲るものではないと、業者から諫められたという話も聞いた(小舟渡④⑤)。

一方で、五段から三段の棚に変更したものの、既製品を真似て手作りしたものを使用しているという家もある(扇ノ沢⑤)。この家では四十八燈籠も手作りしている。少ないながら、盆棚は自製するものという意識も受け継がれている。

なお、階段状の棚を使用する理由として、数多くの供物を置けるからという証言があった(不習④)。親類縁者が新仏のある三年間弔問するホトケ拝みの際に持参される供物の量が多いからであり、また、礼儀としてその供物を開封して展示公開すべきであるという意識に基づく(夏坂⑩、五日市③③、扇ノ沢⑤⑤)。贈答品を展示公開する特別の棚を設置する家もある(夏坂⑩)。今後は、人付き合いが希薄になりホトケ拝みが衰退するとともに供物の展示公開の規模も縮小することや、盆行事自体が簡素化される傾向にあることから、三段の棚もいずれ簡素化に向かうものと考えられる。実際、テーブルを盆棚として用いるケースが各地でみられた(下田⑬⑬、遠瀬⑳、小舟渡④④、相畑⑤⑤、目時⑥⑥、二戸米沢⑥⑥)。小舟渡④④では、以前は五段の棚を用いていたという。以上から、ミソコガ→五段の棚→三段の棚→テーブルという変遷の過程が想定される。

(2)周囲の構築物の変化

(従来の報告)

この地方では、**a.**竹柱を棚の四方に立てる形式、**b.**竹柱を棚の後方に鳥居状に3本組む形式があった。竹材はコンブで縛り、竹柱の先には盆花をゆわえ、めぐらした縄あるいはヨコに渡した竹竿に供物を下げたという記述が、小井川潤次郎の著作にみえる。しかし、昭和中期以降に編纂された自治体誌には、十和田市史、新郷村誌を除き、どのような供物をどう吊るすのか、記述が見られない。新郷村誌にある「モナカでできた飾り物」とは、色や形、飾り方について記されておらず、津軽や下北で用いられる「とうろう菓子」に相当するものであるか、わからない。

(今回の調査)

「かつて三本の竹を組んだ」(遠瀬⑳)、「さまざまな供物を吊した」(細谷⑤)という証言は得られたものの、現在もなお上記の形態の構築物を見ることができたのは、全事例中、三戸町泉山③⑥1件だけ(竹柱ではなく木柱)であった。非常に貴重な事例である。また、四本の竹を盆棚の奥の左右に2本ずつ束ねて上部に盆花を結び、盆棚の脇の壁に立てかけておくもの(衣更②)がみられた。この家の祖父の意向を反映したという。四本柱が変化した事例である。

(3)設置場所の変化

(従来の報告)

設置場所は靈魂観を知る上で重要な要素だが、今回参考にした従来の報告書群には記述がみられない。

(今回の調査)

仏壇とは別に祭壇を設ける事例が多く(細谷⑤、夏坂⑩⑩、衣更②、蛇沼⑤、五日市③③、法量、小舟渡③③④④、世増団地④④、扇ノ沢⑤⑤)(過去の事例:二戸米沢⑥⑥)、盆中は仏壇を閉じる(夏坂⑩、泉山③⑥、法量、世増団地④④)、位牌を出して空にする(下田⑬、西越S集落⑦、二又②②、世増団地④④)という事例がみられた。これは元来、盆棚が仏壇とは別に設けられていた状況を示唆すると考えられる。なかでも、部屋の「縁側寄りに設置する」(衣更②、泉山③⑥)という事例、「窓寄りに設置する」(世増団地④④、扇ノ沢⑤⑤)事例が目される。これらは、盆棚が古くは屋外に設置されていたことを示している可能性がある。

盆棚の移動の過程を示すものとして、「仏壇の脇に設置する」(二又②②、扇ノ沢⑤⑤)、「仏壇の前に設置する」(下田⑬⑬、遠瀬⑳、小舟渡④④、相畑⑤⑤、目時⑥⑥、二戸米沢⑥⑥)事例がみられた。このように南部地方では仏壇に限りなく接近しつつも、未だ完全には一体化していない状況が見受けられた。津軽地方では「仏壇の盆棚化」が一般化していることと対照的である。しかし、仏壇の前に引き出し式トレーを置く(小舟渡③③)という状況もみられることから、津軽地方同様、今後は供物の簡素化などの要因も伴いながら、更に一層、「仏壇の盆棚化」が進むものと予想される。

3.2.屋外(墓地)の盆棚

(1)棚に対する認識の変化

(従来の報告)

昭和14(1939)年の時点で、棚を設ける場合とない場合とがみられたことが、小井川潤次郎氏の著作かわかる。昭和50年代なかばころには棚が見当たらなくなったという(階上町)。

(今回の調査)

多くの墓地で、墓石と一体化した供物台があり、盆棚として用いられている。しかし、墓石と一体になった供物台は、盆棚として認識されておらず、「墓石に供物台があるので」盆棚は不要になった、という言葉が行われている(下田⑩、小舟渡③③)。

つまり、盆棚を用いないというのは、「四本柱形式の墓棚を」用いないという意味である。そのような意味で、「棚はあったが、現在は見られなくなった」と語る人もいる(小舟渡③③④④、不習④④)。盆棚があったのは土葬の頃(下田⑩)、50年ほど前まで(不習④④)だという。四本柱形式の盆棚は、確かに今回の調査でも確認できなかった。しかし、木製の低い棚(既製品を含む)や、コモの直置きなどであれば、少ないながら確認された。

一方、「棚を見たことがない」という昭和16(1941)生まれの事例(扇ノ沢⑤⑤)を始め、土をならして地面に供物を直置きしたという証言もあった(目時⑥⑥、二戸米沢⑥⑥)。小井川潤次郎の記述とあわせて、当地方では必ずしも盆棚を設えたわけではないことがわかる。

(2) 棚の形態の変化

(従来の報告)

墓地の棚は「ホカイダナ」(十和田市、下田町、名川町)と呼ばれた。又のある木の枝、または竹を4本立て、横木を渡したものであったことが小井川潤次郎の著作からわかる。一方、自治体誌における記述は棚の有無に限られ、形態にまで言及するものは非常に少ない。地面に直接コモを敷く場合もあったというが、これを盆棚として扱ってはいない。

(今回の調査)

かつては、木や竹の棒を組んでコモを掛けるもの(下田⑪、小舟渡⑫、扇ノ沢⑬)や、木箱(二戸米沢⑭、昭和40年代から)の時代があったという証言を得た。屋敷墓のある時代には一つ一つの墓それぞれに棚を設けたという(不習⑮)が、一方で土葬の土盛6~7つに対して棚は1つで集約した(二戸石切所)という証言もある。

現在は木や竹の棒を組む形式は皆無だが、木製の低い棚を設える事例が比較的少ないながら確認される(細谷、遠瀬)。その他、新聞紙の上に木の板をのせるもの(五林)、コモを地面に置く(扇ノ沢⑯)などの形態もまた盆棚のバリエーションの一つである。これらは主に墓石に付属する供物台のない家で行われている。

3.3. 供物

(1) 運搬具(行器)の変化

(従来の報告)

小井川潤次郎によれば、当初はコモがホカイの運搬具だった。その後、重箱に変わったという。重箱が一般的になった時期は不明だが、記述の時期から昭和30年代初頭には重箱が一般的であったと考えられる。しかし、その後の変化については、各自治体史で言及されていない。

(今回の調査)

コモで運搬したという話は聞くことができなかったが、かつては重箱で用意し墓前でコモの上に移し替えた(小舟渡⑰、相畑⑱、二戸米沢⑲)、瀬戸物の容器に入れてをカゴで持参し、柏葉(キャバ)の上に移し替えた(二戸石切所)、蓮の葉に包んで持参した(小舟渡⑳)という過去の事例についての証言があった。

現在では、保存容器に入れて墓前で茶碗に移し替える(小舟渡㉑)という事例もみられるが、折詰で運搬し、そのまま供えるという方法が一般的である。

(2) 敷物と器の変化

(従来の報告)

敷物は、昔から屋内外ともに「コモ」が一般的であった。大きさは約77×50cmと巨大であったことが小井川潤次郎の著作からわかる。器として、マチでは主に蓮の葉、ムラでは蓮、柏、桐、葡萄などの葉がうつわとして利用された。その後の利用の変化については記されていない。『青森県史 民俗編 資料 南部』に折詰(容器)への言及が見られる程度である。

(今回の調査)

コモの多くは市販品が用いられている。ただし、代わりに新聞紙を使用したり、白い厚手の紙を使用する例がみられた。また、コモを使用せずに直接供物を置くという事例(目時㉒、二戸米沢㉓)も、南部地方で古くから見られたようである。

器は、葡萄の葉(夏坂㉔)、蓮の葉(蛇沼㉕)、柏の葉(二戸米沢㉖㉗)が利用されたというが、現在ではプラスチックの使い捨ての折(弁当容器)が一般的である(各地の共同墓地、淋代㉘、小舟渡㉙㉚、世増団地㉛、扇ノ沢㉜㉝)。植物の葉から折詰への過渡期の形態として、蓮の葉の上にパックの赤飯をのせる事例がみられた(扇ノ沢㉞)。下北半島地域でみられる「折詰の中にブドウケバを敷く」方式に類似している。

一方で、折詰方式すら廃止に向かっている現状も観察された(小舟渡㉟㊱)。しかし、「折では供えない」(南郷㊲)という証言や、スーパーにおいて墓参用折詰弁当のラインナップや数が津軽地方ほど充実していないこと(例えば南郷村のスーパーでは「お供え膳」の名称でわずか3パックだけ売られていた)などの事実もあわせて、この地域で折詰方式が、いつごろから、どの程度普及したのか(しているのか)、を考える必要がある。各地の共同墓地を観察する限り、折詰方式は現在、津軽・下北地方と同様、南部地方でもかなり一般的である。

この地方独特の形態として、白煎餅を皿がわりにする事例が確認された(五日市墓地、小舟渡㊳、二戸米沢㊴)。白煎餅の発展型として、白い円形の紙皿に赤飯などの料理をのせるケースが見られた(五林墓地)。スチロールの皿も用いられている(二戸米沢㊵)。

(3) 供物の内容の変化(①熟饌)

「ホウガイというのは仏さまに供物を供げることで、精霊棚に供げると同じ物だった」102)というように、屋内でも屋外(墓前)でも、捧げられる供物は、基本的に同じである。ここでは、屋内・屋外(墓地)ではなく、①熟饌・②生饌にわけて記す。

(従来の報告)

赤飯、ニシメ、キュウリモミ/キュウリの酢の物、ナスヤキ、ソバアエモノ/ソバと豆モヤシの酢味噌和えなど、サヤマメ/枝豆、カボチャの煮付け、天ぷら、うどん/ハットウ/ソバハットウ、麩餅/ケアモツ/ケモチ、生麩、麦餅、コンニャク、豆腐、テン

などが挙げられる。しかし品目のみで、供えられ方の情報は乏しく、『青森県史 民俗編 資料 南部』に「供物(下田町木崎)」のタイトルでカエバに赤飯などがのる写真が1点掲載されている他はない¹⁰³⁾。

(今回の調査)

屋外の棚に熟饅を供えるのは1日目の墓参の折に限られるが、屋内の棚には朝・昼・晩三度(蛇沼^{②⑥}、西越S集落^{②⑧}、相畑^{④⑤}、世増団地^{④⑧})家族と同じ料理を供えたという。盆の料理をはじめ、一切は女性の仕事であり(下田^⑭、西越S集落^{②⑧}、五日市^{③③}、小舟渡^{④④⑨})、「休むヒマもなかった」という(西越S集落^{②⑧})。

料理の内容は、従来の調査報告が充実しているのでここでは特に注目すべき点のみ記す。赤飯や煮染め、テン(心太)、胡瓜の酢の物などが一般的であることは変わらないが、従来の報告にも「天ぷら」が入っているように、この地方では供物の中に天ぷらを入れる点が、特色のひとつであると見受けられた(淋代^③、下田^{⑨⑬})。天ぷらを「必ず入れる」(淋代^③)という証言もあった。また、麩餅(ケモチ)とは、小麦粉を塩水で洗って得られるいわゆる生麩の残り汁を煮詰めたものであるが、これを現在も供えている事実や証言は得られなかった。そのかわり、墓地に「焼き麩」が供えられている光景が確認された(小舟渡墓地)。より入手が容易な品に形を変えて受け継がれていると考えられる。

(4)供物の内容の変化(②生饅)

(従来の報告)

小井川潤次郎によれば、八戸では「生のままで供えられるものは青物、果物のある限りの物だった。そのうち欠かさぬものに縞瓜と百合があつた。枝豆も必ず用意された」¹⁰⁴⁾という。各自治体誌による報告をまとめると次のとおり(※「テン」は生饅ではないが、ホトケの持ち物に喩えられることから、他の道具とともにここに含めた)。

ホトケの鏡=テン/カガミテン、トコロテン、**ホトケのシヨイナ**=背負い縄=コンブ、**ホトケの船**=ユリネ、**ホトケの杖**=カド/コウホネ(の根)、**ホトケの数珠**=ハマナス(八戸市)、**ホトケのアタマ**=地リング(シ布林ゴ・アマリング)、**ホトケの枕**=キュウリ/マウリ(マクワウリ、モリオカキンカ)/シマウリ、**ホトケの牛馬**=ナスとキュウリ。ナスとキュウリについては、更に角を割り箸でつけるものや、尻尾をとうもろこしの毛であらわすものがみられる。一方、ナス、キュウリは足を付けて牛馬にしない(八戸市)というところもある¹⁰⁵⁾。他にもさまざまな旬の野菜や果物が供えられる。

(今回の調査)

その時節に手に入る旬の野菜や果実が中心であることに変わりなく、お盆にあわせて収穫するために植える(小舟渡^{④⑨}、目時⁵⁴⁾)という家もみられた。しかし、従来の報告と比べると供えられる生饅の種類・量ともに減少傾向にある。今回の調査では、ホトケの乗り物であるナスとキュウリ(後述)、ホトケのシヨイナである「コンブ」(淋代、世増団地^{④⑧})、ホトケの舟である「百合根」(百合根(小舟渡^{④⑨})、ソバの苗(小舟渡^{④⑨})、カド(淋代、下田^⑮)を確認した。カドは中国製の模型(合成樹脂製品)が小売店で販売されており、実際にそれを供えているケースがみられた(細谷墓地、下田^⑮)。入手しにくいものは、模型化が進んでゆくと考えられる。百合根とカドについては、それぞれ「ホトケの舟である」(小舟渡^{④⑨})、「ホトケの杖である」(下田^⑮)という説明が聞かれた。

ナスやキュウリについては、爪楊枝や割り箸で足をつけ、牛または馬になぞらえ、ホトケの乗り物であるとするところが多くみられるのは本県全域で一般的であるが、この地方の特色として、「キュウリには足をつけるが、ナスにはつけない」(下田^⑮)という事例や、特に三沢市北部では、ナスやキュウリの牛馬を作らず、野菜の形態のまま供えている様子が多数確認された(淋代、細谷の各共同墓地)。従来の報告でも、上北地方の事例としてナスやキュウリの牛馬を作らないことが記録されている¹⁰⁶⁾ことから、三沢市北部周辺では、牛馬になぞらえられる以前の姿が伝承されていると捉えることも可能かもしれない。しかし、以前は牛馬で供えていたが簡略化されたという逆の事情も考えられるので、検証が必要である。ちなみに、ナス、キュウリに加え、形状が類似する「バナナ」が1本、供えられている光景も散見された(淋代共同墓地)。

(5)無縁仏への饗応

(従来の報告)

無縁仏についての言及はほぼ見られず、祭壇の脇か下に別に供えるという記述が2件あるのみ。

(今回の調査)

無縁や餓鬼は意識していない(目時^{⑤④}、二戸米沢^{⑥⑥})という場合が多いが、盆棚の右下の床に無縁仏への施しとみられる供物が置かれている光景が確認された(泉山^{③⑥})。もともと意識がなかったか希薄だったか、忘れられたのかは明らかでない。

3.4.飲食

(1)墓前飲食の変化

(従来の報告)

「墓前で酒を飲む」「墓地で供物を食べる」などの記述が、上北郡の町村誌および青森県史叢書『小川原湖・三本木原大地の民俗』にみられるほかは、積極的な記述はない。

(今回の調査)

かつては、盛大に墓前飲食が行われていたことが確認された(淋代^②、小舟渡^{④⑨}、相畑^{④⑤}、扇ノ沢^{⑤⑤}、二戸米沢^{⑥⑥})。夜遅く

ことを物語っている。

一方で、簡素化・簡便化や防災の観点から、裸の火の使用をやめ、提灯(電灯)で代用する家も現れている(小舟渡⑬)。町営の墓地では、自治体から迎え火を控えるよう通達があり、やめる家が多くなったという話も聞く(遠瀬⑱)。公営ではない共同墓地(ムラの墓所)でも、火災予防の観点から、迎え火を自粛する動きがある(淋代墓地)。この共同墓地では、かわりに共同の火焚き台を墓地の入口に設置した。家ごとに個別化した火が、背景や動機は異なるが、形式的には共同性を回復した点に注目したい。かつては、火を囲んで隣近所の墓の家族同士が夜遅くまで語り合う姿がみられた(下田⑬)。しかしコロナ以降はその光景も途絶えた。盆の火が取り持つ人と人とのつながりが、失われつつある。

(2)燃料の変化

(従来の報告)

松の根が最も一般的で、杉の葉、シラカバの樹皮、ワラ、麦カラなども用いられた。

(今回の調査)

「昔はどの家でも採集した」(夏坂⑰)という「松の根」が現在も一般的で、現在も自家で採集するか(夏坂⑰、小向⑲、二戸米沢⑳)、商店から購入して(下田⑩、小向⑲)用いる。杉の葉や木(下田⑨⑫)も利用され、ホトケ送りではコモを燃やす場合もある(下田⑩)。松の根を中心として、現在も多様な燃料が用いられている。

(3)まじないの伝承

(従来の報告)

迎え火/送り火で握り飯を焼いて食べると無病になる、中気にならない、度胸がつく、厄除けになるという伝承があり、その場で食べて無病息災を祈るほか、焼いた握り飯を保存しておき、虫歯や腹薬の妙薬とした。また、馬や子どもに火を跨がせると健康になるという伝承があった(馬の場合は、これを「盆乗り」という)。

(今回の調査)

上記に準ずる内容は、聞くことができなかった。

(4)タカウロウ(高燈籠)の習俗の変化

(従来の報告)

タカウロウ/トウロギ/トウロガイと呼ばれ、長い杉の木の棹(ホケ)の先端の葉だけを残して十字に横木をわたり、横木の両端にも杉の葉を取り付け、燈籠を高く掲げる習俗である。八戸では、明治初頭以前までは棹の根元に青竹を結び、赤や青の色紙を付けたという¹¹²⁾。新仏のある家で3年間行われる。古くは7月1日に立てたが、次第に7日に移行し¹¹³⁾、その後の各自治体誌の報告では、7日のほか、13日や16日に立てるといふ事例が記される。時代の推移とともに実施時期が遅く、期間も短く変化した経緯が読み取れる。

(今回の調査)

タカウロウと呼び、新仏のある家で3年間灯す。集落の人々にとっては、「ホトケ拝み」(新仏)に訪問する際の目印ともなっていた(淋代①)。

杉の先端に取り付ける枝葉の部分は、毎年新しいものに変え(扇ノ沢⑤⑧)、十字が家屋と平行になるように取り付ける(扇ノ沢⑥)のがきまりだといふ。様式そのものには変化はないが、明かりだけは電化されている。材は、山から伐採した杉材が使用されるが、近年は竹を利用したものが出現しているという(寺院による情報)。杉の棹は3年間使用するが、これを次に死者が出たときに再利用する場合もある(扇ノ沢⑥)。杉の木は伐採直後は重いため、水分がよく抜けた過去のタカウロウを保管し再利用することは合理的である。といっても長大な棹の設置や撤去には、親戚や隣人との協力が不可欠である(扇ノ沢⑤⑧)。新郷村戸来では、設置は12日、点灯は13・14・15日、撤去は16日である(扇ノ沢⑤⑧)。

タカウロウの習俗は、かつて南部地方の広域でみられたが、現在も行う家庭や地域(淋代①、細谷⑦、相畑④、扇ノ沢⑦)は非常に少ない。「以前はよく見かけたが現在は行われなくなった」(遠瀬⑳)というように、廃れてしまった地域が多い。最大の理由は労力である。前述のように、杉の木の伐採と生木を立てる作業には、時間とエネルギーが必要である。筆者は前年の約東どおり当地を訪れたところ、「気力がなく断念した」と伝えられたことがある(細谷⑦)。近年は、タカウロウの代替として玄関先に提灯を吊り下げるケースが確認されており(淋代①、扇ノ沢⑤⑧⑨)、調査時にタカウロウを立てていた家でも、「次からは提灯で代用したい」(扇ノ沢⑤)という声が聞かれた。

タカウロウの習俗が、もともとなかった可能性のある地域もある。「シジウハットウロウは行うが、タカウロウは行わない」というケースが多く地域でみられた(蛇沼②⑥、小向⑲、五日市③③、小舟渡③③、世増団地④⑦⑧)。かつて南部地方の全域で行われていたものかは、不明である。

(5)シジウハットウロウ(四十八燈籠)の習俗の変化

(従来の報告)

シジウハットウロウ/シジウハットウ/マツトウガイにはさまざまな形態があるが、共通するのは48の灯をともし点、新仏のある3年間(または1年)行う点である。

形態にはさまざまなものがあった。小井川潤次郎の著作には、現在ではほぼ消滅した古い形態が記録されている。**【A】家の柱と柱との間に板のアーチを渡し48本の蠟燭を立てる**(114)、**【B】若松が四方八方に枝分かれしている箇所の上を切り取り、土に挿して立て、松の根を48本灯す**(115)、**【C】2尺ほどの木の棚に平らな石をのせ、松の根を焚く**(116)、**【D】ボール箱に砂を盛り、線香を48本立てる**(昭和22年)117)。事例Dは終戦後、蠟燭や松の根の入手が困難であったための代替策であった。

一方、各自治体の報告書には、**【E】48個の石の台に松の根やろうそくを48本燃やす**、**【F】墓地から自宅までの道沿いに48本の灯をともし**、**【G】24本ずつを墓地と自宅に分けて灯す**(田子町)などの事例が記される。

そして、近年の一般的なスタイルは、墓地あるいは自宅で、**【H】専用の三段型燭台**を使用する形式である。

設置場所は、自宅の門口や玄関、墓地の事例が多く、墓地から自宅の道沿い、寺の境内などである。近年は設置したものを放置することはマナー違反の感があるが、昭和20年代の記録では片付けられることはなく、翌年の盆まで墓地に放置されることが通例であった(118)。

(今回の調査)

多くは「シジューハットウロウ」、地域により「シジューハットウ」(扇ノ沢^⑤)と呼称している。新仏のある家で3年間灯すことには変わりなく(淋代^④、夏坂^⑩、西越S集落^⑰、相畑^④、目時^⑨、扇ノ沢^{⑤⑦})地域によっては、3年または1年(目時^⑨)、1年(二戸米沢^⑥)というところが見られる。すなわち新盆(初盆)の期間である。

設置場所は、墓地(蛇沼^⑥、扇ノ沢^⑤)や自宅の前(淋代^④、夏坂^⑩、蛇沼^⑥、扇ノ沢^⑤)が一般的で、なかには、「玄関の中」で行う家もみられた(小向^⑨)。子どもたちを喜ばせるためだといひ、ある種の娯楽的要素が確認できる。この心意は、盛岡や紫波町などで行われている「シジューハットウ」の電飾(新盆に家屋を電球で装飾する行為)へと通じる。更に、屋内の盆棚の脇に設置して行う家庭もあった(淋代^④)。

燭台は現在、4500円～5000円程度で既製品が販売されており(田子^③、二戸など)、既製品の利用が一般的であるが(夏坂^⑩、蛇沼^⑥、目時^⑨、二戸米沢^⑥)、なお手作りする家もある(扇ノ沢^⑤)、昔は自家製が通例であった(二戸米沢^⑥)。それ以前は、従来の報告でいえば**【F】**の様式、すなわち墓地から家までの道すがら、細く切った竹を地面に刺して蠟燭を灯したという証言(遠瀬^⑩=昭和30年代末ころまで)や、**【I】**庭一帯に48本のマツアカシを灯した、という従来の報告にはない様式(ただし県境を挟む二戸米沢^⑥の事例)で行われた。

既製品を用いる場合にも、民衆の知恵や工夫が加味されている。例えば、火持ちをよくするために、蠟燭を立てる48本のピンにティッシュを巻くというアイデア(五日市^③、扇ノ沢^⑤)が見られる。また、燭台をアルミホイルやタンで覆う(五日市^③、扇ノ沢^⑤)、または蠟燭を立てる48本のピンそれぞれに、キュウリのスライスを1枚ずつのせる(蛇沼^⑥、五日市^③)などの工夫は、燭台を汚さないためのアイデアである。これらの新しいアイデアは、南部地方の集落間で飛び火のように伝播している。

工夫の背後には、死者供養に際しての故人への敬意と、供養にまつわる道具を大切にしたいという心意がある。3回忌を終えても、シジューハットウの燭台を大切に保管し、4年目も同じ燭台を使って焚くことにしたという事例(夏坂^⑩)はそれを物語る。

しかし、手間と時間にかかる習わしであることから、若い世代では敬遠されがちである(蛇沼^⑥)。48本の蠟燭に点火すること自体手間にかかることだが、墓地では風や雨などの天候により着火と火の維持が難しく、とりわけ雨天時には傘を差しながらの点火作業になる(扇ノ沢墓地)。風雨により、点けた蠟燭が次々と消え、48本すべてに点火することは困難である(前述のティッシュを巻く工夫はこの問題解決のアイデアである)。更に、地域によっては、管轄する寺院の住職から「宗旨にそぐわない」との指摘を受けたために、家で代々受け継がれてきたシジューハットウロウの習わしを今年からやめた、という家もある(三戸郡某集落)。他の集落でも、「宗旨に合わない」と和尚から指摘され、当惑したという声を聞いた(三戸郡某集落)。この集落では、前任職の時代にはそのようなことは言われなかったが、住職が代替わりしてから言われるようになったのだという。自分とは異なる世界の解釈や表現のありかたに対して、不寛容な世の中になっているようである。「天気が悪いときには墓地ではなく家で焚きたい、と和尚に相談したが墓で焚くように指示された」という声も聞かれた(三戸郡某集落)。この習俗の継承は非常に厳しい状況に置かれているようである。

3.7.ホトケ送り

日時、場所、作法の変化

(従来の報告)

16日とするところが圧倒的である。中には16日に神社の祭礼があるために15日に送るといふ事例がみられた(蛇沼^⑥)。

送る時刻は、朝や午前中、あるいは昼食後である。朝や午前中に送る場合、早く送らないと恐山に向かう他のホトケに遅れる、遅れるとホトケが泣く、などの理由付けがなされている。昼食後に送る場合は、そうめん／うどん／オヒナガ(オヒナガは、およそウドンのこと)などをホトケに供えて(食べさせて)から送る。

あの世へ帰るホトケには、ミヤゲを持たせる。きなこをかけたセナガアデモチ、キンカモチ(カマスモチ、バオリモチ)、麦餅などが一般的である。「コビリいっぱい持たせる」(119)という意識がある。

送る場所は、山や川(堰)が多く、そのほか海、道ばた、村はずれ、墓地、田、馬頭観音の元に送る事例がみられる。1990年代後半の調査では、当時川や海に流せなくなったために、墓地に捨てるようになったとの記述がある(120)送る際には、供物をコ

モに包み、両端をホソメ(コンブ)で結んで流すのが通例である。下流でそれを拾い集める人々がいたという。

(調査の結果)

16日(淋代①、下田⑨、遠瀬⑳、西越S集落㉗㉘、小向㉙、五日市㉚、扇ノ沢㉛)とする所が圧倒的で、15日に送るという三戸町蛇沼本村のケースは珍しい(蛇沼㉜)。

送る時刻は、朝早く(扇ノ沢㉛)、昼よりも前(五日市㉚)、昼食後(下田⑨⑪⑬⑮、西越S集落㉗、小向㉙五日市㉚㉛)などである。朝や午前中に贈る場合、「送りごはん」と称して厚揚げの煮物、黒豆の煮豆、故人の好物などを朝食に供える(五日市㉚)。昼食後に送る場合は、「オヒナガ」と称して(西越S集落㉗)、ソウメン(下田⑨⑪⑬⑮、西越S集落㉗、五日市㉚)、うどん(五日市㉚)、ソバ(西越S集落㉗)などの麺類を供えて(食べさせて)から送る。

また、朝食や昼食の他にオヤツが必要だという意識があり、セナカアテ(小舟渡④⑤)、キンカモチ(西越S集落㉗㉘、五日市㉚)、うどん(小舟渡④)、串餅(小向㉙)、饅頭(小向㉙)、そしてパン(下田⑮、五日市㉚)といった小麦粉製品をはじめとして、団子(西越S集落㉗、小向㉙)、いなり寿司(五日市㉚)、赤飯サンド(五日市㉚)などが供えられる。南部地方の食文化を反映している。また、故人の好物、例えば牛乳、よもぎ、煎餅(五日市㉚)餅、あんみつ、パンケーキ(五日市㉚)などが供えられる。一方で、送り盆に特別なものを供えることはしない(五日市㉚㉛、泉山㉜)という地域もみられる。従来の調査では仏のミヤゲとして、セナカアテやキンカモチなどの伝統的な郷土食を挙げるものが多いが、実際はパンやパンケーキなど洋風の粉食のほか、故人が好きだった菓子や飲み物など多様な飲食物が供えられ、ミヤゲは多様であることが確かめられた。

送る場所は、かつては山(下田⑮)や川(下田⑮、遠瀬㉚、世増団地④⑧、扇ノ沢㉛、二戸米沢⑥)や海(小舟渡④⑤)であった。海をわたってホトケが帰るといったイメージがあるのだという(小舟渡④)。現在も川に流すという証言も非常に少ないながらもあったが(小舟渡④)、現在はできないので「ゴミに出す」(下田⑮、小向㉙、小舟渡④⑤⑧、小舟渡④)、寺や墓所に持参する(遠瀬㉚、小向㉙、扇ノ沢㉛)、町会で決めた供物置き場(二戸米沢⑥)に持参して処分してもらうというケースが圧倒的である。自治体はゴミとして出すことを推奨しているが、多くの人は供物置き場に持ってくるのだという(二戸米沢⑥)という証言からは、供物を一般ゴミとして廃棄することへの抵抗感が未だ根強いことを物語っている。

「列車の線路上に送った」というユニークな事例があった。昭和20年代には東北本線の線路上の特定の場所に送ったというのである(二戸米沢⑥)。特に幼くして亡くなった子どもの場合は、早く歩けないのでその分早く到着できるように早めに線路上に送ったという。

送る際には、袋や新聞紙で包んでからコモに包み(下田⑮、五日市㉚)、コモの両端をコンブで縛った(世増団地④⑧、二戸米沢⑥)。コモ包みの中には、前述のホトケのミヤゲのほか、花や果物、線香やろうそくなどを入れた。小舟渡④では、お小遣いとしてお金を入れたという。そして、流す際には「振り返ってはいけない」(小舟渡④)のだという

近年は、「ゴミ減量のため」(小舟渡④)、コモに包まずに廃棄する家庭がある(小舟渡④⑧)。そもそも供物を供えるのにコモを用いないようである(小舟渡④⑧)。

おわりに

本稿は「盆棚」に焦点をあわせ、青森県南部地方の22集落、76名から現地でお話を伺い、自治体誌編纂に係る公的な記録の不足を補うとともに、記録以降の変化や現状について記録し考察した。対象を狭義の盆棚に限定せず、諸々の祭祀装置と時空間全体との有機的関連において「盆棚」を捉えるために、さまざまな事象を含めて記録した。得られたデータに基づく考察の結果は以下のとおり。

盆棚の形態や設置場所は、本県の自治体誌において積極的に記録されてこなかった。特に設置場所は日本人の霊魂観の変遷を考える上で注意すべき重要な要素であるにも関わらず、本県の自治体誌では、ほぼ言及されていない。今回の調査では、屋内空間における盆棚の設置場所について、縁側寄り、窓寄り、仏壇の脇、仏壇の前といった事例が確認された。これらの多様性の解釈は今後の課題だが、祭祀場所が屋外に近い縁側寄りから仏壇に接近・収束してゆく過程(歴史)を読み取ることができるとも考えられる。津軽地方や下北地方ですでに一般的になっている仏壇との一体化と比べると、仏壇に限りなく接近しつつも完全に一体化した例は、南部地方において現時点では非常に少ない。

屋内の盆棚の形態の変化については、ミノコガ+平板という古い形式から、5段・3段の階段状の祭壇を経て、テーブルの使用の一般化や、仏壇との一体化(仮設の盆棚の消滅)の徴候がみられた。しかし、階段状の祭壇はホトケ拝みの際に持参される供物の公開のための展示什器としての役割があり、根強い人気がある。ゆえに今後の変化は、ホトケ拝みの動向と連動すると考えられる。人と人との繋がりが薄れ、ホトケ拝みの機会が減少していくならば、供物の数も減少する。このことは、階段状の盆棚の必要性に影響を与えるものと考えられる。また、祭壇の「段数の変化」(五段から三段へ)には、葬儀の変化(自宅葬の衰退)と、葬祭業者の積極的な関与が明らかになった。

屋外の盆棚については、墓石とは個別に設置される仮設・臨時の盆棚はまだ見られるものの非常に少なく、4本の木を組んだ形態は皆無であった。一方で、墓石とトータルコーディネートされた常設の供物台が盆棚として用いられているケースが非常に多く見られた。これを以て「盆棚はなくなった」とする認識が一般的である。一方で、仮設の盆棚すらそもそも用いられていな

かったことを示唆する事例がみられた。小井川潤次郎が昭和14年の時点で棚を設けない場合があることを記しているが、古い時代の屋外の盆棚のありよう(有無を含め)について考える余地がある。

棚と不可分の関係にある供物について、まず容器については、津軽地方と同様、当地方でも自然の素材(植物の葉)から樹脂製容器(折詰)への変化が顕著にみられた。樹脂製の容器を葉の上にのせるという事例には、過渡期にある心情が反映されていた。樹脂製容器への移行は津軽地方においては概ね昭和40年代であると考えられるが、当地方での移行の時期については調査で明らかにならなかった。今後の課題である。

次に熟饅については、地域の食文化を反映して小麦粉製品が津軽下北地方と比べて非常に盛んに用いられており、供物の容器にも白煎餅が用いられている。小麦粉使用の延長として、天ぷらが用いられることも、当地方の特徴の一つであることがわかった。一方、生饅については、当地方の特徴として百合根とカド(コウホネの根)を供えることが挙げられる。それぞれ、ホトケの舟、ホトケの杖に見立てる。また、上北地方北部では、ナスとキュウリに足を付けずに供える状況が多数確認され、本県全域で一般化している「牛馬」の見立てが、他地域から持ち込まれる以前の状況を示唆しているのではないかと考えられるが、今後の検証を待ちたい。

墓前飲食については、現在も縮小された形で根強く行われている。ただし、現在は供物の持ち帰りが常識となり、熟饅を供えるべきではないという意識も一部の集落で共通認識として広まっている。青森県立郷土館の調査報告によれば、すでに昭和50年代には子どもたちによる競争を伴う供物の取奪と飲食が、衛生上の観点から問題化されていたようである。衛生・環境志向の高まりから、今後は更に墓前飲食の習俗が縮小されるものと考えられる。

かつては、「墓地が供物で多少散らかってもよい」「カラスなどの動物が来て食べてもよい」という考えであったことは、過去の写真や記録が物語っている。鳥獣が食ふこと、草木の栄養になることもまた、先祖以外のさまざまな存在へのたむけ＝ホカイであったはずである。墓に設えられた祭祀装置も、翌年まで放棄され草が生い茂る状況であったと、小井川潤次郎が記している。ところが現在は、「カラスが食べたり、供物が散乱したりすることは、よくない」という考えに変わった。墓地は整然と区画され、雑草ひとつ生えることも、墓石がコケむすことも、あたかも怠惰の象徴であるかのごとく語られるようになった。盆は、さまざまな存在との交流の機会ではなかったか。この変化は、心情的な面での大きな変化である。

墓参については、天候や高校野球の放映時間などを考慮する現実生活重視の傾向が見られ、服装もカジュアルになっているが、毎日の墓参を欠かさないという集落が多くみられた。

そして墓参の際には必ず火(松の根が一般的である)が焚かれている。盆の習わしが継承されている姿が確認された。一方で、火災予防の観点から、墓前での迎え火を緩やかに禁止する自治体や町会が現れている。更に、墓前の火を囲み、近くの墓同士で夜遅くまで語り合う姿も、コロナをきっかけに途絶えたという事例もある。盆の火がとりもつ人と人とのつながりが失われつつある現状が確認された。ただし、前述の共同墓地での個別の火の使用の禁止と同時に、共同の火焚き台を設けてそれに代える動きもある。家毎に個別化した火が、背景や動機が異なるとはいえ、形式的には共同性を回復した点に注目したい。

当地方の盆の火の習俗では、タカウロウとシジウハットウロウが特徴であると言える。前者は多くの地域で習俗が失われ、今回確認できたのは新郷村戸来の集落だけであった。後者については、小井川潤次郎が6種類もの多様な様式を報告しているが、現在は既製品の影響により1種類に収束している。既製品の導入には、葬儀会社・仏具店の積極的な関与が窺われた。しかしながら、既製品の使い方には、キュウリの輪切りやアルミホイル、ティッシュペーパーを巻くなどの民衆の知恵と工夫が加味されており、集落間でそのアイデアが伝播している様子が確認できた。また、火を多数灯すという習俗には、岩手県北で行われているシジウハットウの電飾に通じる、娯楽的な要素があることが確認された。この娯楽的要素は、今後この習俗が現代生活の中で伝承されていく動機として重要であると考えられる。一方で、寺院からの指導(宗旨にそぐわないという指摘)により、やめざるを得ないという状況も生まれており、この習俗の継承にマイナスの影響を及ぼしている。異なる世界の解釈や表現のありかたに対して、不寛容な世の中になっているようである。

ホトケ送りについては、県境を越えるが同じく盛岡藩領である岩手県北部で、今回非常にユニークな事例が確認された。東北本線の線路上に送るといふ事例である。これは昭和20年代の一時期のものだが、特に子どもの場合には歩くのが遅いので、汽車に乗って早く到着できるようにという心意によるものであったらしい。

以上のように、今回得られたデータと従来の調査報告書のデータを比較することで、習俗の変化が明らかになると同時に、これまでの調査報告書では記録されていなかった事象が明らかになった。盆棚を中心とした祭祀の場がどのように生成変化を遂げてゆくか今後も注目したい。

謝辞

お盆のお忙しいなかお時間を割いて貴重なお話を聞かせてくださり、御教示いただきました地域のみなさまに、心から御礼を申し上げます。西郊民俗談話会では、皆様から御指導と御助言を賜りました。記して御礼を申し上げます。

後注

- 2)柳田國男1946『先祖の話』(柳田國男1988『柳田國男全集』第十五巻所収)
- 3)たとえば七夕の棚は「地上から離れて建てある建物がたなで、其形式の空中に立て上つたものがさずき、即、屋根のないやぐらの形」(折口信夫1930-1932「年中行事-民間行事伝承の研究-」,折口博士記念会編1955『折口信夫全集』第十五巻p.62)であるということからすれば、地面に直接接する板や置き石は棚とはいえないが、ここでは同じ機能や目的を持つものとして一緒に扱う。
- 4)対象となる「盆棚」について、「精霊祭りのために特別にしつらえられた祭壇」が常識的な定義ではあるが、その範囲を定めることは難しいことから、「常設の魂棚」(柳田國男)を含め、先祖、無縁など仏の種類にかかわらず「いかなる形のものであろうと盆の精霊祭りの祭壇すべてを盆棚」であると定義した(高谷重夫1988「盆棚の類型」高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』pp.5-6)
- 5)拙稿2021「青森県下北・上北地方の盆棚」『青森県立郷土館研究紀要』第45号pp.111-144
- 6)最上孝敬、藤井正雄、伊藤唯真、喜多村理子、高谷重夫など 7)喜多村理子、高谷重夫など
- 8)関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館編2015『盆行事と葬送墓制』p.28 9)高谷重夫1988「盆棚の類型」(高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』p.5)
- 10)本稿における「南部地方(地域)」とは、『青森県史 民俗編』にならい、八戸市、十和田市、三沢市、三戸郡、上北郡地域を指す。加えて、隣接する岩手県北地域、秋田県鹿角地域についても多少の聞き取りを行い、言及している。
- 11)拙稿2021「青森県下北・上北地方の盆棚」『青森県立郷土館研究紀要』第45号pp.111-144
- 12)関沢まゆみ2013『戦後民俗学の認識論批判』と比較研究法の可能性』『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集
- 13)小川直之2015「列島の民俗文化と比較研究」関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館『盆行事と葬送墓制』pp.191-195
- 14)藤井弘章2019「和歌山県高野町の盆棚」近畿大学民俗学研究所2019『民俗文化』第31号pp.1-75、藤井弘章2020「和歌山県橋本市の盆棚」近畿大学民俗学研究所2020『民俗文化』第32号pp.65-120
- 15)小池淳一2019「盆棚と菓箱-救出した文化財から『歴史』を考える」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第214集pp.269-283
- 16)小井川潤次郎1939『盆の精霊たち』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』所収)、小井川潤次郎1947『七日盆』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』所収)、小井川潤次郎1947『八戸の盆行事』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』3所収)、小井川潤次郎1957『盆の真菰の上ののるもの』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』所収)
- 17)『青森県史 民俗編 資料 南部』第五章 年中行事)では、小見出しとして「ハガハライ」「七日盆」「盆の休み日」「寺参り」「マツアガシ」「盆棚」「ホゲ・ホカイ」「仏拝み」「送り火・迎え火」「燈籠・四十八燈籠」「送り盆」「盆踊り」の12項目を立てている(同書p.299-302)。
- 18)小井川潤次郎1957『盆の真菰の上ののるもの』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』所収)p.168
- 19)小井川潤次郎1947『八戸の盆行事』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』所収)p.124
- 20)小井川潤次郎1939『盆の精霊たち』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』所収)p.148
- 21)同上p.148 22)前掲注19p.124 23)同上p.124 24)同上p.124 25)前掲注18p.169
- 26)小井川潤次郎1947『七日盆』(小井川潤次郎著作集第七巻『南部の民俗』p.126 27)前掲注19,p.159
- 28)青森県史編さん民俗部会編2001『青森県史 民俗編 資料 南部』p.299、青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室編2001『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』p.122 29)青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室編2001『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』p.123 30)前掲注26p.138
- 31)前掲注19p.159 32)前掲注26p.138 33)前掲注18p.165 34)前掲注19p.159 35)青森県史編さん民俗部会編2001『青森県史 民俗編 資料 南部』p.299
- 36)同上p.288 37)前掲注20p.151 38)前掲注19p.159 39)前掲注18p.165 40)前掲注20p.151 41)前掲注18p.165 42)前掲注20p.151 43)同上p.151
- 44)前掲注19p.160 45)前掲注29p.123 46)同上p.123 47)前掲注18p.169 48)前掲注20p.150 49)前掲注19p.159 50)前掲注19p.165 51)前掲注18p.165
- 52)前掲注18p.165 53)前掲注20p.150、前掲注18p.169 54)前掲注18p.169 55)前掲注35p.301 56)前掲注29p.123 57)前掲注18p.168
- 58)前掲注18p.170、前掲注20p.151 59)前掲注35p.299 60)前掲注35p.288 61)前掲注20p.151 62)前掲注18p.165 63)前掲注18p.165
- 64)前掲注20p.150 65)前掲注20p.151、前掲注19p.159、前掲注18p.165 66)前掲注18p.165、前掲注19p.159 67)前掲注29p.112
- 68)八戸市史編纂委員会編2010『新編八戸市史 民俗編』p.386 69)前掲注35p.299 70)前掲注19p.160 71)前掲注19p.124
- 72)工藤祐2008『青森県南部地方の方言・民俗(資料集)』第三巻p.1871に収録されている諸文献での説明を総合すると、このような意味の方言である。
- 73)前掲注26(七日)p.124、前掲注19p.157 74)前掲注19p.124 75)前掲注20p.152 76)前掲注20p.151-152、前掲注19p.160 77)前掲注19p.160
- 78)前掲注19p.160 79)前掲注19p.158 80)前掲注19p.160 81)前掲注35p.301 82)前掲注35p.301 83)前掲注29p.123 84)前掲注20p.152
- 85)前掲注29p.112 86)前掲注35p.301 87)『角川地名大辞典』編纂委員会編1985『角川地名大辞典 2 青森県』p.407 88)前掲注87p.851
- 89)平凡社編1982『日本歴史地名大系 2 青森県の地名』p.52 90)前掲注89p.463 91)前掲注89p.394 92)前掲注87p.382 93)前掲注87p.457
- 94)前掲注87p.123 95)前掲注87p.848 96)前掲注87p.442-443
- 97)青森県立郷土館1989『青森県立郷土館調査報告第24集・民俗-12「世増・畑内の民俗」調査報告書』p.1 98)前掲注87p.127 99)前掲注87p.919
- 100)前掲注87p.841 101)筆者が「シジユウハットウ」と言ったら、地元では「シジユウハットウロウ」と呼んでいるとのことであった。
- 102)前掲注20p.150 103)前掲注35p.288 104)前掲注20p.151 105)前掲注18p.165 昭和32年 106)前掲注29p.112 107)前掲注19p.158
- 108)青森県立郷土館1989『青森県立郷土館調査報告第13集・民俗-6 小舟渡の民俗』pp.89-95 109)前掲注35p.301 110)前掲注35p.301
- 111)前掲注29p.112 112)前掲注19p.157 113)前掲注19p.124 114)昭和14年、前掲注20p.152 115)昭和14年、前掲注20p.151-152、前掲注19p.160
- 116)前掲注19p.160 117)前掲注19p.160 118)前掲注19p.158 119)前掲注29p.124 120)前掲注35p.301

(文献)

- 伊藤唯真1978「無縁霊とその祭碑」伊藤唯真1984『仏教と民俗宗教』国書刊行会
- 伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編『講座日本の民俗6年中行事』有精堂出版
- 大島建彦1960「先祖と無縁仏」西郊民俗談話会編『西郊民俗』第十三号
- 大島建彦編1988『無縁仏』岩崎美術社
- 折口信夫1930-1932『年中行事－民間行事伝承の研究－』(折口博士記念会編1955『折口信夫全集』第15巻中央公論社所収)
- 何彬2012「沖縄と福建の中元節・お盆の異同」国立歴史民俗博物館・松尾恒一編『琉球弧－海洋をめぐるモノ、人、文化－』
- 何彬2013『中国東南地域の民俗誌的研究』日本僑報社
- 喜多村(小松)理子1976「新仏の祭り－新設される棚の設置場所を中心として－」早稲田大学民俗と歴史の会編『民俗と歴史』
- 喜多村(小松)理子1977「盆棚のいろいろ(一)」日本常民文化研究所『民具マンスリー』9巻11号
- 喜多村(小松)理子1977「盆棚のいろいろ(二)」日本常民文化研究所『民具マンスリー』9巻12号
- 喜多村(小松)理子1985「盆に迎える霊についての再検討－先祖を祭る場所を通して－」『日本民俗学』157・158号
- 小井川潤次郎1939「盆の精霊たち」『小井川潤次郎著作集 第七巻 南部の民俗』
- 小井川潤次郎1947「七日盆」『小井川潤次郎著作集 第七巻 南部の民俗』
- 小井川潤次郎1947「八戸の盆行事」『小井川潤次郎著作集 第七巻 南部の民俗』
- 小井川潤次郎1957「盆の真菰の上ののるもの」『小井川潤次郎著作集 第七巻 南部の民俗』
- 小井川潤次郎1959『大館村誌』
- 小池淳一2019「盆棚と葉箱－救出した文化財から『歴史』を考える」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第214集
- 桜田勝徳1960「無縁仏をめぐる問題」西郊民俗談話会編『西郊民俗』
- 新谷尚紀2003「盆」新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編『暮らしの中の民俗学2 一年』吉川弘文館
- 鈴木満男1972「盆にくる霊－台湾の中元節を手がかりとした比較民俗学的試論－」『民族学研究』37巻3号
- 関沢まゆみ1999「長老衆と死・葬・墓」新谷尚紀ほか編『講座 人間と環境 第9巻 死後の環境－他界への準備と墓』昭和堂
- 関沢まゆみ2013『戦後民俗学の認識論批判』と比較研究法の可能性』国立歴史民俗博物館研究報告』第178集
- 高谷重夫1985「餓鬼の棚」高谷重雄1995『盆行事の民俗学的研究』
- 高谷重夫1988「盆棚の類型」(高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』所収)
- 高谷重夫1988「もらいまつり－盆行事の一問題－」日本民俗学会編『日本民俗学』第174号
- 田中久夫1979「盂蘭盆会・餓鬼神・田の神」『御影史学論集』5集
- 藤井弘章2019「和歌山県高野町の盆棚」近畿大学民俗学研究所『民俗文化』第31号
- 藤井正雄1971「無縁仏考」『日本民俗学』74号
- 最上孝敬1960「無縁仏について」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号
- 最上孝敬1975「盆の祭り」『月刊文化財』142号
- 柳田國男1946『先祖の話』,柳田國男1988『柳田國男全集』第十五巻
- 青森県環境生活部県史編さん室編1999『馬淵川流域の民俗』
- 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課 県史編さん室編2001『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』
- 青森県史編さん民俗部会編2001『青森県史 民俗編 資料 南部』
- 青森県史編さん通史部会編2018『青森県史 通史編3 近現代 民俗』
- 青森県立郷土館編1982『「小舟渡の民俗」調査報告書』(年中行事と信仰・阿部達 執筆)
- 青森県立郷土館編1989『「世増・畑内の民俗」調査報告書』(年中行事と信仰・大湯卓二 執筆)
- 青森県立郷土館編1990『「西越・田中の民俗」調査報告書』(年中行事と信仰・大湯卓二 執筆)
- 下田町誌刊行委員会編1979『下田町誌』
- 新郷村史編纂委員会編1989『新郷村史』
- 小井田幸哉編1983『田子町誌』下巻
- 十和田市史編纂委員会編1976『十和田市史』下巻
- 中道等1967『三沢市史』下巻
- 名川町誌編集委員会編1995『名川町誌』第二巻 本編Ⅱ
- 南部町誌編纂委員会編(小井田幸哉監修)1995『南部町誌』下巻
- 正部家奨編1977『階上村誌』
- 山崎俊哉1969『三戸郷土史』
- 福地村編さん委員会編2005『福地村史』下巻
- 八戸市史編纂委員会編2010『新編八戸市史 民俗編』
- 「日本の食生活全集 青森」編集委員会(森山泰太郎ほか)編1986『聞き書き 青森の食事』